ふを思ふに詞に巧もなく姿に色品もかざらず、只さら〳〵とよみ流して而も心深し」と、つゐで、曰はく「猶深き奥もやあらんと、延寶九年の頃より骨髓にとほりて物みな心にそむく事なく、やゝ五とせを經て貞享二年の春、まことの外に俳諧なしと思ひまうけしより其の飾りたる色品もかの一句のたくみもことごとく失せてそれは〳〵皆そらごとゝなりぬ」と。彼が俳風の期せずして正風と同轍に出でしを見るべし。蓋し社會の風調が既に不自然なる貞門及び談林に飽きて、幽玄眞摯なる作風を東西に呼び起せるものと見るべきか。

青麥や雲雀があがるあれさがる
遠う來る鐘の歩や春霞
春の水ところ〳〵に見ゆるかな
鶯が梅の小枝に糞をして
麥蒔や妹が湯を待つ頬冠り
時鳥馬追船頭お乳の人
涼風やあちらむきたる亂れ髪

水鳥の重たく見えて浮きにけり

但し彼は未だ芭蕉の大才と並立すべき價値あるものにあらざりければ、奇は奇、雅は雅なりと雖も、その風盛なる繼承者を得ず、元文三年七十三歳にして沒せる後は、俳壇ひとり正風を稱する勢となりぬ。

芭蕉の門下千有餘、このうち、最も名あるものを、榎本其角、服部嵐雪、森川許六、向井去來、立花北枝、杉山杉風、志田野坡、内藤丈草、各務支考、佐分利越人等の十哲とす。各一方に將として亞流を率ゐ、その風都鄙に行る。（十哲とは許六等の自ら稱せる語とも思はる。釋千那、天野桃隣、濱田洒堂の如きもこの内に數ふる説あり。）

夏の夜や蚊をきずにして五十兩　其角
聲かれて猿の齒しろし峯の月　同
名月や疊の上に松の影　同
曉の反吐は隣かほとゝぎす　同
元日やはれて雀のものがたり　同
ぽつ〳〵と喰摘あらす夫婦かな　嵐雪

梅一輪一輪ほどのあたゝかさ　嵐雪
隠れ家やよめ菜の中に交る菊　同
手の上にかなしく消ゆる螢哉　去來
應々と云へど叩くや雪の門　同
尾頭の心もとなき海鼠かな　同
四條から五條の橋や朧月　同
佛法を裸にしたる產湯かな　許六
取りつかぬ心で浮ぶ蛙かな　同
春雨やぬけ出たまゝの夜着の穴　丈草
片枝に脈や通ひて梅のはな　同
春雨や枕くづるゝ謠ひ本　支考
掃き掃除してから椿ちりにけり　同
猫の戀初手からないてあはれなり　野坡
春の夜は誰か初瀬の堂籠り　曾良

山寺に米搗くほどの月夜かな　越人
見かへれば白壁いやし夕霞　同
帆柱の并ぶや霧の向ひ島　北枝
池の星またはら〳〵と時雨かな　同
身の上をたゞ萎れけり女郎花　涼菟
子や啼かんあまり雲雀の高揚り　杉風
がつくりと拔けそむる齒や秋の風　同
客は誰乳母が處に青簾　尙白
ある僧のきらひし花の都かな　凡兆
長々と川一筋や雪の原　同

芭蕉は此の如き多くの弟子を後にし、元祿七年十二月大阪に沒す。年五十一。爾後高弟其角が輕妙洒脫なる風は江戸座となりて湖十、淡々等を出し、嵐雪の雅風は雪門と稱して吏登、寥和、周竹等を出し、凉菟が伊勢派には乙由以下あり、支考の美濃派には廬元以下あり、互に相競うて門戸を張り、談林の末派もこれ

に加はりて都鄙句作の隆盛を來しぬ。

談林

遠乘や鞭は柳のあり次第　沾德
つひこけて寢よとの鐘や花の蔭　同
一間の床は牡丹にのまれけり　不角
三度めの雪なん只の雪のくれ　同

江戸座

春二つ見おろす富士の一夜かな　淡々
澤蟹は蠢くに蜘蛛の冬ごもり　同

雪門

入月の跡はおぼろの蛙かな　吏登
めき〳〵と長閑になりぬ麥畠　同

伊勢派

浮草や今日はあちらの岸に咲く　乙由

俳諧流行の理由

閑古鳥我も淋しいか飛んで行く　同

美濃派

相宿のものうき蚊帳の斬かな　盧元
南天や雪の花ちる手水鉢　巴靜

この外難解なるもの、卑俗なるもの、次第に邪道に赴きて覺らざる作者も多々輩出せり。

此の如く俳諧俳句が都鄙の間に盛に弄ばれし理由に二つあり。一は俳諧が拘束甚だゆるき平民文學にして、特に發句は十七字の短詩なるが故に、如何なる者にも入り易き文學なるが爲なると、二は連歌以來の遺風に從つていつしか點取堵物の弄を生じ、多くの宗匠なるものあらはれて、いたく太平の庶民の遊戯心を挑發せるものありしとによる。恰も平安朝の當時に歌合が作歌の隆盛を成せしに比して見るべし。されど歌合が眞文學の創作に禍せしと同じく、此の遊戯はいとゞしき俳諧をしていよ〳〵邪路に迷はしめ、今後數十年間の流行は量に於て優に元祿を凌ぐものありと雖も、質に至つてはその價値

甚だ少く、一二の正風を外にしては唯これ點取俳諧の滔々たるを見るのみに止れり。

第五節　浮世草紙

元和偃武以後數十年、世は泰平にして、庶民漸く風流婬卑の傾を生じ、娯樂遊宴の道盛なるに至るや、まづこれを反映して表れたるものは井原西鶴の浮世草紙なり。舞臺は大阪、對手は町人、遊里下層の放逸を題目として之を赤裸々に描寫せらる所、形は前期京都の啓蒙文學より出でゝ、然も全く性質を異にせるものなり。

井原西鶴

西鶴は松壽軒、又二萬翁と號す。大阪の人。俳を西山宗因に學び、談林の驍將として奇警世人を驚かせり。されど其の才はむしろ小說にありしものゝ如く、師宗因の沒せる天和二年、始めて「好色一代男」八卷を出せり。これ彼が四十一歲の時なり。こは平安朝の世の人情小說源氏物語の飜案と覺しくて、光源氏に當るべき世之介が幼きより年ゆくまで、多くの女に關係せる嬌猥なる小話を綴り合せたるもの。本の體裁は假名草紙と同じく、挿繪は蒔繪師源三郎の筆と云ふ。內容は敎訓啓蒙の重々しきに反して、遊蕩好色の輕快洒脫、よく元祿大阪の遊子氣質を描寫せるは小說界に一紀元を劃せるものと云ふべし。

好色一代男

はづかしながら文言葉

文月七日の日、一とせの埃に埋もれし鐵行燈の油さし、机、硯石を洗流し、ずみわたりたる瀨瀨も芥川となしぬ、花は金龍寺の入相の鐘、八歲の宮の御歌もおもひだされ、世之介もはや小學に入るべき年なればとて、折ふし山崎の姨のもとに遣し置きけるこそ幸ひ、むかし宗鑑法師の一夜庵の跡とて、住みつづけたる人の、瀧本流をよくあそばしける程に、師弟の契約させて遣しけるに、手本紙さゝげて、はゝかりながら文章を好まむと申せば、指南坊おどろきて、さはいへ、如何書くべきとあれば、今更馴々しく御入候へども、堪へかねて申しまゐらせ候、大方目つきにても御合點あるべし、二三日跡に姨樣の晝寢をなされた時、こなたの絲卷を、在るとも知らず蹈わりました、少しもくるしうござらぬと、御腹の立ちさうなる事を腹立候はぬは、定めて我に忍うで言ひたい事が御座るか、御座るならば聞きまゐらせ候べし、と永々と申す程に

師匠もあ[illegible]されはてゝ、此迄はわざと書き續けても、はや鳥子も無いと申されければ、然らば、なほ〳〵書をと望みける、又重ねて便もあるべし、先是にてやりやれと、大方の事ならねば笑はれもせず、外にいろはを書きて、之を習はせけり。夕陽端山に影暗く、迎の人來りて里にかへれば、秋の初風はげしく緊木に爭ひ、衣擣つ槌の音物かしましう、はしたの女まじりに横箒を放して、戀の染衣是は御寮人樣の不斷着、この瞿麥の腰形、梔子色の主や誰とたづねけるに、それは世之介樣のお寢衣と答ふ、一季をりの女、そこ〳〵に疊みかけ、さもあらば京の水では洗はいでと、罵るを聞きて、垢なれしを手にかけさすも、旅は人の情といふ事ありと申されければ、下女面目なく、返すべき言葉もなく、只御ゆるしと申捨て逃入る袖を控へて、此文ひそかにおさの殿かたへと賴まれけるほどに、何心もなう奉つれば、娘更に覺もなく赤面して、いかなる御方より取りてつかはしけると言葉あらけなきを鎭めて後、母親かの玉章を見れば、隱れもなく彼御出家の筆とは知れてしどもなく、さはありながらと罪なき事に疑はれて、その事こまかに言譯もなほ可笑く、よしなき事に人の口として、あらざらむ沙汰し侍る、世之介姨にむかひて心の程を申せば、何ともなく今まではおもひしに、明日は妹のもとへ申し遣し、京でも大笑させむと、思ふ外へはあらはさず、我娘ながら貌も世の人並として、去方に申合せてつかはし侍る、年だに大方ならば、世之介に取らすべきものを、と心と心に何事もすまして、其後は氣着けて見るほど點しき事にぞありける、惣じて物毎に外なる事は、賴まれても書く事なかれと、迷惑せられたる法師の申されける。これより彼は好色浮世草紙の作者として數々の作を出したり。今その重なるものをあぐれば

好色二代男　八冊　貞享元年
好色三代男　五冊　同　三年
好色一代女　六冊　同　三年
好色五人女　五冊　同　三年（改題、當世女容氣）
本朝廿不孝　五冊　同　四年（改題、新因果物語）

彼はまた武道に關する草紙を物しぬ。

武道傳來記　八冊　貞享四年
男色大鑑　八冊　同　四年（改題、本朝若風俗）
武家義理物語八冊　同　四年
次に彼は轉じて町人物に筆を染めぬ。その主要なるものは
日本永代藏　六冊　同　五年
世間胸算用　五冊　元祿五年

一代女

就中「一代女」は彼の最も意を用ゐたる所にして、又衆作中の傑作とすべし。戀にやつれて世をはかなみし若き男、北山陰なる隱家に思の外なる老女に出であひ、酒の上にて夢の如くに語る身の上ばなしを聽くといふ筋

自そも〳〵は賤からず、母こそ筋なけれ、父は後花園院の御時殿上のまじはり近き人の末々、世のならひとて衰へあるにも甲斐なかりしに、我自然と面子妖嬈に生れつきしとて、大内のまた上もなき官女に仕へて、花車なる事ども有增憎からず、なほ年を重ね勤めての後は、かならず惡かるまじき身を、十一歳の夏はじめよりわけもなく取亂し

たるを、始にて、これより心輕き戀に身を持ちくづし、或は人の妾となり或は品品の遊女となり、又は世間寺の大黑ともなれる物語のうちに、事にふれたる社會の裏面をばあらはに描き出して憚る所なく、至る所に婬猥なる文字を連ぬ。されど彼が筆は當代の眞相を直寫せんとしたる者にして、決して其の時世に婬風を鼓吹し、弱點を挑發して己が名利に資せんとせしものにはあらず、彼が生活せる元祿時代殊に大阪の平民社會は正に此の如き狀態にありしが故に、大阪の町家に人となりし文學者の、鋭利なる眼光を以て赤裸々に此等社會を描寫するに於ては、必ず此の如き性質の小說を生ずべきは止むを得ざるなり。たゞ彼は文學者として何等の理想を有せず、又人生に對して溫き同情を缺きしは、彼のために甚だ惜むべしとなすところ、之を以て近松の淨瑠璃の作風に比するに著しき相違あるを認むべし。彼は奇拔なる眼光を以て人の弱點を透視すと雖も、その人の運命に對して一掬同情の涙を注ぐを得ざりき。又彼が寫し出せる人物は、凡て淺薄にして深刻なる性格を有せず、血もあり涙もあるべき人生の全般は、遂に彼が作中に見る能はざるを遺憾とするなり。これ

社會風俗

內容

文章

一は、彼の小説は經驗の直寫にして想像の成果にあらざるが爲にもよるべし。蓋し小説の上乘なるものとは云ふべからず。次ぎに彼の文章は雅俗語を縱横に使用し、又古文の文そのまゝを用ゐたる所もあり。殊に「ぬ」「侍り」「ぞかし」の如き語は至る所に見出さるゝ慣例語にして、テニヲハを省略し、文法を無視して格調を省みざること、彼が私淑せる談林俳諧の風の如く、突如として語句の斷續變轉する所は確に彼が特技と見るべきものなり。

人は皆烟の種、富士の山劇しき風病はやりて、難儀を駿河の町に醫師(くすし)隙なく、旦那寺の門を敲き、無常は何時を定なし。折節の寒空にも經帷子一重を浮世の旅衣

（本朝二十不孝）

浮世

御所柿を好み、此の有樣華清宮もかくやと思はる、曉風殘月夜の凉、今朝思へば夢。

（好色二代男）

彼が著す所俳書十數卷、浮世草紙二十餘卷あり。かくて元祿六年八月十五日五十二歳にして大阪に沒す。其の辭世に曰はく、

人間五十年の究りそれさへ我にはあまりたるにましてや

浮世の月見過しにけり末二年

北條團水　青木鷺水　都錦　錦文流

西鶴が昔物語の陳腐を脱して、風俗を直寫せる浮世草紙を開拓せしより、當代以後この種の小説に筆をつくるもの相ついであらはれぬ。

北條團水(二三四三―二三七一)橘堂、白眼居士など號す。京の人、俳を推本才麿に學び又、西鶴を師とず。後に浮世草紙を作れり。師の沒後七年師家を守りしは卽ち彼なりき。その作「新永代藏」「武道一覽」「怪談諸國物語」等十餘種あり。

青木鷺水(二三一八―二三九三)。京の人。白梅園、哥仙堂等の號あり。俳を野々口立圃に學び、又西鶴にならひて浮世草紙を作る。享保十八年七十六歳にして沒す。その作「丹前艶男」「高名太平記」「こんなこと」「俳諧八重垣」等十餘種あり。

都錦(二三三五―二三六三)。本名は宍戸鐵舟、播州佐夜姫明神の神職なり。青年の間、京に於て伊藤仁齋、北村季吟に學びしも、惡友の爲に放蕩流浪し、罪によりて元祿十六年薩摩の金山に流され、數年にして沒しぬ。在京の間西鶴にならひて「元祿曾我物語」以下の浮世草紙を作れり。

錦文流。大阪の人、錦頃軒と號す。元祿寶永の間に浮世草紙を作り、又淨瑠璃

の作をも出しぬ。寶永二年淀屋辰五郎の事績を描ける「棠」大門屋敷」最も名あり。又寶永八年因州鳥取に於ける女の敵討の事實を仕組める「熊谷女編笠」は、趣向一編を貫きてやゝ後世の小說體を得たるものとす。兩書共に「珍本全集」に收む。

八文字屋

第六節　八文字屋本

西鶴の後をうけ前述の諸家と相并んで大に行れし浮世草紙は、京の書肆八文字屋より出版せるものなり。書肆は麩屋町通誓願寺下ルにあり。店主を安藤八左衞門、號を自笑と云ふ。もと遊女の細見にならひたる芝居評判記を出すを業とせしが、元祿十四年始めて浮世草紙「傾城色三昧線」五冊を出しぬ。こは諸國遊女の名寄に其の小話を加へたるものに過ぎざりしが、後次第に發達してこの形式を離れ、純然たる小說を成すに至りたり。寶永正德の間「傾城玉子酒」「風流曲三味線」「寛潤平家物語」「野白内證鑑」「傾城傳授紙子」「傾城禁短氣」等を出し、八文字屋の名都鄙にかまびすし。されど此等は皆、江島其磧なる作者の筆に成りて、たゞ署名を自笑となせしものなりければ、その名利に關して兩者の間遂に圓滿なること能はず。正德四年一旦分離して、其磧別に出版の事に從ひぬ。されど積年の得意は容易に八文字屋の名を捨てず、享保四年再ひ和睦するの止むなきに至り、これより暫く合作の體にて草紙を出版す。

江島其磧

江島其磧、通稱は市郎右衞門、代々京都京極誓願寺門前に住し、大佛餅をうりて裕なりしが、少壯の時放蕩不羈にして產を治めず、資財を盡して遂に文士の生涯に入りぬ。其の筆はもと西鶴に出で、その奇警は無けれども、彼に比するに婉曲にして文格整ひ、廣く世間を舞臺とし、人情をも描寫せんとする傾となれるは、小說の體裁上一段の進歩と言はざるべからず。卽ち彼は始め主として傾城ものを作したりしが、一度八文字屋と分離してより「世間息子形氣」「世間娘形氣」以下を作りて、今後多くの形氣もの續出の前驅をなし、後また史的の資料にも筆を試みぬ。

形氣物

仕掛のよいからくり智
惣領は高橋にかゝつておちた身代

世になき物は江の刀と化ものと、人の內證に金銀ぞかし、爰に都の眞中に代々の銀持、此先祖無間の鐘を撞かれしや、末の今に至るまで銀のなる木の山

なして、利銀請取針口の音四方の貧家の耳を驚かし、我と其名を持丸長入として六十餘歳になられしが、世の人の見分ちがひて、いつとなく身體うすくなりて、世間むきは昔に變らず、隨分氣がさに取り廻しけれども、おのづから不自由さあらはれかゝりしわけは、兄弟三人ありしが、惣領は藤内とてきりやうよく、坂田藤十郎に其儘の生れつき、人皆犬藤十郎と呼びしが、夫につれて不斷の風俗坂田が藝をうつし、ぬれ事に妙を得、女郎を手に入れ、隨分位を取て何ほどの粋も五六會にてはふりつけ、なか〳〵手ごはき太夫も、坂田流の術を以てあなたより手を合はさせ、初會から門まで送るほどにしこなす事を得て、しかも口說の名人、今都の大臣に此藤内に續く分知もなく、島原の縦横十文字、遣手のくめが龜の尾に灸のある事迄知りぬいたる元手に身體皆になして、佛性なるおやぢも堪忍袋の口を開き、呆れて何の異見もなく、五年以前に内證勘當して何處へか追失はれ、次の弟半内に家を讓り、其身は隱居の心ざしありしに、此半内容色骨柄千石取にしても苦しからぬ生れつき、口跡勿體ありてしかも實なる所、詞のおとし、思入、はづし、……（風流曲三味線）

多田南嶺

其磧は元文元年六月七十歳にて歿す。

其磧の歿後八文字屋の囑を受けて自笑の代作をなせる者は多田南嶺なりき。南嶺名は義俊、攝津の人、京に出でゝ有職古典を壺井鶴翁に學び、又、甲州流の兵學にも通じて門下を敎ふ。その性多能にして文筆に長ずと雖も、放蕩不埒にして節操に乏しく、國學者としても兵學者としても、大に世に卑まれたりき。

八文字屋の末路

然るに八文字屋浮世草紙の盛に行はるゝ時作者其磧を失ひたる自笑は技倆彼に劣らざる代作を南嶺に見出し、南嶺これより輕快なる才筆を戲曲に用ふるに及びて、八文字屋本の價値毫も失墜する無きを得たり。その作「世間母親氣質」最も名あり。又自笑作と稱する「風流訛平家」「義經風流鑑」「分里艶行脚」「傾城野群談」「傾城髪透油」等は卽ち彼の手に出でしものなるべし。

芝居評判記

西鶴の風を京に移したる八文字屋本も、延享四年自笑八十八歳にして歿し、寛延三年南嶺が五十三歳にして歿せる後は、次第に衰頽して浮世草紙の作漸く絶え、流石に評判記のみは家の特産として寛政、天保頃にまで及びたり。此の芝居評判記はもと明暦萬治頃より版行せし遊女の細見に基づきて、役者にも

位附せる單純なるものに過ぎざりしが、元祿十二年八文字屋に於て役者口三味線を出して江戸京都大阪の三卷とし、繪を挿み問答體を用ゐて狂言の評判を書きしより、大に世の翫ぶ所となりて、評判記は殆ど八文字屋の專賣となり、上方の文化が關東に移り、浮世草紙流行の時代去りても、この作のみは長く京都八文字屋の手に殘りたるものなりき。（八文字屋本は多く「帝國文庫」「江戸時代文藝資料」に收む。）

第七節　古淨瑠璃

元祿文學の花は、散文に於ける西鶴の浮世草紙の小說の外に、節と三味線と人形とに伴ひて舞臺の上に演ぜられたる韻文淨瑠璃にありし事は、皆人の知了する所なるべし。今其の狀況を敍述するに當つて、まづ前代に於ける起源發達の跡を覗はざるべからず。

淨瑠璃の起源

淨瑠璃とは始めて淨瑠璃物語（一名十二段草紙）を語りしより起れる節の總名なり。此の物語は御伽草紙の一にして、室町時代の末に出でたる散文（作者は小野阿通と傳ふれども信ずるに足らず。宗長日記享祿四年（一五二一）に宇津山遙の小座頭淨瑠璃を語れる由見ゆれば、この起源甚だ遠きを思ふべし。）なるが、盲法師の平曲等にならひて、是を節にて語ること何時しか始りしことゝ見ゆ。

美人ぞろひ

御曹司御覽じて。こはいかに義經こそ。都にて多くの泉水を見しかども。かほどの泉水はいまだ見ず。かゝるあづまの遠國にも。かやうの所ありけるよと。いかにも心を留めつゝ。御覽じける折節。こゝに一つの不思議あり。あるじは淨るり御ぜんとて。藝能なさけみめかたち。當ごく他國にならびなし。ならびなきこそ道理なれ。皆人は三十二相の形とは申せども。かの淨瑠璃と申すは。四十二相の形なり。上八十人中下八十人とて。二百四十人の女房たちめしつかはれたり。父は伏見の源中納言かねたかとて。三河の國の國司なり。母はやはぎの長者とて。海道一の遊君なり。ふたりの間より生ずる其子なれば。一事おろかの事ぞなき。琵琶琴じやうずよろづの事に至るまでも。おろかなることぞなき。あそばす草子は何々ぞ。古今萬葉伊勢物語源氏さごろも戀づくし。和歌の心をはじめとして。なさけの道を知る事は。たうごくうちにきこえたり。心ありげの女房たち。花園に立ちめぐり。木々の木末や竹のうら。かたゞ

く月の面影を。歌によみ詩に作り。連歌をして立たれたり。御ざうしはまがきの影にたちしのび。花ぞの山をながめ給へば。淨るり御前の其夜の裝束。いつにすぐれて色やかなり。浮織物からおりもの。さくら山吹こきつゝじ。梅地紅梅柳いろ。うす紅梅しやうぶがさねに菊がさね。十二ひとへを引き重ね。こき紅のちしほの袴ふみくゝみ。たけにあまれる翡翠のかんざしを。紅梅のだん〳〵を。山がたやうにたゝませて。中ほどをよせてまふやうに結ばせて。うら吹く風にそよとなびかせて。たゝれたりけるそのふぜい。心言葉もおよばれず。いうにやさしくおぼえたり。ものによく〳〵たとうれば。楊貴妃李夫人衣通姫に。女三の宮の立ちすがた。朧月夜の内侍のかみ。こうきでんの細殿も。是にはいかでまさるべき。義經都にゐりし時。いくらの内裏の女房たち。やんごとなき上臈たちを。五節の遊びゐりしとき。見たてまつれども。かほどの美人はいまだ見ず。おなじ人間と生まれなば。かやうの人にあひなれちかづきたてまつり偕老どうけつのかたらひ。比翼れんりのちぎりをこめてこそと。思ふ心を猿猴の林に遊ぶ。胡蝶の花になれたるふぜいにてこそたゝれけれ。

（十二段草紙第三段）

其の後此の物語のみならず、舞の詞の「高館」「八島」「大職冠」の如き、御伽草紙の「鉢被」「文正」「梵天國」の類をも此の節を以て語る事となり、語手に專門家を生じ、節も從つて發達し來りしが、茲に注意すべきは當代に平曲或は淨瑠璃と相並びて、說經、歌念佛、祭文など云ふものゝ行れ居たりし事實なり。

說經とはいまも佛敎諸宗に行るゝが如く、布敎の爲に衆を集めて法義を說き、因緣を敎へ、或は祖師の傳記を讚嘆するものなりしが、何時の程よりか此の道一種の技術となり、聲を美しくし節を巧にし、哀婉の情に訴ふる語物となりて、僧ならぬ者の興行する所となれるものゝ如し。太宰春臺の獨語にいはく「說經と云ふものはもと法師の中に說經師といふ者ありて、佛法の尊きことどもを詞に綴り、浮世の無常の哀れに悲しき昔物語を演じ、善惡因果の報いあることどもを物語に作りて、これに節を付けて哀れなるやうに語りしなり。鉦鼓を鳴して拍子取り、世の婦女に聞かせて惡を戒め善を勸めて菩提心を起さし

めんとするなり。昔より法師の說法に因果物語する類なり云々。其の聲も只悲しき聲のみなれば、婦女これを聞きてはそゞろ涙を流して泣くばかりにて、淨瑠璃の如く淫聲にはあらず。三線ありてよりこの方は、三線を合する故に、鉦鼓を打つよりも少し浮き立つやうなれども、甚しき淫聲にはあらず」と。此等後には漸く親子男女の情合を題とし、正本も出來、辻に立ち芝居を設けて興行する事ともなりしが如し。嬉遊笑覽には、淨瑠璃は此等の說敎より起りたること疑なしと云へり。元祿の頃に及びても此の節盛に流行し、五說敎（山註太夫、愛護若、苅萱、俊德丸、梅若丸など云ふか。）など云ふ名目も見え、說敎太夫の名も呼ばれて人形を舞はすこと後の淨瑠璃の如くなりしが、淨瑠璃異常の發展を成し、京阪江戸の藝壇を風靡するに及びては遂に衰退の止むなきに至れり。

歌念佛もまた佛敎より出で、宗敎の念佛行儀を歌曲化して民間に弄ばれしものとす。人倫訓蒙圖彙に「夫念佛は萬德圓滿の佛號なり然るをそれに節をつけて謠ふべきやうはなけれども、末世愚鈍の者を導き、せめて耳になりとも觸れさすべきとの、樓者の方便ならひ。それを誤つていろ〳〵の唱歌を作り、之

を鉦に合せて噺し、淨瑠璃、說經のせずと云ふことなし、末世法滅の表なり、悲むべし、歎くべし」と云へり。

次に祭文は、山伏の祭文より移りて世俗の間に墮ち、行者が錫杖を縮めて拍子取る樂器に替へ、男女心中の弔慰などよりは、進みては情死の筋道を叙べ、聽者の心をそゝるものとはなりけむ。高砂颯々鈔に「祭文といへるも、本は其の人一生の善事慰をあげて其の人を弔ふ文なり。悲哀を主として、人を泣かしむる事なけれども、哀聲を過ぐれば、その勢自然と謠ひ聲となる。今俗間の祭文といふものは、色欲に溺れ淫亂放蕩にして家を亡し身を失ひし賤しき者の事を作る。故に其鄙俗悖亂言ふべかず」と。但し古風なる祭文中には、その本來の性質として、神佛の祭文より、說經の正本など借り用ゐしものまでもありし如くなれども、世は元祿に近く、京阪の民衆早や好色本の氣分となるや、心中若しくは世話を文章に作りて所謂歌祭文の盛行を見るに至りしなるべし。元祿の頃、五說敎と相並びて八祭文の稱あり。八百屋お七、油屋お染久松、大經師おさん茂兵衛、額の小三金五郎、お初德兵衛、おちよ半兵衛、お夏清十郎、お俊傳兵

衛とす。いづれも男女の心中立てを高唱したるものにして、西鶴が好色小説、近松が淨瑠璃に使用したる題材と全く相同じ。此等の狀勢より察するに、明治の中頃に祭文がその一部を浪花節に讓りて藝壇にその生命を失ひ、現今こそは祭文も説經も全く跡絶えて、片田舍に於てすら聞くを得べからざるに至りたれ、初期の説經歌念佛祭文は相並びて行はれたる淨瑠璃の上に、材料趣味趣向を寄與し、尠からざる感化を及ぼせしものと考へらる。

三味線

然るに永祿年間三味線始めて我が國に渡來し、文祿の頃石村檢校本手破手の調を定むるに及びては、唯今までは扇拍子のみを以て語りし淨瑠璃も撥音面白く之に合せて演奏する事となり、慶長の頃琵琶法師澤住(澤角)檢校及び瀧野檢校等の名手もいでゝ巧に之を彈奏する事とはなりぬ。思ふに此時に至つては、從來散文的なりし文句も、三味線の調にひかれて次第に韻文的に語りかへらるゝに至りし者なるべく、三絃の合奏てふ事實は文學の史上に注意を要する事項ならん。之についで澤住の門人に目貫屋長三郎と云ふ者あり。西

操人形

淨瑠璃語

宮の傀儡師引田某を語らひ、己が淨瑠璃に合せて人形を操らしむ。これ文學と、淨るりと、三絃と而して操人形との四者合同して元祿以後盛行すべき戲曲の基礎を完成せるものと云ふべし。

さて慶長頃の淨るり語りとしては、女流にも六字南無右衛門、左門よし高等いでゝ四條河原邊にて能、説經等と相並びて芝居を興行し、太夫は受領して天覽にも供したることありしを以て見れば、いかにこの文藝が當代の趣好に適したるものなりしかを知るに足るべし。さてその文學は淨瑠璃物語を主とし、次に舞の詞、御伽草紙を繰返し、後には新曲をも出したり。六字南無右衛門の「阿彌陀の胸割」「かうの姫」などや此等なるべき。長三郎が淡路椽に受領して、人形を後陽成天皇の叡覽に供へ「阿口判官」「弓繼」「鎧變」「いと田」「五論碎(クダキ)」を五部の本説と定めし由も見ゆ。

以上は前代より、文藝の中心地たる京都に行れたるものなるが、同所が保守的の性質を有する處だけ、新進の操淨瑠璃は未だ充分なる發達を爰に成就するを得ず。その勢力をうるに至りしは、却つてこの藝を江戸に齎したるより後

のことに屬す。

關驛淨雲

寛永の頃京に薩摩淨雲あり。本名は虎屋治郎右衛門、又小平太とも云ふ。曲節を澤住檢校に學びて淨瑠璃を語りしが、やがて江戸に下りて一流を語り始む。「紀州の浪人小平太、京都に於て淨瑠璃といふ一節を語り出して澤角勾當といふ、琵琶法師の三味線に合せ、西の宮の傀儡師源之丞といふものに人形を廻させしより、類に京都にもてはやされ終に江戸に下りて、中橋廣小路其頃は未だ藪原なりし所に芝居を立て、此一曲を諸人に見せたり、是寛永年中の事なり」（事跡合考）當時の

嶋淨瑠璃

正本は從來の十二段草紙以下舊作の繰返し多く、新作も亦端淨瑠璃といふべき短き文章のみなりしが、淨雲に至りて之を長くし、六段續きの一曲として始

段淨瑠璃

終を語り終ることゝなりぬ。これを段淨瑠璃と唱へ、今後江戸に行れたる六段物の始をなしたり。作者を北條宮内とす。されどその作今に殘れるもの無きを以て、文學としての價値如何は知るに難し。さて音曲に於ける淨雲の門下には、その子治郎右衛門の外、杉山丹後掾、櫻井丹波少掾、虎屋源太夫等あり。

杉山丹後
櫻井丹波

正保慶安の頃に榮えて淨瑠璃節弘通に力ありしものなり。

杉山丹後掾は、天下一丹後掾藤原清澄と名のり、其系より後の江戸半太夫節、十寸見河東節を出しぬ。櫻井丹波少掾は平正信と名のり勇力にして荒々しき

好み、節も文も人形も、皆その特色を以て當代の江戸に盛行したり。その子和泉太夫又た親についで此の風をなす。「平正信勇力あるに任せ淨瑠璃も強きことを好みて語り、二尺許もあらむ鐵の棒によつて拍子を取る、代々靈に親丹波毎日岩をたゝき割りといへる附合の句も又此太夫をいへるなり、其子和泉太夫又人形の損も厭はず、人形の首を拔き打割打つぶすを更に構はず喜んで語る、元祖國十郎の荒事はこの太夫の有樣を深く用ゐたるなり、丹波かりそめにも弱きことを嫌ひ、水戸働の者迄も一器量あるものを選びたり。」（關東血氣物語）作者の主なるを岡兵衛重俊とす。　坂田金時の子金平又公平とも書す、金と公とを混用せり。及び渡邊の綱の子武綱といへる剛勇絶倫の怪士を主人公として、彼等が至る所軍功を奏し猛獸をうち惡鬼を拉く等の武勇談を仕組める單純なる者なるが、無學にして然も戰時の餘風未だ消えやらざる江戸武士の間には、最も好箇の題目たりしを以て、其の芝居は常に滿場立錐の地なき盛況なりきといふ。この節を金平節と稱し、正本を金平本と呼びならせり。その作の主なるものは「金平化粧問答」、「金平千人切」、「金平天狗問答」、「金平兜論」、「金平法問答」、「金平黑熊」、「金平大酒論」、「采女金庭訓」、「鎌倉管領城合戰」、「金平最後」、「金平蘇生」等なり。

さても其後つら〳〵おもん見るに、天うん道にかなひ、せいだうたゞしき其時は、くわん位をながくしそんに傳へ、のどかにめぐる春の日の、おさまる國

こそめでたけれ、其頃源のよりよし公と申は、たゞのまん中に四代の御こういん、おうぢを出てとをからず、こゝんぶそうのめい將たり、御家につたはるかうけんには、むさしの守渡邊のたけつな、兵庫の守坂田金平、とを〳〵みの守うすいのさだかね、するがの守うらべのすへ宗、はりまの國平井の一人むしや、是を二代の四天王とがうす。ぶゆふのほまれ天下にあまねく、ゆゝしき御門の御まもりとして、民のかまどもしづか也。是は扨置、こゝに又らくやうほり川に權大なごんひろ長として、すが原のながれをくみしくぎやう有、ぐはんらい生れ付ぶゆうにして、人のいせひをそばめにかけ、よこしまにくはんゐをむさぶらんとする、もういふとうのわく人なり。したがう所の郎等には、むとうの傳内とものり、同源次ともみつとて、ちうや弓やに身をゆたね、大力のゆふし也、并に竹原いのくま入道らいけんとて、其たけでうにあまり、ほねあばれすぢふとく、偏にやしやらじん共いつつべし。じやく年の比よりも兵法にのぞみふかく、まゐんの法をつたゐんため、十八歳の年よりわしう吉の山にとぢこもり、山中をすみかとし、ぢやまんがまんの天狗共に相

虎屋源太夫
宇治加賀

なれ兵法のをくぎくもりなく、……

（公平化粧問答）

されど泰平年を重ね世は元祿の盛時に向ふ頃となりては、流石に素朴なる江戸にも、わけもなき武勇談は人の飽く所となり、享保年中に及びてはこの節全く江戸に絶えたり。

淨雲の門下中、特に注意すべきは、虎屋源太夫の一系なり。源太夫は淨雲に江戸に師事せる後、京に上りて之を語り、その門より多くの名手を出しぬ。就中有名なるを伊勢島宮内、井上播磨椽、山本土佐椽の三人とす。伊勢島の門に宇治加賀椽あり。彼は通稱嘉太夫、和歌山の人、京に出でゝ宮内に學び、當時流行せる井上播磨椽の節と、己がよくせる謠とを折衷して優美なる一風を工夫し出し、纖々嫋々として大に京都の人氣に投じたり。「播磨風を表とし節配し細に、よは〳〵たよ〳〵美しく語り出せば、京の見物頭から氣に入りて、思の外評判よく、段々新作の淨瑠璃を出し、人形衣裳迄きれいに拵へ云々。（操年代記）」彼また文才ありて新作を出し、近松門左衛門も一時彼の爲に作せる事もありき。「徒然草」「弘徽殿嫉妬打」「主馬判官盛久」「團扇曾我」「加增曾我」「當流小栗判官」「世繼曾我等は卽ち彼が爲めの作なりきといふ。八行の稽古本に謠の如く節附をなして版行せるは彼を

以て始となす。かくて彼の節京に行はるゝこと三十餘年、寶永八年七十三歳にして沒す。

井上播磨

井上播磨椽は通稱市郎兵衞、京の人にして宮中の簾作を業とせり。淨瑠璃を虎屋源太夫に學び、また江戸萬歳の節を折衷して一風を語り、寛文年中大阪に下りて彼の地に行れ、貞享二年五十四歳にして沒す。その語れるところ新作多く、近松門左衞門も彼がために「天鼓」及び「賴朝七騎落」を作りて與へたりといふ。

山本土佐

山本土佐椽は通稱角太夫、大阪の人にして始め京に源太夫に學び、又宮内にも師事せりといふ。南京操を以て一時人氣に投じたりと雖も、その節大に稱せられたるにあらず、その作も新しきよりはむしろ改作或は他座のものを語りたりと見ゆ。その下より都一中の一中節、岡本文彌の文彌節等出で、一中の下に宮古路豐後椽の豐後節出で、轉じては常盤津、富本、清元或は新内をも出せることは後章に於て述ぶる所あるべし。

古淨瑠璃作者

以上は淨瑠璃に於ける群雄割據の狀態にして、未だ秀吉、或は家康の統一を見るに至らず、各その長を有して一方に覇を稱せるに似たりと雖も、尙天下洽然として水の東に朝するが如き權威ある者には出で逢はざりき。文學作も亦太夫自らの文才を兼ねたるもの、或は他の文士詩人の業餘に成れるものゝみにして、專門家を出すまでには至らざりき。さればその文も概ね古風を脫せず、淸新の氣なく、二三近松門左衞門の作もなきにあらざりけれども、尙此間は室町以來の舊套を脫し得ざる時代と見ざるべからず。この間の創作或は改作を總稱して古淨瑠璃と呼び、やがて天才近松門左衞門によりて試みられたる元祿の諸作を新淨瑠璃と呼ぶを例とす。

第八節　近松門左衞門

保守的の氣風ある京の淨瑠璃は、貞享元祿の盛期に入りても尙、舞の詞、御伽草紙或は說經等より出でたる內容及び文體を離るゝ能はず、緣起、本地或は形式的なる戀愛談を翫び居たりし間に、大阪は進んで純然たる文學の眞義を解し、新しき淨瑠璃節及びその文學を發展せしむべき條件を具備したり。その局に當りし者は誰ぞ、文學に於ける近松門左衞門と、音節に於ける竹本筑後掾と

竹本筑後

たるは今更改めて言ふに及ばず。

竹本筑後掾、もと五郎兵衛といふ。大阪天王寺村の人、夙に井上播磨の風を慕ひて其の門人清水理兵衛に學び、竹本義太夫と稱す。一時京に上りて宇治加賀の脇師をつとめ居たりしが、貞享二年大阪に下りて道頓堀に竹本座を起し操芝居を始む。これより竹本義太夫の名大に揚り、三年近松門左衛門が「出世景清」を作りて彼に與ふるや、彼の節とこれの作と相待つて世の歡迎する所となり、劇壇及び文壇に於て一新紀元を立つる事となりぬ。後彼の流をくむものを義太夫節と稱せり。

近松門左衛門

近松門左衛門(二三一三―二三八四)姓は杉森、名は信盛、號を平安堂、巣林子、不移山人等といふ。京都の人。また長州萩の人とも云ふ。幼にして近江近松寺にあり。或は肥前唐津なる近松寺の事なりとも傳ふ。弱冠、髪を蓄へて京都に上り、さる公家に仕へたりしが、後故ありて仕を辭し、近松門左衛門と名のり、延寶五年廿五歳の時、都萬太夫座の爲に藤壺の怨靈を脚色して大當りを取れりと云ふ。これより尙數曲の作を出して狂言に一生面を劃しぬ。同時に當時の淨瑠璃太夫の爲にも麗筆を振ひ、宇治加賀、井上播磨等の爲に二三の作を出せしが、一度竹本義太夫の爲に「出世景清」を與へしより、從來は金平本、土佐本等によりて作し居たりし舊型を離れ、天才によれる新機軸を出して巧に眞人生を描く事となれり。之より彼が淨瑠璃作者としての新生涯が始められぬ。而して元祿三年(正德說正しきが如し)京より下りて大阪に居を卜せるより以來は、頻に義太夫の爲に新作を出し、元祿十三年世間の出來事を仕組みて「長町女腹切」を作りぬ。これ淨瑠璃に所謂世話物を出せる始にして、同十六年お初と徳兵衛との情死を描ける「曾根崎心中」を出しぬ。これ世話物の中にても殊に心中物と稱せらるゝ淨瑠璃、文學の始なり。この事實は十六年四月廿三日の出來事なりしを、五月七日より興行せしめたりとの事にて、時人その機敏に驚けりと云ふ。これより世話物心中物が一代の流行となり、又時代物も筋の曲折舞臺の變化を以て時人の歡迎を受け、兩種の作、年々二三を出して盛にもてはやされぬ。殊に正德五年十一月には「國性爺合戰」を出して古今の大入大當をとり、十七ヶ月三年越の興行をなせりと云ふ。後世この作と「雪女五枚羽子板」、「曾我會

世話物

心中物

三傑作

近松の特色

稽山」とを合せて近松の三傑作となす。されどこは歴史物卽ち時代物のみに就いての說にして世話物に亘りての說にあらず。近松の傑作及び價値はむしろ世話物の上にありと云うて可なり。彼の特色は獨創の才よく古淨瑠璃の舊套を脫せるにあり、彼が生存せる元祿大阪の人生を反映せるにあり。時代物は舞臺賑はしく筋の變化に富むと雖も、其の舞臺に現るゝ人物は、古代の衣裳をまとひたる元祿大阪の若旦那番頭御寮人にして、史上の英雄佳人の性格あるにあらず。名は過去の人にして心は當代の思想に生くるのみ。この點に於いて世話物は人物と精神と相叶ひてよく世態人情を寫し、輕快にも深刻にも生きたる人生を現して美しくこの時代の社會を目堵せしむ。且つ當代は庶民町家の間にも儒敎的道德の行れ來りし時なるを以て、唯に王朝時代の如き一篇の感情的戀愛談をなすに止らず、戀情と義理との交涉を描寫してよくこの時代の眞相をあらはし得たり。彼が一生の作その數百に上る。就中彼の特色とする所の世話淨瑠璃は僅に廿四篇、併もその一よく千鈞の重きを有す。今その作年代によりて配列すれば

世話淨瑠璃

長町女腹切　元祿十三年正月六日
淀鯉出世瀧德（たきのぼり）　同　正德二三年カ　十三年四月八日
曾根崎心中　寶永六年カ
薩摩歌　同　十六年五月七日
心中重井筒　寶永元年正月十五日
心中二枚繪草紙　同　元年四月十六日
大經師昔暦　同　三年三月二十七日
堀川波の鼓　同　三年九月二十一日
卯月の紅葉　同　四年二月十五日
卯月の潤色　同　四年四月二十一日
丹波與作　同　四年六月一日
心中萬年草　同　四年六月二十四日
五十年忌歌念佛　同　五年四月十六日
今宮心中　同　六年正月二日
同　七年正月二十三日

夕霧阿波鳴門　寶永七年七月二十四日
心中及は氷の朔日　同　七年六月十六日
冥途の飛脚　正德元年三月五日
生玉心中　同　五年八月一日
鎗の權三重帷子　享保二年八月二十二日
山崎與次兵衛壽（ねびき）の門松　同　三年正月二日
博多小女郎波枕　同　三年十一月二十日
心中天の網島　同　五年十二月六日
女殺油地獄　同　六年七月十五日
心中宵庚申　同　七年四月二十二日

又時代物の主なるものは

出世景清　貞享三年二月一
源氏冷泉節　元祿元年正月
天智天皇　同　二年三月

松村風雨　東帶鑑　同　七年三月
百日曾我（寿名團扇曾我）　同　十年十月
蟬丸　同　十四年五月
大磯虎稚物語　同　十五年五月
新一心五戒魂　同　年九月
西明寺殿百人上臈　同　十六年三月
用明天皇職人鑑　寶永二年三月
雪女五枚羽子板　同　年七月
兼好法師物見車　同　三年五月
紅葉狩劍本地　同　六年九月
百合若大臣野守鏡　同　七年五月
嫗（うもり）山姥　正德二年七月
相撲入道千匹犬　同　四年四月
嵯峨天皇甘露雨　同　年十月

父は唐土母は日本　國性爺合戰　同　五年十一月
曾我會稽山　享保三年七月
後寛牛若　平家女護島　同　四年八月
井筒業平　河内通　同　五年三月
雙生隅田川　享保五年八月
攝津夫婦池　同　六年二月
將軍太郎良門出羽冠者賴平　關八州繋馬　同　九年正月

近松の文章

彼が文章は優麗にして才氣横溢、巧あり艶あり婉あり曲あり、言語風采よく寫して滔々千萬言、毫も筆端の滯る所あるを見ず。自ら文作の用意を語つて曰はく「惣じて淨瑠璃は人形にかくるを第一とすれば、外の草紙と違ひて文句皆働を肝要とする活物なり。歌舞伎の生身の藝と芝居の軒をならべてなす業なるに、正根なき木偶に色々の情をもたせて、見物の感をとらむとすることなれば、大方にては妙作と云ふに至り難し」と。その言語動作、よく無心の木偶を用ゐて貴賤上下箇々の性格をあらはさしめし技倆は、確にこの用意より來りしものなり。同じく彼の言に「昔の淨瑠璃は、今の祭文同然にて花も實もなきものなりしを、某出て加賀椽より筑後椽へうつりて作文せしより、文句に心を用ゐる事昔に替りて一等高く、例へば公家武家より以下皆夫々格を別ち、威儀の別よりして詞づかひ迄其うつりを專一とす」と。以て彼の新淨瑠璃が如何なる位に進めるものなるかを見るをうべし。殊に彼が道行文に至りては謠曲の道行より進んで更に幾段の變化をなし、その婉曲にして妙趣あること、殆ど前後に比なしと云ふも可なり。當時の儒家荻生徂徠すら

道行文

此の世のなごり、夜もなごり、死に行く身を譬ふれば、仇しが原の道の霜、一足づゝに消えて行く、夢の夢こそ哀なれ。あれ數ふれば曉の、七つの時が六つなりて、殘る一つが今生の、鐘の響の聞きをさめ、寂滅爲樂とひゞくなり。

（曾根崎心中）

の一節を以て讃嘆おかず、近松が妙處實に此の中に在りと云へり。

死神の導く道やかげろふの、はかなき蟲もたゞ〳〵は、ゐしたの露に生き殘る、それよりも尙仇くらべ、これを限と百八の、數とるたびに繰り盡す、命二つ

を珠數二連、これが冥途の迎ぞや、見送る軒と見かへる野邊と、中に飛びかふ夜這星、往いてかへらば言づてん、出でゝかへらぬ魂の、憧れ添ふとは知らねども、そばに夫のある心、夫はお島とつれ立ちて、歩む心のともづれは、目にちろ〳〵と幻の、こはその人か眞かと、いだき付けば仇し野や、風茫々たる閨の戸に、どれ市樣はお島はと、尋ぬる袖に降る涙、夜半の時雨となりにけり、是こそ曾根崎天神の、松と棕櫚との連理の森、かき集めたる言の葉の、よそに聞きしも今は又、よその嵐の身にぞしむ、お島も同じわが庵は、お初德兵衛のその曉の、夢も破れてまだ間もないに、心中すぐせの報のわざか、それのみならず親方や、親の苦勞と思ひは知れど、男死なせて見て居られうか、女房先立てながらへあらば、そりや犬猫も同じこと、同じなかにも鹿となり、鴛鴦と生れて女夫池、いける間もなく身を果し、名をや藻屑に埋めんと、又ひたすらの憂涙、落ちて三途の河となる。

（心中二枚綸双紙、血死期の道行）

の如きはてしなき空想、

お龜は夫の顏を見て、連立つ冥途の道とは知れど、今今生の別として、言たい事の何やらが、胸にはあつて口へ出ず。飽く程顏が見て死にたや、心なの短夜と身を投げかけて泣きゐたり。アヽ愚や愚痴や、淺ましや、永き來世があるぞかし。さりながら心に懸るは其方の父御。二人共無き獨り子を、憎や聟めが殺せしと、さこそ恨み憎しみの、是罪障となるぞとて、共にひれ伏し泣きければ、いや父樣は男氣の思ひ諦め有るべきが、愛しや在所のお袋樣、姑母なりとて一日の、給仕へした事もなく、大事の子をば娶故に、失ふた殺したと、お叱りなされんこれ一つ、目の不自由な伯母樣の、力と成るはこち女夫、さぞ今頃は泣き悲しみ、眼でも眩ぬか、どうしたと、胸に塞がる是二つ、又母樣の十三年、觀音經を書ませう、佛になつて下さんせと、墓に向うて約束の、是が違うた何やかや、斯く迄重き罪科の、閻魔の前には黑鐵の、帳に付くと聞くものを、善い所へよも往かじ、火水の地獄も厭はねども、夫婦別れて行かうかと、是のみ猶も迷ぞと、聲をもをしまず歎きける。

（卯月の紅葉）

の如き切なる人情、いづれか彼が妙文の一斑を覗はしむるものにあらざる。されど其の弊とする所も決して無しとは云ふを得ず。この天才白玉の微瑕

辭世

とすべきは筆の走るにまかせて、ともすれば眞摯を失へる所にあり。「重井筒」に徳兵衛が一念發起して悪所通はもうせぬと女房に誓文たて乍ら、家を出づればまた〳〵女を思ひ出し、行かうか行くまいかと思案のところ

辻を越えては又戻り、辻に立つたり佇(つくは)ずむたり、行くも歸るも定まらず、どうせうか斯(か)樣(う)生姜酒、熬(い)りつく樣に氣がなつて、胸かき廻す玉子酒、心二つに打ちわつて、君が方へと走り行く、後は涙の玉子酒、霜の白みに……

の如きは、悲痛切實なるべくして輕快洒落に失したる一例なり。彼は享保九年十一月廿一日七十二歳にして歿す。辭世に曰はく

代々甲冑の家に生れながら武林を離れ、三槐九卿に仕へ咫尺し奉りて寸爵なく、市井に漂て商賣知らず、世のまかひもの唐の大和のをしへある、道々技能雜藝滑稽の類まで知らぬ事なげに、口にまかせ筆に走らせ一生を囀りちらし、今はの際に云ふべく思ふべき眞の一大事は、一字半句もなき倒惑こゝろに、心の恥をおほひて七十餘の光陰、思へばおぼつかなき我世經畢ぬ、もし辭世といふ人あらば

それ辭世去ほどに扨も其の後にのこる櫻の花しにほはゞ

第九節　竹豐二座の作者

浄瑠璃の進歩

豐竹座

近松門左衛門によりて浄瑠璃文學が一新せられ、元祿文藝の花茲に咲き出づるに至りしより以來、この機運に乘じて浄瑠璃作者として世に立つもの次第に多きを加ふるに至り、操の人形に改良を施し、舞臺道具に意匠をこらし、文學と音樂との調和を計り、筋の變化に心を用ゐる等、劇詩として形式上の約束は次第に整頓せらるゝこととなれり。蓋しこの進歩には、竹本座の外豐竹座の設立ありて兩座互に興行に競ひしこと、與りて力ありしものなるべし。竹本筑後椽の門に豐竹若太夫あり。元祿十五年、同じき道頓堀に別座を構へて豐竹座と稱し、享保十六年受領して豐竹越前椽と號す。寶永二年師病を以て竹本座を退き、竹田出雲之に代りて座元となりしよりは、二座殆ど對峙の有樣を以て浄瑠璃操を興行し、別に作者を置きてしきりに新作を出さしめぬ。音節に、人形に、文學に、いよ〳〵巧妙を極むるに至りしは、恐らくはこの結果と見るべし。されど豐竹座の作者中、先輩門左衛門に比肩すべき大家あることなく、

竹本座に於ても、門左衛門以後彼に亞ぐの大才少く、形は整ひ、筋は巧に、劇の約束を履んで變化の面白きものを生ずるに至りたれども、清新なる詩美、滑脱なる麗筆に至りては、到底門左衛門に並ぶべき者あらはれず、詞藻の缺乏せる所は、猥りに語呂の諧調を尙び、氣魄の衰ふる所は二人或は數人して一曲を分擔し、各短き部分に於て斷片的巧妙を衒はんとする傾向を生じ來りたり。されば一曲を通じての大なる趣向なく、弊としては每節同詩美の重複をも生じ、前後相照して壯大なる趣を見るといふ如き事は、次第に乏しきものとなり來りぬ。次に少しく兩座の有名なる作者を傳すべし。

合作

竹田出雲

竹田出雲(二三五一―二四一六)。名は清定、千前軒と號す。父は阿波の人、初出雲椽となり、後、近江椽と改む、寛文の頃大阪操座の座主たりき。父の歿後、兄清英、近江椽となり、弟清定出雲椽と名宣る。竹本筑後退隱するに及びて代つて座主となり、享保八年文耕堂と共に始めて「大塔宮曦鎧」といふを作り、門左衛門に添刪を乞ひぬ。これ實に彼が處女作にして又今後の流行となれる合作の始なり。文詞の妙もとより門左衛門に及ぶべくもあらずと雖も、彼が座元として舞臺と觀客とに注意せる結果、劇としての趣向と諸種の整頓とは更に一歩を進めたるものあるを見る。その著作大凡そ卅餘種、就中名あるものを

大塔宮曦鎧	文耕堂合作	享保八年二月
芦屋道滿大内鑑		同十九年十月
平假名盛衰記	文耕堂等合作	元文四年四月
菅原傳授手習鑑	並木千柳等合作	延享三年八月
義經千本櫻	三好松洛等合作	同四年十一月
假名手本忠臣藏	同上	寛延元年八月

忠臣藏

等とす。いづれも淨瑠璃のまゝ或は歌舞伎狂言に改作せられて、今も世に行はるゝ題目なるが中に、殊に「忠臣藏」は赤穗義士の事件を仕組みたものにして、これを題目とせる者には當代前後門左衛門の「基盤太平記」、宇治加賀の「忠臣いろはの夜討」、並木宗輔の「忠臣こがねの短尺」、近松半二の「忠臣講釋」、歌舞伎の「忠臣いろは軍談」等その外尙ほ多數あれども、今に至るまでひとり大に行はるゝものを出雲がこの作とす。「手習鑑」は菅公傳卽ち天滿宮の一代記を骨子とせる

手習鑑

ものにして、三段目道明寺は三好松洛の筆、同じき櫻丸切腹は並木千柳、四段目寺子屋は出雲の作に出で、八月二十一日より十月二十五日まで六十五日間の大入を取れるものと云ふ。

寶暦六年十月二十一日歿す。年六十六歳。辭世に、影凉し水に彌勒の腹袋。

ヲ、其舌の根の乾かぬ内に早く討て、とく切れと玄蕃が權柄、ハット斗に源藏は、胸をすゑてぞ入りにける。傍に聞居る女房は、爰ぞ大事と心も空、檢使に四方八方と、眼を配る中にも松王、机文庫の數を見廻し、詞「ヤア合點のいかぬ、先だつて逝だがきらは以上八人、机の數が一脚多い、其倅はどこにをるぞと、見咎られて、戸浪ははつと、詞イヤこりやけふ初て寺、イヤ寺參りした子がござんす、何馬鹿な、ヲ、それ〳〵是が則菅秀才のお机文庫と、木地を隱した塗机、さつとさばいて言拔ける、詞何にもせよ隙どらすが油斷の元と、玄蕃諸共つッ立ち上る、こなたは手詰の命のせと際、奥にはばつたり首打音、わつと女房胸を抱き、踏込む足もけしこむ内、武部源藏白臺に、首桶乘せてしづ〳〵出で、目通りに指置き、詞ぜひにおよばず菅秀才の御首打奉る、いはゞ大切な御首、性根をすゑてサア松王丸、しつかり見分せよと、忍びの鍔元くつろげて、虚といはゞ切付けん、實といはゞ助けんと、堅唾を呑んでひかへ居る。

詞「ハ、、、、、何の是敷に性根處が、今淨玻璃の鏡にかけ、鐵札か金札か、地獄極樂の境、家來衆、源藏夫婦を取卷きめされ、かしこまつたと捕手の人數、十手をふつて立ちかゝる。女房戸浪も身をかため、夫はもとより一生懸命、サア實檢せよ見分と、いふ一言も命がけ、後は捕手向ふは曲者、玄蕃は始終眼を配り、爰ぞ絶體絶命と、思ふ内早首桶引き寄せ、ふた引明けた首は小太郎、實というたら一討と、早拔きかける戸浪は祈願、天道樣佛神樣、あはれみ玉へと女の念力、眼力ひからす松王が、ためつすがめつ窺ひ見て、詞ムウコリヤ菅秀才の首打つたは、まがひなし相違なしと、いふに惚り源藏夫婦、あたりきよろよろ見あはせり。檢使の玄蕃は見分の、詞證據と、出かした〳〵よく打つた、詞褒美にはかくまうた科ゆるしてくれる、イザ松王丸片時も早く時平公へお目にかけん、いかさま隙取つてはおとがめもいかゞ、せつしやはこれよりおいとまたまはり、病氣保養いたしたし。「ヲ、役目は濟だ、勝手にせよと首うけ

取り、玄蕃は館へ松王は、駕に搖れて立歸る。夫婦は門の戸びつしやりしめ、物をも得云はず、青息吐息、五色の息を一時に、ほつと吹出す斗なり、胸撫でおろし源藏は、天を拜し地を拜し、詞「ハア、有がたや、忝なや、凡人ならぬ我君の御聖德が顯れて、松王めが眼が霞み、若君と見定めて歸つたは、天成不思議のなす所、御壽命は萬々年、悅べ女房、詞「イヤもう〳〵大抵の事じやござんせぬ、あの松王が目の玉へ、菅亟相樣がはいつてござつたか、但し首が黃金佛ではなかつたか、似たというても瓦と金、寶の華の御運開きと、餘り嬉しうて涙がこぼれる。「ハア、ありがたや尊やと、悅びいさむ折からに、小太郎が母いきせきと、迎と見えて門の戸たゝき、詞「寺入の子の母でござんす、今漸く歸りなしたと、いふ聲聞くより又惱り、一つ遁れてまた一つ、こりやマア何とどうせうと、妻が騷げと夫は胴すゑ、詞「コリヤ最前いうたは爰の事、若君にはかへられぬ、狼狽者めと戸浪を引退け、門の戸ぐわらり引明くれば、女は會釋し、詞「コレハまあ〳〵御師匠樣でござりますか、わるさをお賴申します、どこに居やるぞお邪魔で有ると、いふを幸、詞「イヤ奥に子供と遊んで居ます、連立つて歸られよと、眞顏でいへば、詞「ヲそんなら連て歸りましよと、すつと通るを後より、只一討と切付くる、女もしれ者ひつぱづし、逃げても逃さぬ源藏が、及するどに切付くるを、我子の文庫ではつしと請けとめ、詞「コレ待つた待たんせ、こりやどうしやと、刎ねる及も用捨なく、又切付くる文庫は二つ、中よりばらりと經帷子、南無阿彌陀佛の六字の旗、現はれ出でしはコハいかにと、不思議の思に劒もなまり、すゝみかねてぞ見えにける。小太郎が母涙ながら、詞「若君菅秀才のお身がはり、お役に立つて下さつたか、まだか、樣子が聞きたいと、いふに惱り、詞「シテ〳〵それは得心か、得心なりやこそ此經帷子六字の幡、ソウして其元は何人の御內證と、尋ぬる內に門口より、詞「梅は飛び櫻はかるゝ世の中に、何迚松はつれなかるらん、女房悅べ、悴はお役に立つたぞと、聞くよりわつとせき上げて、前後不覺に取亂す、ヤア未練者めと呵り付け、むづと通るは松王丸、見るに夫婦は二度惱り、夢か現か夫婦かと、軻れて詞もなかりしが、武部源藏威儀を正し、詞「一禮は先跡の事、是迄敵と思ひし松王、打てかはつた所存はいかに、いぶかしさよと尋ぬれば、ヲヽ御不審尤、存知の通我々兄弟三

人は、めい〳〵にわかれて奉公、情なや此松王は、時平公に從ひ、親兄弟とも肉縁切、御恩請けたる菅丞相様へ敵對、主命とはいひながら皆是此身の因果、何とぞ主從の縁切らんと、作病かまへいとまの願、菅秀才の首見たらば、暇やらんと今日の役目、よもや貴殿が討ちはせまい、なれども身がはりに立つべき一子なくばいかゞせん、爰ぞ御恩報ずる時と、女房千代といひ合せ、二人の中の忰をば、先へ廻して此身がはり、詞机の數を改めしも、我子は來たかと心の著、菅丞相には我性根を見込玉ひ、何とて松はつれなからうぞとの御歌を、松はつれない〳〵と、世上の口にかゝる悔しさ、推量あれ源藏殿、せがれがなくばいつ迄も、人でなしと云はれんに、持つべき物は子なるぞやと、いふに女房猶せき上、草葉のかげで小太郎が、聞いて嬉しう思ひましよ、詞もつべき物は子なるとは、あの子が爲によい手向、思へば最前わかれた時、いつにない跡追うたと、呵つた時の其悲しさ、冥途の旅へ寺入と、早虫がしらせたか、隣村へ行くというて、道まで逝で見たれ共、子を殺さしにおこして置いて、どうマア内へ逝なるゝ物ぞ、死顔なり共今一度見たさに、未練と笑うて下さんすな、包みし祝儀はあの子の香奠、四十九日の蒸物迄、持つて寺入さすといふ、悲しい事が世に有らうか、育も生れも賤しくば、殺す心も有るまいに、死ぬる子は媚よしと、美しう生れたが、かはいや其身の不仕合、何の因果で疱瘡まで仕舞うた事じやとせき上げて、かつばとふして泣きければ、倶に悲しむ戸浪は立寄り詞最前に連合の、身がはりと思ひ付た傍へいて、お師匠様今から頼上げます と、云つた時の事思ひ出せば、他人のわしさへ骨身が碎ける、親御の身では御道理と、涙添ふれば、イヤこれ御内證、コリヤ女房も何でほえる、覺悟した御身がはり、内で存分ほえたでないか、御夫婦の手前も有る、イヤ何源藏殿、申付けてはおこしたれ共、定めて最期の節、未練な死を致したでござらう、イヤ若君菅秀才の御身がはりといひ聞したれば、いさぎよう首さしのべ、アノ通隱れもいたさずにナ、につこりと笑うて、ムヽヽヽヽヽハヽヽヽヽ、出かしやりました、利口なやつ、りはつなやつ、けな氣な八つや九つで、親にかはつて恩送り、お役に立つは孝行者、手柄者と思ふから、思ひ出すは櫻丸、御恩も送らず先立ちしは、嘸や草葉のかげよりも、うらやましかろ、けなりかろ、忰が事を思ふに付

け、思ひ出さるゝ〳〵と、流石同腹同性を、忘れかねたる悲歎のなみだ、

（菅原傳授手習鑑）

松田和吉

松田和吉。出雲と共に、始めて「大塔宮」を合作せる文耕堂は彼が號なり。正德三年始めて「河内國姥が火」を出し、享保七年「佛御前扇車」を作りぬ。彼の作として名あるを「御所櫻堀川夜討」、「鬼一法眼三略卷」、「壇浦兜軍記」、「須磨都源平躑躅」等とす。されど多くは長谷川千四、三好松洛等との合作にして獨作は少し。

長谷川千四

長谷川千四。もと大和長谷寺の僧なり。還俗して難波に住し、享保の頃「京土產名所井筒」を作りて大に世に稱せらる。其他合作數種あり。

三好松洛

三好松洛。難波の醫士、もと伊豫松山眞言宗願成寺の住職なりきと云ふ。竹田出雲に師事して淨瑠璃作者となる。合作に關係せるもの五十餘種。次の淨瑠璃衰頽期に亘りて近松半二等と共に作を出し、明和八年「妹脊山婦女庭訓」には後見としてこの名を出せり、時に年七十六歳と。

以上は竹本座に附屬せる作者の主なる者なるが、之に對して豐竹座に立籠り、近松以後、出雲、松洛等と拮抗せる文學者は、紀海音、西澤一風、並木宗輔等なり。

紀海音

紀海音（二三二三―二四〇二）姓は榎並名は喜右衞門、父は俳諧師貞因、兄は有名なる狂歌師油煙齋貞柳なり。海音初、黃檗宗の僧徒たりしが、後還俗して大阪に住し、醫を業とす、又國學を契沖阿闍梨にうけて契周と號し、淨瑠璃文學者となるに及びて紀海音と稱す。之より先、豐竹若太夫、竹本義太夫の門より出でゝ宇治加賀、井上播磨等の古淨瑠璃を語り居たりしが、元祿十二年竹本座擧りて安藝の宮島に下りし時に際し、若太夫、海音に囑して「傾城懷子」を新作せしめその座を借りて之を興行しぬ。これ海音が處女作にしてまた豐竹座分立の一聲援となりしものなり。かくて元祿十五年豐竹座が別に芝居を道頓堀に始むるや、海音はこれより座附の作者として竹本座の近松に相對し、その年、門左衞門がかの十二段草紙を改作して「十二段長生島臺」となせるを、更に筋に變化を與へて「末廣十二段」を出せるを始とし、十六年近松が「曾根崎心中」を出せば翌年海音は「八百屋お七」を作り、寶永二年に近松が「用明天皇職人鑑」をつくれば、海音は翌年に「播州曾根松」を出し、正德元年近松に「梅川忠兵衞冥途飛脚」作らるれば、海音は同年に「油屋お染袂白絞」を出していれづも行れぬ。其の外彼の作

としては「鎌倉三代記」、「心中二つ腹帶」を始め時代世話凡て四十種に及ぶ。此の如く彼は豐竹座によりて竹本座の近松に相抗せるが如くなるも、その文藻と達筆とに於ては到底近松の敵にはあらず、從つて今に行るゝ所も甚だ少し。彼は元文元年夏法橋に敍せられ、寛保二年十月四日大阪に歿す。年八十。

入相過されば風雅の歌人は、戀とや聞かん蟲の音も、澤の蛙の聲々も、修羅の街の戰と、身に引締むる兜の緒、若宮口の戰場より、一文字に取つて返す、心は更に後れねど、若落人と人や三浦が孝行の、念力通ず母の軒、嬉しや是所ぞ、氣の張弓、始めてがつくり門口に、かつぱと轉ぶ物音は、胸に答ふる二世の緣、心時姫走出で、見紛ふ方無き武者振の、ヤア三浦樣かと駈け寄つて、抱き起さんも大男、ヨコレ時姫でござんすと、言へども正氣から悲しや、詮方泣く間も有合はす、幸氣付の獨參湯、灌ぎ掛けたる藥水の、一滴五臟に浸み渡り、むつくと起きて、ヨコ母人は何所に、ヲヽお氣が付いたか懷かしや、と、鎧にひしと縋り付き、ヨコムヽ思ひ寄らぬ時姫殿、爰へは如何して、問ふ間も惜しや母人に、對面爲んと行くを引留きめ、ヨコ時姫殿とは聞えなせぬ、何ぼお嫌ひ成されても、私はお

前の女房じや、夫の替りに母樣の、介抱に來たが何の不思議、ヨコムヽすりや此程より付き添ひ居るか、シテ母人の御機嫌は、ヨコ今すや〳〵と御寢なつて、ヨコお食は如何じや、ヨコアイ何指上げても厭と仰しやる、今朝は漸粥の湯を少しばかり、ヨコハア聞きしに違はず、夫では御本復覺束無し、ヨコサアされどもお氣の御實正なは、獨參とやらの力、藥の驗は目前、今お前のお氣の付いたも、ヨコ扨は母に與ふる藥で精神凉しくなつたるも、思はず知らず親の慈悲、ハア勿體無い〳〵お休ならばお寢顏なりと拜まんと、母も我身も是ぞ此の、一世の別と思ふにぞ、道の勇氣も恩愛の、肉身分けしはら〳〵と、先立涙案内にて、ヨコ物音響かば驚き給はん、靜に〳〵と心沈めて病所の口、立寄れば母の聲、ヨコ嫁女〳〵、ヨコ嬉しやお目が覺ましたか、三浦樣がお歸りぞや、ヨコ義村參上仕ると、明くる隔を磴と鎖し、ヨコヤレ此障子明けまいぞ明けまいぞ、抑三浦が歸りしとは、坂本の城へ歸りしか、

西澤一風（二三二五―二三九一）。難波の書賈。享保八年田中千柳と共に「建仁寺供養」を出せしより、爾後千柳及び安田蛙文等と合作を出せること十餘種に及ぶ。就中享保十一年四月宗輔蛙文と合作せる「北條時頼記」は、近松が「百人上

並木宗輔

蘭」の改作なるも、豐竹座大當りの淨瑠璃にして、竹本座の「國性爺」と幷び稱せらる。

並木宗輔（二三五四―二四一〇）。通稱を松屋宗助と云ひ、始は田中千柳と號したりしが、一風と共に「北條時賴記」を作するに及んで並木宗輔と改む。豐竹座に於ては海音に亞ぐ作者として多少彼の獨作もあれど、尙當代一般の風として合作多く、前後彼の關係せる物二十餘種あり。就中有名なるを

清和源氏十五段	安田蛙文合作	享保十二年二月	
攝津國長柄人柱	同上	同年　同月	
後三年奥州軍記	同上	同　十四年正月	
一休和尙蛯川新右衞門	本朝擅特山	同　十五年五月	
那須與一西海硯	並木丈助合作	同　十九年八月	
苅萱桑門筑紫轢		同　二十年八月	
七條河原	釜淵雙級巴	元文二年　七月	
道成寺現在蛇鱗	淺田一鳥合作	寛保二年　八月	

刈萱桑門

等とす。かくて寛延二年、傑作として今に行はるゝ「一谷嫩軍記」の趣向を立て第三段目まで執筆せしが、病革りて自ら完成するに至らず、九月七日、年五十七にして歿す。歿後淺田一鳥等五人之を補作して寶曆六年十二月興行せり。彼の門に丈助、永助あり。又後世演劇脚本の作者として並木を名宣る者多きは直接或は間接に彼の流を汲める者なり。此の外尙二三の作者ありと雖も、其等の存否は文學の盛衰に關する所なきを以て今はこれを省略す。

山の段

行く空の雲間に近き八葉の、峯に紫雲のたなびきし、高野山と聞えしは、三面に山連り、源一水にして萬水東に流れ、大師二犬に道を習ひ、開き初めし靈地とかや、いたはしや石童丸、かゝる難處をたど〳〵と、心も空に浮草の、根ざしの父は顏知らず、名のみ知るべに尋ね行く、袖の涙ぞ哀なる、思ひ高野の谷川や、弓手は岩間、右手は天野の山嵐、峰に煙の一と結、見仰げて通る不動坂、踏みも通はぬ獨木橋、名殘情も横吹の、嵐に木の葉散りはてゝ、心細道突杖は、下りつ上りつ行先を、問へど岩根の松蔭に、暫時休らひ給ひける。百年の榮耀は

風の前の燈、悟れば吾も佛なり、煩惱菩提と諦めて、加藤左衞門尉繁氏入道、苅萱道心と名を改め、佛法修行の山坂を、たどるも後世のたよりかや、石童親子の奇緣にや、思はず側に走り寄り、詞「申し御出家樣此御山に今道心のおはしまさば、敎へてたべとありければ、詞「コハ與がる小人かな、九百九十の寺々毎日入りくる初發心、昨日剃つたも今道心、一昨日剃つたも今道心、左樣に尋ね給ひては知れ難し、俗の時の名を云ふて尋ねられよと、身の上の事とも知らず仰ある。「されば、とよ、尋ぬるは、自らが父上、二つの年別れし故、お顏も知らず、もとは筑紫松浦黨、加藤左衞門尉繁氏樣と、云ふより偖ては我子かと、取縋らんとしたりしが、待て暫時、佛前で誓をたてたる恩愛妹春爰ぞと思ひ、餘所々々しく、詞「ム、年も行かぬに遙々と慕ひ來る志、眞の父が聞かれなば、嬉しくもなつかしく、飛びつく樣に覺されむ、さり乍ら此の山の掟にて、譬へ廻逢ひたりとて、名乘り逢ふ事かつふつ適はず、早々國へ歸り、母御を大事にかしづくが、又一つの孝行と、言ひ敎ふれば、詞「イヤノウ我國は大內と云ふ者攻めなやまし、母樣諸共此山の麓まで參りしが、悲しき事は母樣が、道のつかれに

煩うて、命の內に唯一と目、父に逢はせて呉れよとの御歎、情と思うて御あり家、御存じならば敎へてと、目に持つ涙はら〳〵と、抑へ兼ねたる有樣に、我こそと名乘りて聞そか、イヤ勿體ない師の御坊の戒と、云うて遙々來た者を、知らず顏見ぬ顏が、どうなるものぞ不憐やと、胸にせき來る血の涙、はつとばかりに泣き給ふ。石童丸は目賢く、さ程に歎き給ふのは、若し父上ではあらざるや、早く名乘つて給はれと、縋り歎かせ給ふにぞ。

熊谷陳屋の段

行く空も、何時かは冴へん須磨の月、平家は八島の浪に漂ひ、源氏は花の盛りを見る中に勝れて熊谷が、陣所は須磨に一構へ、要害嚴しき逆茂木の、中に若木の花盛、八重九重も及びなき、それかあらぬか人毎に、熊谷櫻と言ふぞかし、花折らせじとの制札を、讀んで行く人讀めぬ人、一つ所に立集り、扨も咲いたり〳〵、花より見事な此制札、辨慶殿の筆じやげな、扨も見事一も讀めぬヲヽ、あれはの、義經樣が此花を惜み、一枝切らば指一本切るべしとの法度書、ヤア花の代りに指切ろとは首切る下地、ヲヲ怖や、見て居る中も虎の尾を踏む心

地する、皆ござれと花に嵐の臆病風、散々にこそ別行く、遙々と尋ねて玆へ熊谷が、妻の相模は子を思ひ、夫思ひの旅姿、陣屋の軒を爰や彼處と尋ねしが、幕に覺えの家の紋、嬉しや爰と内に入る、折節家の子堤の軍次立出でゝ、「是は〳〵奥樣か、ヲヽ、軍次、そなたも息災さうな、マア目出度い〳〵、熊谷殿や小次郎も變る事はないかの、早う、逢ひたい逢はせてたも、「ハア檀那は今日御廟參、小次郎樣は先頃より、御前勤でお下りなし、マア〳〵長の御旅路お疲勞をお休めと、挨拶とり〴〵なる所へ、敦盛卿の御母藤の局、虎口の難を遁れ來て、倒つ轉びつ花の蔭、陣屋を目掛け走付き、跡より追手のかゝる者、影を隱して給れ、とけはしき體に驚きて、相模は傍へ走寄り、見るに見かはす互の顏、ヤアお前は藤のお局樣ではないか、「さういやる其方は相模じやないか、「お床し樣やと手を取つて、マアこなたへと伴ひ入れ、「誠に一昔は夢と申すが、大内に御座遊ばす時、勤番の武士佐竹次郎殿と馴初め、御所を拔出で東へ下り、お前樣のお身の上を承はれば、御懷胎のお身ながら、平家の御家門參議經盛樣方へ、緣付き給ふとの噂、其折に世盛の平家、御威勢は益々と、蔭ながら悅びましたに

此度源平の戰、御一門も散々と聞くに付け、アヽ、此藤の方樣は何となされた、どう遊ばしたと、一人苦にして居りましたに、マア御機嫌なお顏を見て、お目度やお嬉しや、「ヲヽ、其方も無事でマア嬉しい、懷胎で出やつた時の子は姫ごぜか男か、息災で育て居るかと、ちよつと寄つても女子どし、問つつ問はれつ年月に、積る言の葉繰返し、嬉し涙の種ぞかし。藤の方涙ぐみ、「世の盛衰は是非もなや、其時に產落したは、無官太夫敦盛とて、器量發明揃ふた子を、今度の軍に討死させ、夫は八島の波に漂ひ、我のみ殘る憂き難義、淺ましの身の上と慨ち給へば、お道理〳〵、以前の御恩も有り、良人にも語り、お身の片付後世の營、お心任せに致しませう、以前は佐竹次郎と申して、北面同然の武士、只今にては武藏國住人志の黨の旗頭、熊谷次郎直實と、人も知つた武士と聞くより御臺は、ヤアそなたの良人の佐竹次郎、今では熊谷次郎といふか、「アイ、「スリヤあの熊谷次郎はそなたの夫よな、ハアはつと吐胸の氣を鎭め、何と相摸、以前大内にて不義顯れ、佐竹次郎と諸共に、禁獄させよとの院宣、自らが申宥め、御所の御門を夜の内に、落してやつたを覺へてか、「アツア其時の御恩、何

の忘れなせうぞいな、「ム、其恩を忘れずば助太刀してそちが夫熊谷を、自らに討たしてたも、「エ、イそりやや又何のお恨みて、「サア最前も話した院の御所のお胤、無官太夫敦盛を、そちが夫熊谷が討つたわいの、「エ、そりやなアこれでござりなすか、「スリヤ其方は何にも知らぬか、「サア遙々と東より、今來て今の物語、聞いてと胸の誠しからず、追付夫が歸り次第、樣子を尋る其間、暫時お控へ下されと、詞を盡し、理を盡し宥る折に表より、梶原平次景高、所用有て推參と呼ばる聲、「ヤア何梶原とや、見付けられてはお身の大事、先々こちへと御臺の手を取り、一間へ伴ふ其中に、堤の軍次立出で、「今日は主人直實、志有つて廟參、御用あらば、某に仰置かれ下されと、地に鼻付くれば、平次景高、「なに熊谷殿は他行とな、ソレ家來共、其石屋の老爺め引立て來れ、「はッと答へて科もなき白毫の彌陀六を、平次が前に引据ふれば、「ヤイなまくら老爺め、汝何者に頼まれ、敦盛が石塔は建てたやい、平家は殘らず西海へぼッ下し、誂ゆべき相手なければ、察する所源氏方の二股武士が、頼みしに違ひは有るまい、サア眞直に白狀ひろげ、

竹田小出雲

第四章　東遷時代（二四〇五―二四四六）

第一節　上方淨瑠璃

多少の消長はあり乍ら、元祿より享保元文の頃までは竹本座豐竹座相競ひて新作を出し、人形に衣裳に道具に改良を施し、太夫人形遣にも名手出で、操淨瑠璃は當時全盛の時代なりき。されど星移り物變りては、元祿の賑は何時迄も持續すべきにあらず、寶曆明和より安永天明に及びて淨瑠璃の創作次第に衰へ、一度發展せる上方の文運も今や東方江戸に移らんとして、世は漸く散文的となり下りぬ。此の間に於て其の名を斯界に馳せたる作者は、竹田小出雲、吉田冠子、近松半二及び爲永太郎兵衛等二三に過ぎず。

小出雲。出雲の子なり。關係せる作のうち有名なるものは

新薄雪物語	文耕堂合作	寛保元年五月
軍法富士見西行	並木千柳等合作	延享二年七月
夏祭難波鑑	同　上	同　年七月

日高川入相花王　近松半二等合作　寶暦九年二月

難波鑑は九段物の始にして大に世に行れ、人形に帷子を著せ水を遣ひしとの事にて有名なり。

吉田冠子

吉田冠子。人形遣竹本三郎兵衛の子文三郎の別號なり。父子三代の間人形に巧を施し、又之を遣ふに巧なるを以て名あり。作者としての彼は出雲に學び、寶暦元年三好松洛と共に門左衛門の「丹波與作」を改作し、「戀女房染分手綱」を出して名を得たり。されど寶暦九年竹本座と衝突して一時大阪を去り、京及び江戸に赴きて人形を遣ひ、人形に於ては至る所に聲名を博したりしが、此頃より操淨瑠璃は衰頽の運に向ひぬ。

近松半二

近松半二。門左衛門の交友にして、儒醫たる、穂積以貫の子なり。門左衛門の遺硯を傳へたるの故を以て近松を名宣る。作は竹田出雲に學び、寶暦元年始めて竹田外記に從つて「役行者大峰櫻」を合作す。時に年廿七歳なりき。これより松洛、小出雲、冠子等としきりに合作を出し、竹本座が次第に衰頽の運に向ひ來りし間にも、彼は振つてそが作者の局に當り、明和三年正月に「本朝廿四孝」、

同十月に「太平記忠臣講釋」を出して大に譽を得しが、操衰頽の大勢は遂に如何ともすべからず、翌年八月に有名なる「關取千兩幟」を出せしも不入にして中止し、十二月「三日太平記」を出せるを最後として、竹本座は一度退轉の止むなきに至り、座は歌舞伎芝居に變じたり。これと相前後して豐竹座も衰頽し、明和六年兩座合同の興行を企てしも成功せず、豐竹座は北堀江座に跡を殘して其の名絶え、竹本座のみ再び起りて「近江源氏先陣館」を新作し、又明和八年正月半二等一生の技能を振ひて「妹脊山婦女庭訓」を作り、歴史に參照し近畿の名稱を取りこめ、五節句を寫し道具細工に十二分の注意を加へしかば、內容豐富に連想廣博を得て、この興行非常の大當りをなし、殆ど從來の損耗を償へりと傳へらる。この餘勢を以て竹本座は尙暫時の命脈を繼ぐを得たるも、彼が天明三年二月、五十九歳にして歿せし後は、上方の淨瑠璃また起つべからず。

兩座の退轉

妹背山婦女庭訓

淨瑠璃衰頽の原因

蓋し一時元祿享保に隆盛を極めたる淨瑠璃が、文學として音樂として未だ百年の星霜を經ざる間に、既に衰れなる末路を見るに至りしは何が故ぞ。これを總括して云へば時代精神の推移による自然の勢とは云ふべけれども、こ

れを細說すれば近松門左衞門の天才往き、竹本義太夫の大才去れりといふ事の外に、元祿以後漸く發達し來りし歌舞伎が漸次時代の嗜好に投じて操淨瑠璃の顧客を奪ひ去れるに歸因する事を忘るべかず。歌舞伎の起原發達につきては後章別に述ぶる所あるべし。ただ淨瑠璃に關係せる著しき點のみについて言はんに、當時歌舞伎狂言の次第に行れ來りしにも拘らず、操芝居の依然として盛行したりしは、全く作者に近松以下の名家を得、人形に辰松、小山、吉田の巧手を有し、之に三味線に合せて語る音節の大に發達したる物ありしに、之に反して歌舞伎芝居は能樂や狂言やに倣ひて未だ原始の狀態を脫せず、一は俳優の姿色によりて流行を追ふが如き有樣にある間なりしを以て、藝術的の發達は未だ遠く操淨瑠璃に及ぶ能はざりし故なり。然るに實曆明和以後に至り明星の凋落と共に創作次第に衰へ、人情の推移に從つて操が陳腐單調となり來りしに引きかへ、歌舞伎狂言は久しく墮習に甘んぜずして、自然的發展の地步を確立し、從前の單純なる歌舞や能狂言の稚態を改めて、技を〳〵進み、操淨瑠璃の筋、音樂、臺詞、表情に至るまでも操芝居の長所は出來うるだけ己に攝取して歌舞伎狂言を多趣豐富ならしむるに至りしかば、今までは操淨瑠璃を嗜好したりし世間の觀客も、漸く不自然なる人形を離れて、實際の表情に富み、複雜なる變化に適應する俳優の上に同情する事となりしなり。もとより自然の趨勢と云はざるべからず。これより淨瑠璃は多く聽くべきものにして見るべき物にあらざる事となり、今は關西の小部に操芝居の餘波を留むるに過ぎずして、東京及び地方に於て俗間に行はるゝ淨瑠璃は、殆ど語物としてのみ聽くべきものとなれり。

江戸淨瑠璃の諸流

第二節　江戸淨瑠璃

寛永以後、正保慶安の頃、薩摩淨雲の門下一時に輩出して江戸の藝壇に古淨瑠璃の行はれし狀は、前章にほゞ之を述べたり。元祿享保に至りて淨瑠璃文學が大阪に隆盛を極めたる頃に及びては、同じく淨雲の亞流より肥前節、江戸節（一名半太夫節）河東節、式部節、手品節、外記節等大小の諸派競ひ起り、江戸も亦一時の隆盛を見るに至りぬ。されど其詞章卽ち文學に至りては、多く京阪の古淨瑠璃にして江戸の新作なし。又享保以後豐竹肥前椽を始め、多くの太夫人

肥前座

外記座

福内鬼外

形師も江戸に下りて義太夫節を興行したれども、其の語る所皆大阪物にして江戸の創作殆どこれなかりき。然るに寶暦明和以後大阪の藝壇次第に衰微し、文星漸く凋落する頃に及びて、江戸の淨瑠璃始めて隆盛ならんとし、明和安永以後は江戸に於て特殊の創作物も生じ、元祿の大阪には及ぶべくもあらずとするも、尙沈滯期の京阪には遙に勝りて、盛行の狀を見るに至りぬ。

江戸に義太夫節の操座を創設したるは、豐竹越前少掾の門下肥前掾なりき。彼の座は多く太夫を大阪より聘し、大阪の淨瑠璃をそのまゝに興行し居りしが、明和三年始めて作者を示さゞる「和泉式部軒端梅」を出せしより、六年三月に「蝦夷錦振袖雛形」(作者、玉泉堂、吉田二一、吉田冠子)同七月に「時代世話女節用」(作者、同上)を出して漸く江戸淨瑠璃の名目を擧げんとせり。

當時肥前座に對して外記座あり。薩摩外記の創設せる所たるによつて薩摩座とも呼ぶ。明和七年正月、「神靈矢口渡」を興行して大入大當を取りぬ。作者は福内鬼外、人形遣は吉田文三郎なりき。福内鬼外、姓は平賀名は國倫、通稱を源内と云ふ。天竺浪人又風來山人と別號す。もと讃岐志度浦の士、享保十四年を以て生る。夙に大志を抱き、家を弟に讓りて長崎に出で、本草窮理の學を修め、後江戸に來りて儒學國學を修む。性多能多藝にして企劃發明する所多かりしも、其鬼才よく世の用ゐる所とならず、僅に狂熱をば淨瑠璃戯作に洩して世をすねたりき。滑稽諧謔は卽ち積憤のゐふるゝ所に外ならざりき。彼が戯作には「風來六部集」(放屁論、痿陰隱逸傳、天狗觸髏鑒定問答、里のおたまき評、菩提樹の辨、飛だ噂の評)、「根なし草」、「長枕褥合戰」、「風流志道軒傳」等なり。淨瑠璃の作は神靈矢口渡の外

源氏大草紙　明和七年八月
弓勢智勇湊　同　八年正月
嫩葉相生源氏　安永二年四月
前太平記古跡鑑　同　三年正月
忠臣いろは實記　同　四年七月
荒御靈新田神德　同　八年二月

彼は決して深遠なる學者にあらざれども、詞藻豐富、行文奇拔なるは確に彼の

天才として認めざるべからざる所とす。就中「矢口渡」は彼の傑作として世に傳へらる。

南瀨六郎宗澄は、あまたの追手を斬りぬけて、忠義一圖に若君を、やう〳〵春に笈の内、深傷に弱る足たぢ〳〵、此家を目あてによろぼひ來り、詞「行暮せし旅人なるが盗賊に出逢ひ難儀至極、御家を見かけ御頼み申す、おかくまひ下されよと、内へ這入れば詞「ヤア其方は南瀨六郎「ム、人非人の由良兵庫、ヤレ思ひがけなき對面ぢやナア、悪人に向ひ詞はなし、サア〳〵勝負と詰掛くれば詞「ハ、、、血迷ふたるか六郎「イヤ存外の痴言、所詮助からぬ吾が命、儕が首を冥土の土産、「ム、血迷ふたとは其所のこと、何と尊氏公の御威勢見たか唐土天竺はいざ知らず、日本の地にありては、如何程のがれ隠るゝとも、袋の物を探るに等しく遂に尋ね出されん、其所を慮つてこの兵庫、手短に降參し、一廉の知行を取れば、コリヤこの通り裕の暮し、かの螳螂と云ふ虫は、己が斧を頼にして、車に向ふ眞つその如く、汝が武勇を頼にして鎌倉へ弓引かんとは、淺はかな了見、大きな者には呑まれ、長い者には卷かれるといふ諺の通、たとへ如何程働いても、御威勢にて取圍めば、行く先々が皆敵、其の上に其深傷、抵抗は覺束ない、「ヤア道知らずが吐したり、瓦となつて全からんより、玉となつて碎けよとは、古人の金言、醢になるとても、汝が如き不忠不義、恩を忘るゝ六郎ならず、「ホ、其理屈は聞えたが、今某と打果さば、ソレ其笈の内なる德善丸、誰有つて弁抱するぞ、サア篤りと分別せよと、星を指いたる一言に、詞「イヤサどうで逃れぬ御命、たゞし汝が善心に讎り、隠匿申す所存なるか、「イ、ヤがくまふ程なりや、鎌倉へ降參はせぬはやい、隠匿もせず本心にもかへらねども、高の知れた小悴一疋、鎌倉殿の害にもならねば、見のがしてやる分の事さ、「ム、確と見のがしてくれうや、「窮鳥懐に入る時は、獵人も之を捕らず、「ハア忝い命惜むにあらねども、御一門は皆散り〳〵、義峰公は御行方知れず、新田の家の御血統、殘り給ふは若君斗り、詞「大切の御命、見逃してさへ下さるれば、御恩は忘れぬ、コレ手を合して拜み申すと、油斷を見濟し近寄つて、唯一討と斬付けるを、騒がず鍔にて聢と受け、詞「ム、、、迚も及ばぬほでてんがう、其手では參るまい、さり乍ら木にも萱にも心置くは落人の例、疑は尤至極、コリヤ

見遣すと云ふ其證據と、刀の鯉口拔き懸けて、丁々々と金打し、詞「深傷の上に氣を揉まずと、奥の一間で養生おしやれ、ヘエ天に跼り地に拔足、思慮分別も愚に歸り、恁成下る我身の上、弓矢の冥加に盡きたるかと、暗む心を取直し、心ならねど是非無くも、奥の一間に辿り行く。程もあらせず討手の大勢、ばら〳〵〳〵と亂れ入り、矢襖作つて押取卷き、コハ何故の狼藉と言せも果てず捕手の頭、詞「新田の小怜德壽丸、南瀨六郎を付込んだり、御渡しあれど罵れば、人數の中より馬方の、寢言の長藏ぬつと出で、詞「コレ親方、金になる代物を、燒餅坂で取逃し、追手の衆の手に餘れば、何うでおいらが手際にやおへないと、見え隱れに跡ゐて來て、奥へ入つたを篤りと見て置いた、四の五の無しに渡さつしやれ、渡せ〳〵と大勢が、隙も有せず詰懸ける。折もこそあれ表の方、上使なりと呼ばつて、入來る竹澤監物、詞「ヤア家來共粗忽の擧動、皆引け〳〵と追退け、上座に通れば、「ム、思懸無き御上使とは、ホ、上使の趣餘の儀ならず、南瀨六郎德壽丸、最前道にて打洩せし追々の注進、尊氏公聞召され、元より故主の事なれば、兵庫が心底計り難し、吟味せよとの嚴命、早打にてかけつけしに、案の如く貴殿隱し置く條まぎれなし、昔の好に隱匿ふや、又首討つて出さるゝや、簡短の一口商、返答いかにと問ひかくれば、兵庫は何の應答もなく、側にありあふ弓と矢追取り、きり〳〵と引きしばり、一間を目當にきつて放せば、誤たずはつしと手答、血煙と共に障子を踏みはづし、朱になつて南瀨六郎詞「ヤア卑法至極の表裏者、甘き詞に吾を欺き、飛び道具にて仕留めんとは、ヤ愚々これしきのへろ〳〵矢、百筋千筋身に立つとも何程のことあらん、類を以て友とする、奸佞邪智の愚人ばら、一々首を幷べんと、無二無三に斬つてかゝる、心得たりと兵庫之介、受けつ流しつ上段下段、鋭き太刀筋此方は手負、心は矢竹に逸れども、斬り込む及受けはづし、左の肩先斬り付けられ、岸破と伏せばワッと泣く、若君奪ひ取る兵庫が早速、むつくと起きて六郎が、やらじと縋るを又一太刀、呟とのつけに反返るを、見向きもやらず、若君の首宙に打落し、檢使の前に差置けば、竹澤莞爾と笑を含み、詞「かねて知つたる貴殿の心底疑ふ筈はなけれども、德壽丸が面體を見知らざるこの監物、やきとりにへを念の爲、誰ぞ知見りし者やある罷り出でよと言ふ聲に、最前の馬方おづお

江戸の作者

づ這出で、首を篤と見あらため、今日道にて見付けし悖に相違はムりませぬ、「ホ、是にて萬事相濟んだり、尊氏公へ申し上げなば、嘸御悦喜褒美は追つて御沙汰あらんと立上れば、ハア何分にも御前宜しく近頃御苦勞千萬と、互の挨拶、竹澤監物、首取り持たせ立歸る。（神靈矢口の渡、身替の段）

猟狂なる彼が末路は、人をあやめて獄に投ぜられ、安永八年十二月十八日年五十一歳にして獄中に病死す。

此の頃より江戸淨瑠璃の作者として世に名をあらはすもの相續いて出で、就中森羅萬象（福内鬼外の門人、二代鬼外と云ふ）、紀上太郎（三井元之助といひ源内等の保護者にして亦戯作をなせり）、松貫四（萬屋吉右衛門といふ芝居茶屋の主人）、容揚黛（下谷長者町に松田といへる醫士）、烏亭焉馬（通稱は和泉屋和介、大工の棟梁にして狂歌をよくす。その編せる「歌舞伎年代記」は斯道に有名なり）等とす。今それらの作の有名なるものを擧ぐれば

吉野靜一目千本　松貫四、吉田仲二合作　安永四年正月

戀娘昔八丈　松貫四、吉田角丸合作　同　年九月

讀本淨瑠璃

糸櫻本町育　紀上太郎作、達田辨二補助同　六年三月

加賀見山舊錦繪　容揚黛作　天明二年正月

伽羅先代萩　松貫四、高橋茂兵衛、吉田角丸合作　同　五年正月

碁太平記白石噺　焉馬、紀上太郎等合作　同　七年八月

豐後節

この外舞臺に懸けざる讀本の淨瑠璃數種あり。されど江戸の文壇も、安永天明を過ぎては既に韻文隆盛の時代にあらず、大阪が寶暦明和に衰へたると殆ど同じ狀態に於て、勢力を失ひ、歌舞伎芝居之に代つて盛行せんとし、文化文政に及びては散文學大に勃興して茲に江戸文學の隆盛を見るに至りぬ。

江戸淨瑠璃を述ぶるに當りては、義太夫節及其文學を評論する外、尚視はざるべからざる重要事あり。これより先享保十五年、山本角太夫の門に出でたる都太夫一中の弟子、宮古路豐後掾、江戸に下りて濃艶なる節を語り、諸流を壓し大に人氣に投じたりしが、語る處多く男女の癡情に關し、此感化によりて風俗を壞亂する事も少からざりしかば、元文四年九月幕府令を下して豐後節を禁じぬ。されど此節いたく當代の人情を動し居したりしを以て、一旦の禁もよ

く其の實を收むる事難く、豐後掾の門人(一說に實子)文字太夫、また江戸に下りて常盤津と改め、新なる一流と稱して實は宮古路の流風を襲用したりしかば、世はまた喜んで常盤津節を迎ふるに至りぬ。其の門に富本豐前掾あり、初代二代相次いで富本節を語り、二代富本の門に清元延壽齋あり、又別に清元節を語りて其の流盛んに行る。こは文化文政に亘れる間なり。この外豐後節の一派に富士松及び新内あり、新内は尤も哀婉の調を以て稱せられ、その稱今も傳へて俗間に記せらる。此等諸流の關係はほゞ次の淨瑠璃諸流略譜に就きて見るべし。

常盤津
富本節
清元節
新内節

淨瑠璃系圖

- 杉山丹後掾 ― 江戸肥前掾 ― 江戸半太夫 ― 十寸見河東……(河東節)
- 薩摩淨雲
  - 櫻井丹波少掾 ― 和泉太夫(金平節)
  - 薩摩太夫 ― 外記太夫 ― 佐　内 ― 大薩摩主膳太夫……(大薩摩)
  - 虎屋源太夫
    - 伊勢島宮内 ― 宇治加賀掾(加賀節)
    - 井上播磨掾 ― 清水理兵衛 ― 竹本筑後掾
      - 竹本大和太夫 ― 竹本大隅掾
      - 豐竹越前少掾
        - 豐竹肥前掾
        - 豐竹筑前少掾……(義太夫)

- 山本土佐掾
- 岡本文彌(文彌節)
- 都太夫一中……(一中節)
- 宮古路豐後掾
  - 常盤津文字太夫……(常盤津節)
    - 富本豐前掾……(富本節)
      - 富本齋宮太夫 清元延壽齋(清元節)
  - 富士松薩摩掾 ― 鶴賀新内……(新内節)
  - 宮古路繁太夫 ― 宮古路薗八……(薗八節)

さて此等の諸流は、かの獨立して操芝居を興行せる義太夫節の如く、首尾一貫して大規模を有せる戲曲文學にはあらで、多くは單純なる古淨瑠璃を語り、或は古作を改作せる等の物のみにして、獨創と認むべき清新の作を有せず。殊に江戸に下れる豐後節以後は、その詞章多く狂言作者の筆に成り、別に芝居を立てずして歌舞伎に隷屬し、若しくは單に音節として嗜るゝのみに過ぎざりしなり。今も歌舞伎の大切所作事等に常盤津連中、清元連中等の呼稱を見るはこの餘波に外ならず。勇士の出端荒事等に出語をなす大薩摩といふ物も、外記節より出でゝ全く歌舞伎に隷屬せる遺物なり。

五せつくの内彌生　禿紋日雛形

「やつせばや、戀に心もだてそめゆかた、こゝにめぐりてゐはしまの、すゞにひかれてまねがれて、かむろ〳〵とさくらのこだま、花のあしたのふみもてはしる、なさけのみばゑかはゆらし」三津五郎出「通ふ神かぜふりそでも、やがて思ひの竹のつゑ、もとは尺八すへかけし、きせうせいしのふでのぢく、こゝに小六が世わたりも、道は一すぢ仲の丁、なじみのちや屋の明くれに、友まち合のつぢうらも、かむろは袖のふりあわせ、ゑんはいなものあは島の、ゆらいかたりて來りける。三津「これ〳〵子供衆さいぜんから見た所が、なにしあづまの新吉原、おまへもはなのみばへじやな。」といわれてさすがおもはゆく、そでをかざして半四郎「何をマアこちやそんなとはしらぬわいナア三津」イヤしらぬとはどふでんす、なんぼおさない禿衆でも、ゐきぢ手くだのはりくやう、コレおなごをまもりの御神にて「そも〳〵紀州名草の郡、かだあは島大明神のゆらいをくわしくたづねたてまつるに」せんしやうな大じんの、しやかいにはまつてうらやくそく、第三會目の姫みやにて「はりさいてれん女郎と申たてまつる」ほんぢはすなはち、こくうむてんの御きりやうにて、丑寅のかたは御一代の守り、ほぞんかけねなしせうあだつきのみせすがゞき、ちやんちやかしたながざしき、ながいへんじのあと引て、おいらんよびに「はしごから、のぞくやりての目をしのび」よいからねむるかね四つに、しよぎやうむじやうなこひも、あり「うはきではまるさんやぼり、ちよきは神代のうつぼぶね、あやのまきじた三ばいきげん、はやすかぐらのたいこもち、「ばけ物ばなしひけすぎて」おきまどはせる歌がるた、戀ぞつもりてゐつゞけに「ながゐふらちのやまひをも、すくはせたまふ「御せいぐはん」ごしんごんに、おんそろ〳〵ねむたかこそぐりそはかときやうじける半「ほんに氣がるなしゆぎやうじやさん、おまへもおゝかたこのさとに、ふかいおかたがあるで有ふな」あは島はたと手を打て三津「シタリまとにせんだんはふたばとやら、かむろの名にはわか葉ぢやなア、有やうは此わしも、ちつとゆかりがないでもなし半「そんなら私が其おかたを三津「こりやよからふあてゝみなサ、たれじや〳〵半「サアそれはな」ひく手わまたと見とれてほれて、ませたねがひのこむらさき、おゆかりさんの心のそこを、くんで見よなら井のもとに、さくらあぶなきうつり

氣を「きいてつかへのたねまいて、身じまひべやのべに筆に、戀のいろはのつぶてもじ、ほれたとたつた三つ、ですむ、それさへかほにひぢ枕「ふたつまくらのはしかけた、かむろは「田雲のかみさんの、かはゆがらんすさとそだち」はでやうわ氣の中でさへ、しんじつしんの二世三世、やくそくかたき女房氣は、うれしからふじやないかいな「イヤ〳〵そこらはほうだゝり「むかふはでもあじきなや、今の身すぎは新丁河岸、かんごんしんそんおはつほを「揚屋町々すずふりて、とうかみ江戸丁京町の、まがきへふみの「かただより「わしをだましてヲ、こわや「なんぼかむろでも、こちやわけしつて、よそのあくしよはわしやすかぬ、ういた手枕かりまくら、まくらびやうしの品さだめ三下り「あしのまろやにたがまろねせん、ぬしの心を引みんたんぼのかはざいふ、さつてもすいせん、かんつばき、おまへさゞん花びわの花「ながくみじかく其夜をかぞへ、しゆびもつがふもよしの木さいかちさるすべり、あれほどいふたにばからしい、もしもうせずはなんとせふ、かへす手品の程ひやうし「これかんたんのそれならで、やよいに花のはる遊び、たのしかりけるふぜいなり。

富本清元新内等の文學的價値少きは亦常盤津の上文を以てほゞ推知するを得べし。今引例を省く。

第三節　歌謠

平安朝末の今樣轉じて室町の小歌となり、戰國時代德川氏の始に隆達等の流行歌となりし由は前に云へり。同代以後三絃と箏との流行につれ、又世の泰平にして俗間歌謠を弄ぶの風も次第に盛ならんとし、此等小歌に種々の分派を生じ名稱を異にするもの數々生じぬ。蓋し文作もしくは內容上よりの區別と云ふよりは、曲節の差違に基づくもの多きに居るを以て、今明にそれらの系統を探求すること至難の業に屬す。

小歌の分派

本手組　本曲と云ふ意なり。石村、虎澤の兩檢校、琉球より傳へたる三味線の手を整へ、一種の彈き方を始む。これを本手と云ひ、これに合せて歌ふ謠をば本手組と云ふ。蓋し組歌の謂にて部類の義なり。これに七曲あり。「琉球組」、「鳥組」、「腰組」、「不祥組」、「飛彈組」、「忍組」、「浮世組」と云ふ。

傳に異說あること前にも云へり。普通には、永祿五年琉球より傳へしは、蛇皮を張りたる二絃なりしが、堺の琵琶法師中小路と云者、これに一絃を加へて三絃とすと。

比翼連理よの、てんに照る月は、十五夜が盛、あの君さまは、いつもさかりよの

（琉球組の一）

腰にさげたる巾着は、これも憂き人の縫とやほどに　（腰組の一）

端手組　本手組につゞいて出でたる新曲なり。柳川檢校の作と云ふ。端手は破手の義、これに、待つにござれ、「葛の葉」、「北良屋小松」、「長崎」、「下總ほそり」、「京鹿の子」、「端手片撥」の七曲あり。

端手組

さてもやさしの、いよ葛の葉や、何をたよりに、はひかゝる、いよえい、はひかゝる、

（葛の葉の一）

まことやら、鹿島の湊に、彌勒の御船が、ついてござり申すよの、さあいよへさあいよへ、帆ばしらは黄金の帆柱、帆には法華經の五のまん卷物、さあいよへ〳〵、

（下總ほそりの一）

裏組　端手に續きて作られたる新曲なり。以上を表としてそれに伴ふの意なるべし。同じく柳川檢校の作と稱す。これに「賤」、「錦木」、「青柳」、「早舟」、「八幡」、「翠簾」、「なよし」の七曲なり。

裏組

賤の身なれば色にはださぬ、あだゝ心の内にこがるゝ。　（賤の一）

沖の引く汐に、竹に油をぬるやうに、とろり〳〵と、歌うて名のりて、こぐや舟方は、えい上樣の御座船か、またのんえいそれ、櫓ではやらいで、歌でやる。

（早舟の一）

この外組歌に祕曲と稱するもあり。相傳に際しては誓詞神文を入るゝの法式もありと云へば、室町時代の不合理なる祕事口傳は、既にこの藝術上にも利用せられ、ひいては後世現代までの相傳的陋習の俑を作りしものなるべし。

祕曲

弄齋節　元祿の前後か、隆達節の流に出で、自ら短き歌を作して謠へりと云ふ。

弄齋節

逢うて立つ名が立つ名の内か、逢はで立つこそ立つ名なれ

思ひ出すとは忘るゝ故よ、思ひださぬよ忘れぬは

よしや、今宵は曇らばくもれ、とても涙で見る月を

投節　その形は三四四三三四二三にして、後世都々逸の形式に等し。同じ頃に三都に流行せる投節（これも節は隆達の流と覺し、一說には京島原の遊女のうたひ出せるものとも云ふ。）もその形は全くこれに同じく、作者は畠山箕山なりと云へり。

投節

松の葉ごしの磯邊の月は、千歳ふるとも、かはるまい。　（さるおんかたの一）

憂しや此身は親はらからの、ために沈みし戀の淵　（けいせいの一）

投節が主に京都島原にうたはれしが如く、大阪新町には籬節（萬治年中まがきと云へる遊女美聲にしてこれをうたひ始む。元祿寶永に盛にして正德の頃はすたれたりと。）江戸吉原には繼節（何時の頃より始れるかを明にせず。）と云ふもの行れぬ。又吉原通せる男達と稱する俠客等の專ら歌ひしものに土手節あり。

繼節
土手節

かゝる三谷の草深けれど、君が栖と思へばよしや、玉のうてなもおろかでござる、よその見る目もいとはぬ我じやに、おわらひやるな名のたつに（酔翁の作と云ふ。）

俗謠各種

この外、三都地方とも流行せし俗謠の名のみを擧ぐるも、加賀節（萬治寛文頃俳優多門庄左衛門等うたひ出ぬ。）滑り（うかれ節とも云ふ程の意か。「君がこねとがもなや。」）芝垣節（明暦に盛りて真享にすたる。絳竹初心集に「柴垣柴垣しばゝ垣ごしに、雪のふり袖ちらと見た、ふり袖へ、雪のふり袖ちらと見た」）丹前節（東海道名所記、原の宿の條に「たんぜんとかやいふ節なりとて、だゞあゝ〳〵と長たらしくひきづりたるばかりなり云々」。丹前とは神田の何某丹後守屋敷前の風呂屋が遊び場たりしより起れる名と云ふ。この遊人の風、歌舞伎の型にも入りて、六法と云ふことあり。）道念節（京の道念山三郎が遺の音頭に出づと。）木古今節（元祿の頃俳優古今新左衛門の始めしところ。歌は多く自作と云ふ。その有馬の松「松になりたや、有馬の松に、藤にまかれて、寢とござる、まかれてござる、情ありまの、花のえん、」）小室節（むかし吉原通せる馬の口取等のうたひし由、又諸侯入府の馬前にてうたふ事ありきと云へば、いづれかの地にか傳へられしものかと考へらる。）潮來節（常陸潮來に起りし船歌。）

方歌の、江戸の地に傳へられしものかと考へらる。）潮來節（常陸潮來に起りし船歌。）

説ありて明ならず。後には用ゐたり。）伊勢音頭（伊勢古市にうたはるゝ節。）など數ふれば尙多かるべし。

俗謠の總稱にも用ゐたり。）伊勢音頭（伊勢古市にうたはるゝ節。）など數ふれば尙多かるべし。

總じて此等の俗謠は節異り形も同じからざれど、室町時代の小歌の後身なるからに、これまた小歌（後世には多く小唄の文字を用ゐ、もと唄は梵語、唄匿とも云ひ、讃頌と譯し、佛教音樂の一名なり。）と概稱すべく、この中にて先に云へる組歌に對し、單獨の唱歌を端唄（もとはいと長き端唄もありしなり。）と稱へ、後、又形式の長きを長唄（江戸長唄と異り。後に明す。）となし、短き唄（餘りに短きものは後世に作られざるに至れり。）に限りて端唄と唱ふることにもなれり。この端唄の中に三絃の調の本調子、二上り、三下り等の名を以て區別を立つることもあり。今長唄の一例をあぐれば

浮寢　　朝妻檢校

浮寢の床にことゝふは、枕にかゝる涙なり、せめては夢になりともまどろめば短か夜に、山時鳥音づれて、はや夜が明けた、しんぞつらいよの、こがるゝうき身の、消えもせで、さても命はながらへて、世はひねもす泣き暮し、よるは夜床に伏し沈む、槇の扉を打つ村雨や、梢にそよぐ松風か、ちぎりおかねどはかなやな、君がとふかとおどろかされて、いとど涙に目がくれて、壁に背ける燈

火の影かすかなるあかつきの、鐘の聲つく〳〵と、きく時は兎角かなはぬ夜の中に、ふつゝと思ふまいとは、思へ〳〵ども、またすてがたき、過ぎし別に逢瀬と云ひし、言の葉を、忘れまい、此世はさておき後の世も、のうさてな、あひみての後の心に比ぶれば、かほど物をば、思はじものを、昔戀しやな、今の身や。

然るに寛永の頃江戸に中村勘三郎あり、猿若座（後の中村座）を創めて初期の歌舞狂言を興行す。その脇師に杵屋勘五郎、仝六左衛門、仝喜三郎あり、共に小唄をよくし、殊に喜三郎は小唄に合せて三味線を彈き、（始の歌舞伎は歌と舞とのみにて三絃なし。されば喜三郎は歌舞伎三味線の始と云ふべし。）小唄もまた所作に伴ふ如く延長せられて長きものとなりぬ。これを江戸長唄と稱して后世まで上方唄と區別し、この勢力のある所、近世長唄と稱するものは皆この後流を目する事となりぬ。（杵屋は長唄の本家として代々勘五郎、六左衛門、喜三郎を襲名し、江戸歌舞伎の隆盛と共にその節も世に行はれたり。）始は歌舞伎と離るべからざる關係を有して、演劇の音樂的一面をなしたりしも、その後歌舞伎脚本の發達に從つて、歌舞伎は純劇的性質がます〳〵多きを致せるにより、長唄は次第にその領土を減じ、近世はかの江戸淨瑠璃の如く、歌舞伎中の振事（おどりごと）としてのみこの長唄が演奏せらるゝ事となりぬ。但し音樂として長唄のみ獨立に弄ばるゝ事は、年を經るにつれいよ〳〵昌となりしは勿論なりとす。

誓詞曾我　傾城高尾

夜もすがら。寢られぬまゝのたはむれに。いとしかあゆき方ざまに。見はなされん白露の。葉ずゑにむすぶうき身ぞや。いつがいつまでこのつとめ。おもへば月日ぞや。十とせばかりは光陰の。なにはつけて忘れぐさ。春にもならばかならずと。子の日の若菜君がため。をしからざりし命のうち。わが世帶をも世話やかば。うれしさはやま〳〵。二つにはまた毋さま。およばずながら朝顏の。露ばかりなる御孝行。それのみならず弟ごの。御勘當をもよきやうに。おわび申してそのゝちは。きゆる命もをしからじ。ことさら今日はよき日から。いでや互に堅いこと。日の本の神おろし。そなた女房よこちの人。思へば深きえにしぞや。かはりたまふなかはらじと。またねの床には假まくら。夢もむすばぬ轉寢に。業の烏の告げわたり。夜はほの〳〵とぞあけにける。

こんくわい出端　　生島新五郎

石に精あり水におとあり。つゝみは瀧浪袖は白妙。雪をふる振もよし。ふりかへる山更にかすかなり。また或時は織姫の。いほはた立つるまどにいりて。人をたすくるわざをのみ。ましてや我名も。いふ聲ひく袖のながめなり。そなたのそらは白雲。あれこそ大原や小鹽山。今は古巣へかへる山。此神の德を告げしらしめんと。あらはれ出でゝはづかしや。われが姿のまことをあらはし。又は國土を垂跡の方便。ころは雪ふりなれや。木々のこずゑもうづもれて。梅もいろそへ松とても。名こそ老木の若みどり。空すみわたる神かぐら齡をしらする此神の。行末ひさにと我神託の。德をあらはす御代ぞめでたき。

汐汲

松一木、かはらぬ色のしるしとて、今もさかえに在原の、かたみの烏帽子狩衣、きつゝ馴れにし面影と、うつし繪島の浦風に、ゆかしきつても、白浪の、寄する渚に世を送る。いかに此身が海人とやといふて。しんき〳〵に袖濡れぬ、

れて。いつか嬉しき逢瀬もと。君にや誰か黄楊の櫛。さしくる汐を汲まふよ。汲み分けて。見れば月こそ桶にあれ。是にも月の入りたるや。月は一つ影は二つ。見つ見られつも雪の上。こゝは鳴尾の松影に。月を荷ふて休らひぬ。見渡せば面白や。馴れても須磨の夕まぐれ。すなどりのやつしつし。波をけたてゝ友呼びかはす。はんま千鳥のちりやちり〳〵。ちりやちり〳〵ちつと鹽屋の烟さへ。立つ名厭はで三年は爰に。須磨の浦回の松のゆきひら。立ち歸りこん我も木蔭に。いざ立ち寄りて磯馴松の懐かしや。かたみこそ今はあだなれ見そめてそめて。逢ふた其時やつい轉び寢の。帶も解かいでそれなりに。ふたりが裾へ狩衣を。かけてぞ頼む睦言に。かわい烏のエ、何じややら。泣いて別りよか笑ふて待か。待てば來んとの約束を。忘るゝ隙はないわいな。それから深ういひかはしまの。水も漏らさぬ中々は。濡れによる身は傘さしてござんせ。人目關傘いつ青傘と。ほんに指折り其日傘。待つに長柄のしんきらし。それへ〳〵。氣を紅葉傘白張の。殿ごに操立て傘も。相合傘の末かけて。誓

文眞實妻をり傘と云はれたら。思も開くはんな傘。しほらしや。いとゞ申して歸る浪の音の。須磨の浦かけて。村雨と聞きしもけさ見れば。松風ばかり殘るらん。松の唄は世々に殘るらん。

京鹿子娘道成寺

鐘に恨は數々ござる。初夜の鐘を撞くときは。諸行無常と響くなり。後夜の鐘を撞くときは。是生滅法と響くなり。晨朝の響は。生滅滅已入相は。寂滅爲樂と響くなり。聞いて驚く人もなし。我も後生の雲晴れて。眞如の月をながめあかさん。言はず語らぬ我心。亂れし髪の亂るゝも。つれない。は只うつりぎな。どふでも男はあくしやうもの。櫻々と唄はれて。いふて袂のわけふたつ。勤さへ只うか〳〵と。どうでも女子はあくしやうもの。都育ちははすはなものじやへ。戀のわけざと武士も道具を伏編笠で。はりと意氣地の吉原。花の都は歌でやわらぐ敷島原に。勤する身は。誰と伏見の黑染。煩惱菩提の鐘木町より。なにはよすぢに通ひきつぢに。かぶろたちから室の早咲。それがほんにいろじや。一二三四。

よつゆ雪の日。しもの關路も。共にこのみはなじみかさねて。中は九山たゞまるかれと。思ひ初めたが緣じやへ。梅とさん〳〵櫻は。何れ兄やら弟やら。分けていはれぬナ花の色へ。西も東もみんな見にきた。花の顏妹やら。分けていはれぬナ花の色へ。菖蒲かきつばたは。何れ姉やらさよをへ見れば。戀ぞまさすへ。さよへ。かはゆらしさの花娘。戀の手習つい見ならひて。誰に見せよとて紅鐵漿つきよぞ。みんなぬしへのしんぢう立てゝ。お、うれし〳〵。末はかうじやにナ。そふなるまでは。とんといはずにすまそぞへと。せいしさへいつはりか。うそかまことかどふもならぬほど。おゝ逢にきた。ふつゝり恪氣せまいぞと。たしなんで見ても情なや。女子には何がなる。とのご〳〵の氣が知れぬ〳〵。あくしやうな〳〵。きが知れぬ。きが知れぬ。うらみ〳〵てかこちなき。露を含みし櫻花。さはらばおちん風情なり。おもしろの四季のながめや。三國一の富士の山。雪かと見れば。花のふゞきか吉野山。散りくる散りくる嵐山。朝日山〳〵を見渡せば。歌の中山石山の。すゑの松山いつか

大江山。いくのゝ道の遠けれど。戀路に通ふ淺間山。一夜の情有馬山。いなせの言の葉あすか木曾山待乳山。わが三上山いのり北山稻荷山。緣を結びし妹脊山。ふたりが中の黃金山。花咲くえいこの〳〵をばすて山。峯の松風おとは山。入相の鐘を筑波山。東叡山の月のかほばせ三笠山。たゞたのめ氏神さまがかわゆがらしやんす。出雲の神さんと約束あれば。ついにいまくらさとに戀すれば。浮世じやへ。深い中じやといひ立てゝ。こちや〳〵よい首尾で。にくてらしほどいとしらし。さるほどに〳〵寺寺の鐘。月おち鳥鳴いて。霜雪天に滿汐程なく此山寺の。江村の漁火うれひにたいして人々ねむれば。よきひまぞと。立ち舞ふやうにねらひよつて。つかんとせしが。思へば此鐘恨めしやとて。龍頭に手をかけ飛ぶよと見えしが。ひきかづいてぞ失せにける。

上方長唄に對して江戸長唄の性質を異にする所あるが如く、江戸端唄もまた上方端唄と其の性質を異にするものあり。こは勿論時世の進歩と人情の推移とによるものにして、これにまた曲節流派による種々の區別あり。

朝妻舟　　英一蝶

近江のや、あだしあだ波、よせてはかへる波、朝妻舟のあさましや、あゝ又の日は、誰に契をかはして色を、かはして色を、枕はづかし、いつはりがちなる我が床の山、よしそれとても世の中。

春雨

春雨に、しつぽり濡るゝ鶯の、羽風に匂ふ梅が香や、花に戯れしほらしや、小鳥でさへも一筋に、時定めん木は一つ、わたしや鶯ぬしは梅、やがて身をゝ氣をまになるならば、サア鶯宿梅ではないかいな。サッサ何でもよいわいな。

和歌の浦

和歌の浦には名所がござる、一に權現二に玉津島三に下り松四に鹽濱よ、天の橋立切戸の文珠、文珠さんはよけれども、切れると云ふ字が氣にかゝる、さつさ何としやうか、どうしやうぞいな。

我が物と

我がものと、思へば輕き笠の雪、戀の重荷を肩にかけ、妹がり行けば冬の夜の

川風寒く千鳥なく、待つ身につらき沖の石、實にやるせがないわいな。

淺くとも

淺くとも、清き流の杜若、とんで行きゝの編笠を、のぞいて來たかぬれ燕、顏が見たうはないかいな。

お前と一生

お前と一生暮すなら、深山の奥のわび住居、縫針仕事糸車、細谷川の布ざらし、柴かる手業もいとやせん。

近代都鄙に流行せる俗謠の類は殆ど皆端唄と稱して可なりと雖も、節に於て今に最も優れたるものを歌澤（安政年間幕府の士歌澤笹丸、同芝金と云ふもの、古きものを集め補ひて始めし節と云ふ。後分れて歌澤、哥澤の二家となる。現時酒席等に興ずるものは多くこの節なり。）にとす。歌ふ所は祝儀、（俗に御座附といふ、この内には古き唄淨瑠璃より抽き出したる種々の句を含む。）二上り新内（淨瑠璃の新内節に倣ひて悲哀の調なす。）大津繪（大津繪を讀みたる文句にて二上りの俗曲。）甚句（相撲の踊より起りし歌か。これに本調子、二上り、三下り等あり。）都々逸（都々一坊扇歌の節に出づ、二十六字の形にして舊來の情歌凡そこの節に合ふが故に廣く流行せり。）ドッチリトン、ヨシコノなど其の種を選ばす。近代趣味に合する音曲は殆どこれによりて代表せらるべきか。

三味線の小唄と相對して、琴に琴唄あり。室町の末に筑後善導寺の僧これを歌ひし由傳ふれども明ならず。徳川氏の始期、八橋檢校三味線の小唄にならひて、其の唱歌を選び、組を作り、表、裏、中、奥等の品を定めしが、後、北島、安村、石塚等の法師これを補修して今日のものとなせり。

明石

其一　所から名にしおふ、明石の浦の秋の頃、月さえわたりよる波に、うつろふ影のおもしろや。

其二　此頃はいとゞしく、都の方の戀しきに、かゝる所の人心、憂きを慰む今宵かな。

其三　いつとなく、長き夜を、語り明石のうらなくも、いかで岩根の松の葉の、契は末もかはらじ。

其四　幾夜あかしの浦の波、寄せてはかへり浮き沈み、あはれを思ふ折からに、あはれをそへて鳴く千鳥。

其五　庭の落葉か村雨か、かきならす琴の音か、よそに知られぬ我袖に、あま

りてもるゝ涙かな。

其六　四智圓明の明石がた、迷の雲もうち晴れて、八重さきいづる九重の、

にかへるうれしさよ。

櫻狩

長閑なる、頃もきさらぎおしなべて、見渡す山もうちけふり、柳のいとのあさみどり、春の錦のあやなくも、都に知らぬ白雲の、たどるやしるべ櫻狩、人の心もあこがるゝ、空を見すてゝ越路には、待つらんものをゆく雁の、かをる〳〵翅は、雲に消え、聲は哀に聞ゆなり。行衛慕ひて立ち留り、名殘はしばし忘れねど、初花車めぐる日の、轅つらねて見ずもあらず、見もせぬ人や花の友、知るも知らぬも花のかげ、相宿りしとすがの根の、長き春日もいたづらに、日數過しと花衣、なれし袂も香にそみて、野邊も山邊も花故に、至らぬくまはなけれども、山の岩根をとめておつる、千筋百筋佐保姫の、手びきの糸の瀧なくは、手折りて行かん入相の鐘より先に春霞、立ちなかくしそ風は吹くとも。

現代箏曲の流行につれ、古き組歌漸くすたれて、新しき作の試みらるゝものもこれあり。次に曲節に二流あり。一を生田、實永の頃生田檢校筑紫琴の妙を得、一流を創む、その後山田流に壓せられて多く振はず、尙京都の地に勢力あり。他を山田、寛政年間山田檢校吾端箏の名手にして、その門に山登、山勢の二檢校出で、門業榮えて優に他流を壓し、中流以上の家庭に於ては、子女の必ず學ぶべきものとなれり。と云ふ。

第四節　脚本

脚本とは演劇卽ち當代歌舞伎の臺帳を云ふ。されば此の發達變遷を敍述するに先立つて、はゞ歌舞伎の起原及びその發達の狀を覗はざるべからず。

我が國の演劇は不完全ながら猿樂能に於て既にその體制を得、狂言また是に伴ひて一種の喜劇たりし事は前章に述べ置きたる所の如し。然るに此の藝は、其の後、武家の間にのみ行れて一般國民に接近せず、且つ其の文學、音樂共に古典的の性質を有して、新しき時代の趣味と同化せざるものありければ、元和偃武の後、天下漸く無事ならんとし、平民の勢力次第に伸張せんとする時に及んでは、何等かこれに代つて平民的趣味を充すべき藝術の表れ出でざるべからざるは自然の勢なり。淨瑠璃操及び其の文學は、この要求に應じて榮ゆるに至りしもの。歌舞伎芝居の勃興も正しくこの機運に乘ぜしものとす。

脚本

能と新趣味

是より先、室町期の末頃に出雲大社の巫女に阿國と云へる者、京に上りて「やゝ子踊」(念佛踊の別名)「大原木」「兩儀の舞」などゝ云ふを始め、僧衣をまとひ、鉦を叩き歌をうたうて一種の舞踏を興行し、神樂と稱して貴人の上覽にも供せる事ありき。蓋し神佛混淆の思想に成れる巫女の歌及び舞に過ぎざりしが如し。

其の唱歌は

千早振吾が心よりなす業をいづれの神か他處に見るべき

千早振神の社は吾が身にて出で入る息は外宮內宮

ばさらばとばんじの水の清きをばむすびてかたにわびらうんけん

などの類なりき。慶長の頃か、名古屋山三郎といへる風流男と相結びて愈行れ、能の狂言より脫化せる「猿若大名」「新發意太鼓」或は「花笠踊」等の如きも同時に演じて、この時より文藝趣味は多少闢發し來りしものなるべし。京傳が「骨董集」に載せたる當時の詞に

如何にお國殿に申候、これははやふるくさき歌にて候ほどに、珍らしき歌舞伎にて見申さう、今のほどは淨瑠璃もどきといふ歌をうたひ申す、さらば歌

ひてきかせ申さんと、鼓の拍子打揃へ調子をこそ伺ひけれ。

吾が戀は月に叢雲花に風とよ。細路の駒かけて思ふぞ苦しき。山を越えて里を隔てゝ、人をも身をも忍ばれ申さん、なか〳〵に小唄に節とは思ひ候へども、それ吹く笛は宵の慰、小唄は夜なかの口ずさみとよ(下略)

歌舞を主とせる狀見るべし。これに伴ひて滑稽物眞似の所作をも演じ、京都五條橋詰、北野神社の東などに芝居を立て、お國は北野對馬守と稱へて男舞をなし、慶長十二年には江戸に下りて勸進歌舞伎を興行するまでに至りたり。されば、是より彼に倣ひて京の遊女の歌舞伎をなして公衆の觀覽に供する者も生じ、太夫藏人、佐渡島正吉、村山左近、出來島長門守、幾島丹後守など號せる女、いづれも一座を率ゐて歌舞伎をなし、後には江戸にも下りて諸所に興行せり、此等を總じて傾城歌舞伎といふ。「慶長見聞集」に「江戸よし原町にて來る三月廿五日、かつらき太夫、歌舞踊ありと日本橋に高札を立つる。大小鼓、笛、太鼓の役者は男なり。彼等が打合せ入亂れたる細かなる程拍子には、天下に名を得たる四座の役者も及ぶべからず。彌兵衛、善內が狂言の風情、踊り跳ねらん拍

子は、鷺太夫、彌太郎が式三番の足踏も、これには如何で優るべき、とりわけ猿若出でゝ色々の物眞似するこそ可笑しけれ、泡齋念佛、猿廻し、酒に醉ひたる在郷の百姓、あらゆる物眞似、さ、てもよく似たるものかな」と。歌と舞との外に、樂器までも範を能狂言に求めて、これを今樣にする事が、當代歌舞伎の性質なりしことを覗ひ見るべく、能狂言の古代趣味と、歌舞伎狂言の近代趣味とが、如何に當代に解せられ居たりしかを知るに足る。然るにこの藝流行するにつれ、從つて風俗壞亂の事も甚だ多きに至りしかば、寛永六年十月、幕府令を下して女淨瑠璃と共に女の歌舞伎をば禁止したり。

女舞伎の禁

是より先、武士僧家の間に好遇せられたりし美少年を集めて、かの女歌舞伎に倣へる一座を組織せる者、何時の程よりかあらはれぬ。これを若衆歌舞伎と云ふ。はじめは京都及び大阪に行れ居たりしが、江戸にも寛永元年、猿若勘三郎なる者、猿若座創立の許可を得、これより三都若衆歌舞伎あり。然るに寛永六年、女歌舞伎の禁止せらるゝや、この若衆歌舞伎代つて次第に勢力を得ぬ。されど始は其の技藝全く女歌舞伎と異ることなく、美少年の手踊と、物眞似狂

若衆歌舞伎

言づくしとの二種を演ずるに過ぎざりき。當時に歌はれたる歌は

室町（或遊女が、室町なる貴人を戀ひて自らうたひ、小野お通の節付したるものと傳ふ。）

文が遣りたや室町筋へ、取や違へて、他の人に遣るな、花のふみ樣の手に渡せ。

高安

高安通ひの朝戻り、裾が濡れ候袖ともに、池水に夜な〳〵月は映れども、ア笑止と君の知らず顔にて。

の如し。室町時代より流行せる小歌のなごりなり。又江戸に於ける狂言づくしの脚本の例として「猿若」を示せば

狂言づくし

ッキ「罷出でたる者は杵屋の某と申す大名で御座る。某が召仕に心の利いた賢い者が御座る。彼が名は猿若と付けて御座る。中々面白い者で御座る。此間暇も乞はず伊勢參宮致した。戻つたらば屹度異見を加へうと存ずる。エイ〳〵。」と笛の座の方に坐る。（歌）初春や、君が小袖を著そはじめ、色つきやゝもつと奥山の猿若もイトどわんざくれい、イトど心の浮かれ猿若」。と、仕手柱に停り。シテ「是は今日の猿若でござる。眞に一夜開いて御

座れば何處も彼處も賑々としためでたい春でお座る。茲に私が願うた御方は、杵屋の某と申す大名でござる。主人へも此間斷りなく伊勢參宮してござるが、定めて御待ちかねでござらう。急いで參らう。……

とこれより主人館に歸りて案内を乞ひ、對面までに滑稽なる仕草あり、伊勢參宮をした道中話に、宿場女の風情や音頭の面白き事など語り、終は歌囃にて獅子舞となり、最後は、

ワキ「面白い〳〵。尙此の上は愛でたう盃を汲み替さう。參れ。シテ「ハア、。

ワキ「參れ。シテ「畏りました。

と云ふに結ぶ。その狀、全く能狂言の少しく近世的となりしに過ぎざるを見る。尙上方に行はれたる脚本を見るに、前者に比して能狂言の舊型を脱し、歌舞伎の新風を生じ來りし點あるを認む。

氏神詣

殿樣、氏神詣遊ばされ、六方の出、所作あり。跡に引馬の行列踊、其の時分の歌、二上り「……」「皆々大義ぢや休め〳〵。家來が手をつき「先づ殿樣には神主

方にて御休足、と歌にて皆々入る。奴共は景色を眺め小姓の器量を評判。「艶之亟がよい、いや己らは友彌殿に惚れたと色々噂するを、侍出で、何をたはこと、御小姓の噂、今一言いふて見よと咎められて、そりやこそと跡を見ずに逃げ這入れば、神奴、お神樂々々と呼はりて侍はいる所へ、艶之丞出で神前に向ひ、拍手打ち、主君國家太平御武運長久と祈念する折から、茶道珍才うしろに立ち、艶之丞が袖をひき、小聲になつて、そのもとのお爲を申さん、殿樣の御寵愛は其もとお一人と思ひしに、此間は專ら友彌殿に御鼻毛を延し給ふ。拙者はお使に參る、こなたは神主へ參れと仰付けられたは、後にて友彌殿と殿樣と、契らせ給ふはかりごと、御油斷あるなと焚付けて、お使に走り入る。艶之丞腹を立て、樣々友彌め憎や腹立ちやと妬みのせりふある所へ、殿樣お立ちと云ふ内に、家來數多出で並ぶ。殿立出で給ひ、友彌に仰せて艶之丞を呼び給へども返事せず、殿見給ひ、こりや艶之丞もはや歸らう、是へ參れ、ハウ爰へこいと手を取り引きよせ給へば、艶之丞物をも云はず、殿の顏を見てふいとふり切り、橋掛へ這入る。是は扨、きやつもついと行きおつたと、草履取

を呼び給ひ、こりや艶之丞の仕方はどうじやあろと思ふぞと尋ね給へば、草履取、又殿の顔を見てふいと振り切つて這入る。斯の如く家來共一人〳〵呼び問ひ給ふに、皆々同じくふり切り這入る。扨もめんようなる、今ははや引馬計りに成つたと馬を引きよせ、こりや馬よ、何と艶之丞がふいと往た心はどうであろと思ふと問ひ給へば、馬も殿の顔を見てついと這入るが幕。

（藝鑑、傳奇作書所載）

島原

三都の劇場

當時の題材、男色に關するもの多かりしが、その後また「傾城買」及び「傾城事」と稱する歌舞伎大に流行し、京都遊里の地名たる島原は直に歌舞伎の別名の如くにさへ用ゐらるゝに至り、當時の標題に「髮切島原」「坂田島原」「八島島原」「安宅島原」等の名あるを見る。かくて若衆歌舞伎は至る所に流行し、京には七箇（村山、都、早雲、絲嶺、龜屋、布袋屋、夷屋）の大芝居及び若干の小芝居あり、大阪には鹽屋、大和屋、河内屋、松本、大坂などいへる者、道頓堀に座を構へ、江戸には、猿若座（寛永元年）、都座（寛永十年）、村山座（寛永十一年）、山村座（同十九年）、河原崎座（慶安元年）、玉川座（承應元年）等の設立あり、從つて劇場の構造も多少能舞臺より進歩し、囃子にも大小鼓、笛、太鼓の外、三味線を使用し（寛永十年、猿若座にて杵屋喜三郎これを始む。上方にては遙に後れて寛永十二年より使用せり）、江戸長唄と稱する歌謠も始りて、歌舞伎の音樂を進め、次第に抒情的の歌舞と劇的の狂言とを融合して一種の藝風を生じ女形の特殊藝も生じて（京にては絲縷櫛三郎、江戸にては村山左近始めて女に扮す。）技藝の變化を多樣にせり。併し乍らこの流行は直に若衆の流行となりて、風俗上多くの弊害を生じたこると、女歌舞伎にもおとらざりければ、江戸に於ては承應元年六月幕府終に令を出して美少年の前髮を立つるを禁じ、彼等歌舞伎役者をして悉くこれを剃り落さしめぬ。京大坂もまた數年ならずしてこの禁あり。是より彼等が前髮を落して野郎頭となれるによりて野郎歌舞技と稱せらる。

女形

野郎歌舞伎

若衆の禁令は全然好色の跡を斷たしめたりとにはあらざれども、美兒美童が歌舞伎唯一の目的たる事難きに至りしは爭ふべからざる事實なりき。換言すれば俳優はひとり美貌にのみ甘んずるを得ず、技藝を磨き質ある物を演じて一般の趣味の需要に應せざるべからざる事となりしなり。されば彼等俳優は之より伎藝に力を用ゐるに至り、從來の一段づゝに離れたりし歌舞狂言

に一歩を進めて、一曲の首尾を二幕三幕と續けたる、所謂續狂言の創作せらるる事となりぬ。こは脚色上の一大進歩と云はざるべからず。是より先、正保二年江戸山村座に於て、作者都傳内が今川忍び車」と云へる二番續きの狂言を出し、其の幕合に竹生島の所作をなせる事ありしが、野郎歌舞伎となりて後は、舞よりも筋を主とする狂言が劇的の發達をなして、舞及び音樂の長所を併せ、材を歴史、緣起、傳説等より採り、又當代の仇討事件をも仕組みて一日見の芝居となしぬ。寛文五年江戸森田座に於て曾我の狂言を三番續となし、第一箱根權現登山、第二箱王丸元服と母子別、第三夜討となしたるは、かの謡曲の元服曾我、小袖曾我、夜討曾我の各一番を聯絡せしめて一曲となしたる物なれば、この點のみにても確に能樂の脚色よりは數歩を進めたるものなり。又大阪にては寛文四年、俳優にして作者たりし福井彌五右衞門始めて續狂言「非人仇討」を出して大に行れ、これより狂言は眞摯なる人生の一部を描寫する藝術となるに至りたれば、一面に歌舞及び傾城事の流行はあり乍らも、一般の藝風に大なる發達を來し、舞臺に現さるべき種々の性格に扮する專門の俳優生じ、互に相

競うてこの道にはげむ事となりぬ。今大凡舞臺に於ける藝風の分業をあぐれば

立役（ナリヤク）　善人に扮する男方。

敵役（カタキヤク）　惡人に扮する男方。惡人方、惡方、敵役（アクヤク）とも云へり。外に極惡の性格を現す者を別に實惡（ジツアク）と稱せり。

親仁方（オヤジガタ）　年老いたる男に扮する者。親方とも云へり。

若衆方（ワカシュガタ）　少年に扮する者。

道化方（ダウケガタ）　滑稽なる愚人に扮する者。能の狂言師より出でたる猿若の一轉したる者か。別に輕卒なる滑稽者に扮するを半道（ハンダウ）と云ふ。

花車方（クワシヤガタ）　老女に扮する者。

若女方（ワカヲンナガタ）　年若き女に扮する者。

子役（コヤク）　實の小兒を用ゐる。

この外得意の藝に和事、荒事等の名もあり。

元祿の頃上方に坂田藤十郎（二三〇五―二三六九）あり。斯道の泰斗として劇

市川團十郎

壇爲に幾段の光彩を放ちぬ。江戸には市川團十郎(二三二〇—二三六四)中村七三郎(—二三六八)、中村傳九郎(—二三七三)等あり。團十郎は父を堀越十藏といふ。もと甲州の士なりしが、武田氏滅亡の後、下總市川の邊に隱れ、後、江戸に出でゝ彼を生む。彼は寛文十一年海老藏の名を以て始めて劇壇の人となり延寶元年九月市川段十郎と改名して坂田公時を演じ、顏を隈取り粗豪なる裝をなして荒々しき振舞をなしゝかば、この藝大に時人の喝采を博したりき。

荒事の始

こは當時流行せる和泉太夫の操淨瑠璃、金平の勇風を移したるものにして、市川家荒事の初なり。之より曾我の五郎、鞘當の不破伴左衞門、或は鳴神上人等を演じて一家の藝を立て、元祿六年團十郎と改めて京阪に巡行し、四年にして江戸に歸りしが、暫、不動、辨慶、忠信等は今後彼が特藝とせる所なりき。彼が門人少からず。特にその子九藏、父についで二代目團十郎となり、俳優市川の家ます〳〵斯界に重きを加へぬ。次に中村七三郎は立役殊に和事師にして、團十郎に對し名古屋山三郎、曾我の十郎等に當を取りしが、彼が自作の狂言、傾城淺間ヶ嶽の淺間巴之丞は、京都に於ても非常の喝采を得、この筋今も世の知る

中村七三郎

中村傳九郎

所たり。中村傳九郎は初代猿若勘三郎の長孫に當る。小兵なれども江戸つ子の諧謔に富み、曾我狂言の朝比奈に扮して糸鬢、鎌髭、猿隈の化粧に關東の方言を使ひて非常の好評を博し、團十郎の荒事と七三郎の和事とに對して、彼が朝比奈の藝風は後世の動すべからざる模範となりぬ。此外女形に水木辰之助(二三三三—二四〇五)、芳澤あやめ(二三三三—二三八九)等あり。女形の藝風は彼等によりて始めて特色あり。是より京阪江戸三ヶの津共に歌舞伎狂言の流行盛となり、正德四年江戸山村座の俳優生島新五郎(二三三一—二三九三)と、奥女中繪の島との不義事件七代將軍家繼の正德四年正月、大奥御年寄役繪島(當時四十四歳)と、山村長太夫座俳優生島新五郎(當時三十三歳)との不義亂行徒目付より上訴により、繪島は信州高遠に預けられ、新五郎は三宅島に遠島、その外の關係せる役者、奥女中等それ〳〵處刑せられ、山村座は廢止、中村、市村、森田の三座も一時停止せられぬ。

繪島事件

名優輩出

一等二三の蹉跌はありけれども、斯道の發達は依然として止る事なく、享保元文以後寶暦明和に亘りて、彼の操淨瑠璃漸く沈滯の運に向へる頃には、歌舞伎は漸次隆盛の域に進み、舞臺、道具、所作、音樂の研究もありて、俳優にも多くの名手を出しぬ。まづ京阪には姉川新四郎(二三四五—二四〇九)、中村十藏(二三五四—二四三〇)、中山新九郎(二三六二—二四三五)等あり、江戸には

二代目團十郎(二三四三―二四一八)についで澤村宗十郎(二三四九―二四一六)、市川團藏(二三四四―二四〇〇)、大谷廣次、坂東彦三郎、四代目團十郎(二三七一―二四三八)、尾上菊五郎(二三七七―二四四三)等出で、女形には瀨川菊之丞(二三五一―二四〇九)等最も名ありき。ついで寛政、文化、文政、天保より明治の近代に至るまでに名優として今に傳へらるゝもの、團十郎に五代目より九代目に及ぶ五人あり、菊五郎に五代、中村歌右衛門に三代あり、松本幸四郎あり、岩井半四郎あり。江戸に散文學の隆盛を極めし時は斯道亦甚だ振ひ、脚本の作者も輩出して隆盛期の半面を形作りたり。

初期の脚本

然らば彼等が據り處とせる脚本の創作は如何なりしぞ。驟つて考ふるに初期女歌舞伎及び若衆歌舞伎の頃は小歌の舞を主とし、狂言も極めて簡單なるものなりければ、筋の脚色もむづかしからで、特別に作者と云ふべき程のものなかりしが如し。「戲財錄」に「往古は定まりし作者なし、役者の立者寄合ひ、筋立して白(せりふ)は出合よりいうて見るを『ナラシ』といひ、其うちに定まれる故、根本といふものなし」と。根本とは卽ち脚本の事なり。都傳内が「今川忍び車」を作り、福井彌五右衛が「非人仇討」を出せる頃より、漸く作者といふべき者も現るゝに至りたれども、尙彼等は俳優にして兼ねて文筆あるものゝ餘業たりしが故に、未だ文學として見るべき脚本はあらはれ出でざりき。彌五右衛門の門下に富永平兵衛及び金子吉左衛門あり。共に俳優にしてまた作者を兼ねたり。延寶八年の顏見せ番付に、平兵衛が「狂言作り」と署名せるは作者の名をあらはせる始なるべし。吉左衛門は近松門左衛門と殆ど同時にあり。元祿十二年坂田藤十郎の爲に近松と共に「龍女淵」を合作し、この後、狂言本と稱して筋臺詞を文字に表す事始りぬ。此の頃より俳優ならざる文學者の、脚本の作に筆を試むるものも出づるに至りしが、就中注意すべき者を近松門左衛門となす。彼が傳は淨瑠璃の條に敍述せるが如くなるが、彼が京にありて宇治加賀、竹本義太夫等の爲に淨瑠璃の作を與へ居たりしと殆ど同時に、京都、都萬太夫座其の他の爲に作をなし、坂田藤十郎、水木辰之助等の名優をして之を演せしめぬ。彼の作は彼が廿五歲の延寶五年に「藤壺の怨靈」を書卸せるを初とし、其の數幾十の多きにも及びしかと想像せらるれど、今に殘存するものは廿の上に出で

狂言本

近松門左衛門

傾城佛の原

す。之を年代順によりて掲ぐれば（近松脚本集下卷解題による。）

百夜小町	貞享元年		
今源氏六十帖	元祿元年	都萬太夫座	
水木辰之助餞振舞	同　三年	同	
曾我多遊婦遊			
傾城阿波鳴門	同　八年	早雲長太夫座	
上京の謠初	同　十一年	都萬太夫座	
一心二河白道	同	同	
傾城江戸櫻	同	同	
傾城佛の原	同　十二年	同	
阿彌陀池新寺町	同	同	
傾城富士見里	同　十四年	同	
傾城壬生大念佛	同　十五年	同	
傾城三の車	同　十六年	早雲長太夫座	
唐崎八景屏風	同	同	
姫藏大黑柱	同	都萬太夫座	
吉祥天女安產玉		同	
御曹司初寅詣	寶永六年	同	
日本振袖始	享保三年	早雲長太夫座	

但し此等の脚本は、いづれも所謂筋書にして臺詞の委曲を盡したるものにあらず、部分々々の獨語對話の如き俳優の機轉に任せたるものも多かりき。その結構首尾を整へ、種々の約束を確定的のものとなせるは、明和安永以後の脚本に於て始めて見るを得べし。

武太夫の娘おつまは、阿呆の仁兵衛を連れ、神參りして歸る。母立ち出で「これは〳〵遲う戻つた、何して居た」仁兵衛は嘘をつき言ひ譯する。母は「シテこよし殿へ寄りて來たか」お妻聞き「追附來うで御座んした」と云ふ所へ、お物師こよし來り「かみ樣お久しや、彼是致し、まだ正月の禮にさへ參りませなんだ」と年玉を出せば「ハテ氣のついた、忝う御座る、さて此方に縫うて貰はねば

ならねは、傾城の着物ぢや」小よし聞き「尤も私が前は傾城でござんしたれば、實には素人の縫うた樣にはござんすまい、縫ひませう。裄長は如何でござんす」「このお妻が長でようござる」「そんなら心得ました。大抵な着物は肩を四寸あけます。傾城のは深う明けて、脱ぎかけても肩のゆるりとなる樣にする」と太夫の道中の眞似をして見せ、さて絹ものを縫ふ所へ武太夫歸り「小よし殿か、ヤイお妻、氣のつかぬ、茶でも沸して進せ」といへば、娘は仁兵衛と共に奥へ入る。母は「これ武太夫、先樣の首尾は如何ぞ」「されば乳守の傾城町住吉屋庄五郎方へ參りたれば、能う來たと申して馳走致し、金八十五兩に極め則ち請取つて來た」と取出し見せれば「これは嬉しい」と親子悦ぶ。小よし聞き「扨はお妻樣を傾城奉公に遣り給ふか、乎に御無用になされませ」武太夫聞き「イヤサ此の度錦戸兵庫殿より身に奉公致す樣にと申來つたけれども、柄を卷直さうにも、袴をせうにも金が無い。それ故娘を傾城に遣り、その金で拵へ奉公に出ればこれ出世といふものぢや」「イヤそれなら猶無用でござんす、娘が傾城ぢやと申しなば、お前の侍が立つまい」「それは大事ない、お妻は眞實の子ではない。養ひ女なれば構にはならぬ」「イヤ能う合點なされ、養ひ親が詮議した時は難儀になりませう」「ムヽこれは小よしが云ふ通りぢや、養子の娘の手形でもあればよいが、彼女は金子十兩附けて預つた子ぢや、何としたものであらう。」母聞き「ハテそれは、妻が死んだといふて、親の所へ飛脚やればよい」「實にそれで濟む」……武太夫は「これ母者人、追附け迎の駕籠が來る、この小判一兩細金に替へてござれ、酒肴の用意せう、身も飛脚の所へ往き、お妻が親の所へ僞文を遣らう」と母は金を替へに行けば、武太夫外へ出で、外より錠卸し往きにける。小よし唯一人居る所へお妻出で「ナウ小よし樣、私はやがて傾城屋へ奉公に行つたら樂せうと思うて嬉しい」「ナニ傾城になるがうれしいとや、幼い故合點が行かぬ、傾城といふは多くの人の氣を兼ね、客が無いと長崎薩摩へも賣つてやる、時には親に逢ふこともならぬ、悲しい事ぢや」お妻聞き「その樣な事なら嫌ぢや、ナウ小よし樣、傾城にならぬ樣にして下さんせ」と取附き歎けば「それ程厭ならこの所を奔り給へ」「それではこな樣が難儀なされませう」「いやこれを穿鑿すれば人賣の詮議になれば、公事は此方

が勝つ、さて落ちて行く先があるか」「イヤとゝ様も浪人ゆゑ、行方が知れませぬ」「よい〳〵、そんなら都にはお舍利様の開帳で多くの人が參る。京道へ出て侍と見たらばこの様子を言ふて、御舍利様の寺へ連れて行き貰ひ、出家を願み給へ、その間に埒があくぞ、金が無うてはなるまい。最前入れて置いた處を見ておいた。」と硯箱をこち放し、かの金子を取り、お妻が懷へ入れ、巾着より錢取出し「これで何なりと買うて空腹にない様にし給へ」と、さて出でんとすれば、そとより錠下りてあれば、やがて梯子を取つて來て、堀へさし、上へ上り、お妻を上げ、梯子取直し外へさし、お妻を難なく向ふへ下し「サア一足も早く落ち給へ」とあせれば、お妻は「忝うござんす」と跡をも見ず落ち行く。小よし其の儘下りんとせしが、梯子下へ落ち、下りる様なく、如何せんと居る所へ、亡八庄五郎葛籠を持たせ來り「武太夫が屋敷はこれか」と上を見れば、小よしはいにしへ、乳守で和州といふ太夫なれば「これは何と太夫様、肝潰れちや、かうとかうまつ算盤で如何したお妻ぞ」

淨瑠璃の文の洗練せられたるに比すれば、同日の談にあらず。蓋し俳優の技に托する性質多きに因る。この前後、京阪の作者として名を知られたる者、藤田長左衛門（振付の祖）、水島四郎兵衛、福岡彌五四郎、吾妻三八あり、皆俳優にして側ら作を出せるに過ぎず。江戸には寛文五年、河原崎權之助が曾我狂言の三番續を作れる後、市川團十郎は三升屋兵庫の名を以て「不破」「鳴神」等を作り、中村七三郎は「淺間嶽」を出せる外、中村傳九郎、早川傳五郎等も多少の作ありしが、いづれも俳優にして兼ねて作者たる者に過ぎざりき。然るに同じ頃に中村傳七（一三八二）あり。始めて作者を專業とし、舞臺大道具に意匠をこらして世人を驚せりといふ。されど其の作見るに足る物なし。その見るに足るべきは京阪には並木正三、江戸には津打治兵衛よりとす。正三（一三九〇―二四三三）は大阪の人、通稱を和泉屋正三といふ。初、並木宗輔の門に入りて淨瑠璃の作を學びしが、寶暦三年はじめて「けいせい天羽衣」なる狂言を作りて大阪三條座に演ぜしめ、これより京及び大阪の間に於て多くの作を出し、舞臺及び裝飾にも意匠を凝して、せり上げ、せり下げ、廻り道具、三段がへし等の仕組をも考案して其の名を一時に馳せたり。彼が作、數十のうち、その主なる物は、

三十石艜始（よどのはじまり）　寶暦九年春　大阪中山文七座

桑名屋徳藏入船物語　明和七年冬　大阪小川吉太郎座

日本第一和布苅（かり）神事　安永二年春　大阪中村歌右衛門座

宿無團七時雨傘

又有名なる「宿無團七時雨傘」（一名岩井風呂）は、明和五年の頃床屋茂兵衛なる者、馴染遊女お富を殺せる事あるを一夜附に作り、若太夫の芝居にて演ぜしめしに、敵役中山卯八が相貌、茂兵衛に似たりと云ふを以て大當を取り、又曲中に正三自ら出でゝ茂兵衛に異見をする所等あるを以て、世の注意をひきしと云へど、一說には古き「比翼鳥部山」等を新しき體に直したる譯物（かもの）にて、彼の作に非ずとも云へり。

並木五瓶

正三の同門に、並木丈助及び同永助あり。又正三の門下に、並木五瓶及び奈河龜助あり。五瓶は大阪の人、初、辰岡萬作に狂言の作を學びしが、後正三の門に入りて其の名大に著る。寛政六年江戸に下り、京阪の風を移して多くの作を出し、文政五年二月六十二歲にして歿す。その作中最も有名なるは「金門五三桐」「島巡戲聞書（ウワサノ）」「平井權八吉原衞（ガヨヒ）」「隅田春妓女容性（カタト）」等なり。就中「島巡戲聞書」は薩

奈河龜助

摩の武士早田八左衞門が、大阪新地櫻風呂の抱女菊野といふを殺害せし事件をば、西鶴の「五人女」或は近松の「小萬源吾兵衞薩摩歌」などの名に借りて仕組める物なるが、大阪にても當を取りしを、後江戸に下りし時、之を潤飾して「五大力戀緘（コヒノフウジノ）」と改題し、傳内座にて興行したりしに、大に好評を博して七十餘日の大入を占めきと云ふ。彼の後に二代五瓶、三代五瓶あり。共に江戸の作者として多少の作あり。

奈河龜助は、もと大和奈良の人。放蕩にして遊里に耽湎し、一時河内の緣家に寄食せしが、後大阪に出でゝ作者となる。奈良河内の頭字を取りて其の稱とはせしなり。その作多からずと雖も

競伊勢物語（はでくらべ）　安永四年四月　大阪嵐座

伊賀越乘掛合羽　同　六年春　同上

加賀見山廟寫本（さとのきがき）　天明元年春　大阪藤川座

の如き尙今に傳へて名あり。

造物（だうぐにして）高欄附の高舞臺、筬欄間蔀半御簾、見付狐格子、階、幕の内に、惟喬親

王、惟仁親王、紫の冠衣裳にて、二重舞臺に揺り居る。惟仁の次に昭宣、惟喬の方には宗岡、公家の形にて居る。其外公家四人並び、階下に宿彌藤太、大紋かけ烏帽子、此見えよろしくありて幕開く。

淨瑠璃「大極兩義を生じ、兩義變化して五行となる、五行の相生相克は、並び廻れる車輪の如く、母子夫婦の道に叶ふ、文德帝のしろしめす、時代ぞ盛りなりける。然るに聖壽去年の春崩御なし〳〵、雲隱れにし諒闇に、空位の月日程經れば、御兄宮惟喬親王、御弟宮惟仁親王、孰をか御即位あるべしと評諚の月卿雲客、玉欄に袖を列ね、威儀とう〳〵と並ゐたり、補佐の良臣堀河の大臣昭宣卿、笏取直し、ト音樂になる。

昭宣「今日諸卿の奏する旨餘の儀にあらず、御忌既に明きたる上は、御遺書に隨ひ、惟仁親王御即位の良辰を選み給ふべきことしかるべう存じ奉り升。

宗岡「イヤ昭宣の詞其の意得難し、正しく御兄宮惟喬親王をさし置き、弟子に御位を讓らんとの御遺勅合點參らぬ。何は然り嫡子を立つるは神國の掟先例は外されぬ。昭「アイヤ〳〵それは一應の理と申すもの、惟喬君御位に即き給ふは順道と申しながら、御遺勅に背いては、子として父に背く不孝、却て是を逆と申さん、人々何れと思召す、サ諸卿の批判承はらん。惟喬「ヤア だまれ昭宣、其方の妹高子は美人の聞え、是にをる弟惟仁に戀わびをると聞及んだ、子に甘い母皇后、東の五條の館へ高子姫を呼びよせ置き在原の業平が取持にて、表向は業平が戀慕と見せ、築地の崩れより人知れず通ふこと、知るまいと思ふか、夫を其儘さし置く其方が心底、惟仁を位に即けて外戚の威を振はん巧と、丸が推量違は有るまい、返答あらばいへ聞かん、なんと。昭「コハ怪しからぬ御疑ひ、妹高子は染殿の皇后のお召に隨ひ、東の五條きさいの御所へ遣し置く、いかなる子細か承はらねど、密に忍ぶものありと聞き、番人の附置しは愚臣が計ひ、或夜築地に張紙して、人知れぬ我通ひ路の關守は、宵々ごとにうちも寐なゝんとの一首、何人の歌かは知ねども、此昭宣が番人を据ゑ守らせし證據明白、夫は格別、君は正しく閏月の御誕生、日蝕月蝕の生れに勝つて位に即かれぬ御身、さるに依て先帝の御遺勅承りたる某、忌中過ぎなば開くべしとの御遺書、大切の品なれば寶藏にをさめ、御番は即ち先帝の

隨身伊勢の介藤原の繼景是を守り奉る。斯く明白の義を押して、今更御論有るべきやうはムり升せぬト。

淨瑠璃「聞くよりはつと燃ゆる火の、水打ちそゝぐ御氣色に、ふすぼり返つて伴の宗岡。

宗「イヽヤ其遺書合點參らぬ。先帝の御震筆を似せ、得て勝手を書散したでがなあらう。高子姫にうつぼれ、お通ひなさるゝ惟仁君、內證は聟舅、必竟が緣者の證據、テモくらい〳〵ト。

淨瑠璃「傍若無人にいひ破れば、堀河の家臣斑鳩藤太、ものに堪えぬ血氣の武士、階下より飛上り。

藤「宗岡卿最前より、主人昭宣、事を分けて述べらるゝに、勿體なくも御遺書を贋筆などとのゐんざん、其上押して惟喬親王を御位に進むる非道の有條、但し閏月のお生れでも、御卽位の先例有らば仰られよ承らう。宗「ヤア陪臣の身を以て、慮外の一言退り居らう。

淨瑠璃「退れやつと呵りつけ。

宗「神代より傳はりたる三種の神器、八咫の御鏡は先年紀の名虎生害の砌より行衞知れず、まつた十握の劍は、御惱平癒の御祈願あつて在原の行平に預け給ひし所、何者か奪ひ取りしと自身の奏聞、其罪に依つて津の國須磨流人となり、今に於て在所知れず、相殘る神璽の御筥、先帝宗岡を召され、御位は惟喬君に讓るべき旨を以て預け給ふ、證據の御遺書は似せられうが似せられぬは神寶、我館の寶藏に納めあれば、惟喬御卽位有らんに、よもや批判は有るまい、諸卿其旨相心得られて可からう。昭「大切なる御遺書は沙汰にも及ばず、神璽を人知れず奪ひ取り、帝の崩御を幸ひ御遺勅と申しなば、扨は爾うかと事を納むるは政道の暗き所。宗「何がなんと。昭「サア篤と虛實を糺した上、諸卿の賢談有りたきもの。ト

此の頃に及びては、舞臺上の約束のいたく整頓せるを見るべし。

其の門に七五三助あり、古淨瑠璃、古芝居の添刪を專とせしにより洗濯物の七五三助と稱せられき。その弟子篤助、篤助の門下晴助、本助あり。作者として甚だ名あるものにあらず。又別に辰岡萬作、近松德叟あり。德叟は半二の門

近松德叟

下にして德三と云ひしもの。その頃古市にて藝妓殺のありしを仕組み、狂言「伊勢音頭戀寢刄」を作りしより其の名を揚ぐ。其の外讀本を改作せる者に「柳」自來也談」、「舞扇南柯噺」等あり。馬琴の八犬傳を改作して「花魁荅八房」を出せる西澤一鳳も亦當代に名あり。

西澤一鳳

彼は元祿の西澤一風が孫にして正本屋利兵衛といひし者。今まで脚本が芝居の臺帳と稱して俳優の手びかへのみに備へられしものを、彼に至りて始めて之を版行し、正本ととなへて諸人に讀まし

正本版行

むる事となせり。嘉永五年五十一歳にして沒す。

さて此の間に於ける江戸藝壇の狀況如何を見るに、前章述べたりしが如く淨瑠璃は京阪まづ榮えて江戸之につぎ、京阪衰ふるに及びて江戸始めて隆盛を見たりと雖も、歌舞伎狂言は殆どそれらと趣を異にし、作の性質こそ同じからざれ、その進歩發達の狀に至りては或點まで東西歩調を一にせるを見るは興味ある事なり。

津打治兵衛

大阪の並木正三に少しく先立ちて、俳優と作者とを分業して江戸作者中興の祖と云はれたる者を津打治兵衛(二三四三―二四二〇)とす。彼はもと大阪の

作者と俳優

二代治兵衛

俳優津山治兵衛の子。元祿十四年二月既に市村座の爲に「傾城乳母櫻」を出して京阪の風を江戸に移せりといへば、其の頃既に江戸に下りしものか。併も彼が作者として其の名を揚げたるは「一心二河白道」(寶永七年三月中村座)とす。こは清水清玄と丹波與作とを綴合せたるものにして、これより江戸の狂言は四番續となれりと云ふ。爾後、彼は二代目團十郎、坂東彦三郎等の爲に多くの作を出せしも、多くは時代と世話とを取合せ、甲の筋と乙の事件とを綴合せて趣向を立つるを得意とし、眞に創作と見るべきもの無きは惜むべし。彼が言に「もとより作者は役者の氣がねをするが家業にて皆々の氣に入るやうに作つてやるが卽ち作者なり」と云へるが如く、斯道の文學者は世間の寵兒たる俳優に隷屬する者にして、彼等を指導すべき者たる自覺を有せず、而して主者たる俳優はもと下賤なる歌舞伎者の發達せるに過ぎざれば、眞摯なる文學者を斯界に招致し、又眞正なる創作を出さしむる事能はざりしは止むを得ざる有樣なりしなり。彼は寶曆十年七十八歳の高齡を以て歿す。或は八十二歳とも云ふ。彼が門に津打傳十郎あり、二世治兵衛と稱し「矢の根」「帶引」「石橋」等、

墻越榮陽

櫻田治助

淨瑠璃の趣向に妙を得たり。同時に藤本斗文、中村清三郎等あり。少しく後れて墻越榮陽(二三八一―二四三八)あり。主に市村座、森田座の爲に作を出し、舞臺面の變化に心を用ゐたりしが、尙、常盤津文字太夫の爲に淨瑠璃を作りて、一狂言中必ずこの一幕を出すことなせるは、長く後世の範となれる仕組なり。金井三笑、その子松井由輔、中村重助等もまた當代の作者なり。榮陽の門中最も名を得たるを櫻田治助(二三九四―二四六六)となす。江戸の人、初、津打治兵衞に學び、後榮陽の門に入りて作者となる。世話狂言の脚色に得意にして著作百種の上に出づ。天明二年秋、中村座の爲に新曲「高尾懺悔」なる淨瑠璃を作るや、開場に先立つて山東京傳を訪ひ之を示す。京傳

年があいてのたのしみは、やがておの字の名をつけて、無理酒呑まぬ身とならば、すあしもやぼな足袋になり

の句を以て非常の名文とし、たゞ「無理酒呑まぬ」の一句を改めて「二日醉せぬ」となさば如何にと語りしに治助喜んで之に從へりと。文化三年六月七十三歳にして歿す。遺言して曰はく、吾が歿後佛事を希はず、たゞ江戸狂言をして滅せしめざれ、今後三十年を經ば狂言まさに俳優の手に出づべし、つとめて此の弊を防ぐを要すと。その作に心厚かりしを見ると共に、俳優跋扈の風既に甚しかりし狀想見するに足る。彼が作中「御攝勸進帳」は最も當れりと云ふ。

御攝勸進帳

長唄　湖出市十郎　三味線　芥屋六三郎　同喜三郎　めりやす　錦木

「爰は山陰森の下、月夜烏はいつもなく、我は戀故なき明す。ひさけの水の沸きかへり、胸にせまるも女氣の、思ひかへ〳〵おゝさりながら、

ト相の手、

忍「情ない我が君樣、我身の上を思ひ思うた義經公は、父上に隔てられ、お宮仕へも免されず、剩つさへ斯樣に繩目に掛る女子のはぢ、いか成る因果な身の上ぢやなア、思ひ切らうと思うても、思ひ切られぬ忍が心を思ひやり、義經公には露程も可愛と思うて下さんせいなア。

ト泣出す。

「我身の由緣薄紅葉、涙の露の亂れ髮、亂れ染めにし陸奥の、誰が手をふれん賤が錦木、

ト唄きれる。此内雪次第に降り積る。忍苦しきこなし色々有るべし。とゞ釣鐘の繪圖をきつと見て、

忍「此撞鐘をつく〳〵と見るに付けても妬ましや、初夜に殿御を待ち初めて、後夜に逢瀬の睦言を、早曉もきぬ〳〵の、鐘に急るゝうき思、嬉しいに附け悲しいにつけ、わらわが殿御義經公、岩手姫とはそはさぬ〳〵、女の思が有る者か無い者か、今に思ひ知らせうぞ、義經樣に逢ひたい我が君樣のお側に居たい、戀し床しと思ふ身の、積り〳〵て降るならば、今降る雪と諸共に、消えなん物を此命、まなごの庄司が娘にも、やはか劣らん此の忍、忍が思を思ひ知れ。

トいろ〳〵こなし有つて、忍、此鐘の繪圖を踏むとごんとなる、どろどろにて此繪圖の上燒酎火もえる、忍、急度思ひ入れして、

「今思はずも此鐘を踏めば、ふしぎや鐘の音の、夫か有らぬか聞えしは、忍が心の通ぜしかても恐ろしい物ぢやなア、

ト忍、又繪圖を踏む。又ごんとなる。是をきつかけにて方々にて遠ぜめのなりものする。忍急度思ひ入れして、

「扨は思はず響きたる、鐘を合圖に我が君樣を、寄せくる人の物音か、是に附いても義經公の御身の上、此繩切つてお供せん、さうぢや、

ト身もだへする、大どろ〳〵にて燒酎火もえいましめの繩を燒きき る。思ひ入れして忍奥へかけ込まうとする所へ、ばた〳〵にて秀衡出で忍を引き戻し取つておさへ、首を切り袖に包んで這入ると、和泉の三郎出てねたばを合する。奥より高衡此體を見て直に舞臺へ出て、立ち廻りにて引き留める。

鶴屋南北

其の門に二代治助あり三代治助あり。女形俳優として名ありし瀬川如皐もまた狂言を作り、これにも二代三代あり。この外、寛政、文化の頃に最も名ありしを世話物の作者鶴屋南北(二四一五—二四八九)とす。彼はもと勝俵藏と云ひ、俳優鶴屋南北の女を娶りしによりてその名を襲へり。五代目松本幸四郎、三代目坂東三津五郎、五代目岩井半四郎等の藝風を會得し、之に合せて狂言の作をなしたりしを以て、其作常に世の迎ふる所となり、彼の名江戸にかなびすし。就中、お染久松色讀販」は半四郎が七役早替を以て世を驚かし、「四谷怪談」に

南北物

は菊五郎がお岩の幽霊「隅田川花御所染」には半四郎の女清玄にて常りを取れり。彼は常に凄味を好み、多くの怪談をものして好奇なる人氣に投じたりしかば、世にはこの類を南北ものと稱し、棺桶を用ゐる芝居をば時の人直に作者を南北と思へりと云ふ。文政十二年七十五歳にして歿す。その下に數代の南北あり。

○

本舞臺元の伊藤の屋敷になる、上手障子家臺に床を敷き、其上にお梅下着にて待つて居る體、二重の上に喜兵衛、お弓、乳母おまき并び居る、時の鐘しんみりとした合方にて道具止る。

喜「最早しらせが有りさうなものじやて。弓「爾うでムんす、さりながら産婦もあるし、内の場合が悪うムんせうわいナ。まき「モウ御得心の上は、お案じなされ升ないナア。梅「お目に懸らぬ内は、どうも心が。喜「落付くまい。俺も心が落付かぬ。弓「まさ「遲い事でムり升るなア。　此時橋懸りより伊右衛門出來り枝折を明けてすつと這入る。伊「嘸お待兼でムらう、いろ〳〵取込だ儀がムて、思はぬ遲刻。喜「ヲ、伊右衛門殿か、皆が待兼娘は猶の事。弓「大抵待つた事じやムらぬわいなア。まさ「サア〳〵是へお越なされませ。伊「然らば。ト二重舞臺へ伊右衛門上る。「何から申さうやら、先刻お内から戻りまして内の樣子を見れば、お岩と日雇ひ仲間の小兵衛と不義働き居るを見付け、據無く武士の習、兩人共に仕留め、諸人の見せしめの爲に、裏手の川へ戸板に打付け流しましたれば、最早必置く事は無し、御安堵なされて娘御と、夫婦になされて下されい。喜「ヤ、思はざる凶事、併し拙者は娘の爲に先は、重疊目出たい吉左右。梅「そんなら貴方のお家樣は、小兵衛とやらと。弓「密通の顯れ、殺されたといなう。まさ「日頃のお願ひ此方の身には。まさ「目出たい〳〵。皆「併し餘程夜も更たれば、萬事は明日取極めませう。梅「何卒お願。伊「左樣致さう。弓「私は奥へ乳母と一緒に。まき「參りませう。喜「拙者はこれにて宿置の微睡み。伊「左樣なら就も方。皆々「おやすみなされませ。ト おまき二重の下へ喜兵衛が床敷て屏風立てる、奥へ式禮してお弓と共に

這入る、物凄き合方になり伊右衛門床の上へ上る。伊「イヤもう嘸お待兼でムらう、其の效あつて今宵は相互に打解けて語ひなせう。ト此臺詞の内薄どろどろにて、鼠出てお梅に纏ふと無言にて後へ倒るゝ。伊右衛門捨臺詞にて、上手の家體へ行く、始終薄ドロ〳〵。伊「コレお梅殿、其樣に恥かしがることは無い、最早さしあひ無い、今宵は緩りと二世の堅めをコレお梅殿。ト云ふと仕懸にて、お梅の身體よりお岩の顏出て。岩「怨めしいこちの人。伊「ヤ、お岩か南無阿彌。一刀に首をぼんと切る、トよき所へお梅が死骸と本まの首落つる、伊右衛門見て惚りし。扨てはお岩と思ひつるに、お梅であつたかヤ、、、、、○舅殿大變でムる、不思議な凶事にてお梅を。ト二重下の屏風を明ける。ト小兵衛伊右衛門の子を抱いて喰殺して居る、伊右衛門惚りする。小「旦那樣藥を下せへ。ト手を出す。是も一刀に首を切る、トよき所へ喜兵衛の死骸と本首出る。伊右衛門見て惚りして。伊「ヤ、、、、、扨は小兵衛と見えたるは舅殿が。之も二人が○恐ろしい。ト刀を捨て尻居にへたる。ト木の頭。執念じやよナア。トきざみ拍子木、此見得宜しく拍子幕。

（いろは假名四谷怪談第二段）

河竹新七

現代に及びて九代目團十郎、五代目菊五郎等の榮えし間に立作者たりし、二世河竹新七（二四七六―二五五三）三世河竹新七（二五〇二―二五六一）はまた南北の門流より出でし者とす。この外三升二三次、花笠文京以下多くの作者あり

脚本の價値

と雖も、皆學なく識なき幇間者流にして史上注意すべき創作を出せるなく、改作補綴を事としていづこにも清新の氣を認むること能はざるものゝみなり。蓋し歌舞伎は俳優の物にして作者の物にあらず、さきに津打治兵衛が「作者は役者の氣がねをするが家業にて」と云へる精神は、いづこまでも附隨せるを以て少しく氣慨ある文學者は、甘じて此等の作に從事するを好まざりしが如し。脚本は純粹なる戲曲として詩中最も價貴き物なるべきに、わが國のそれに散文の馬琴、淨瑠璃の近松に比肩すべき文學者を出すこと能はざりしは、全くこれが爲に外ならず。俳優の跋扈は明治の時代に至りても猶其の餘勢を存し、新脚本の作せらるゝもの相續いて出づるが如しと雖も、未だ會心のものある に出逢はず。三十年來新派の藝風生じて、脚本にまた新しきものを試用す。

何時かは其意義に於ける劇詩も作出せらるべきか。これ吾人の鶴首して待望する所なり。

歌舞伎の世界

因に記す。當代の歌舞伎狂言は、その取材卽ち舞臺面の性質によりて大凡四種に別たる、これを世界と云ふ。初の淨瑠璃は多く歌舞狂言の筋を借り、後の歌舞伎はまた、淨瑠璃の改作補綴甚だ多ければ、この四種の世界の分類はまた淨瑠璃文學にも通ずべし。

王代物

一王代物。禁中の事件、公卿の狀態等總じて朝家に關する筋を仕組めるもの。淨瑠璃にては「大内裏大友眞鳥」、「妹脊山婦女庭訓」の類。歌舞伎には「競伊勢物語」、「天滿宮榮種御供」の類是なり。

時代物

二時代物。歷史物の中にても所謂武家に關する事件にして、源平、北條、足利、菊地、大友等の軍記に材料を取れるものなり。「義經千本櫻」、「北條時賴記」、「國性爺合戰」の如き卽ちこれたり

御家物

三御家物。同代の武家社會に起れる大事件を仕組めるものにして、時代にもあらねば又世話とも云ふべからず。是に尙騷動と復讐との二別あるべし。「仙代萩」「鏡山」の如きは御家騷動に屬し、「伊賀越」、「忠臣藏」の如きは復讐ものと云ふべし。

世話物

四世話物。同代の平民社會に起れる事件を趣向とせるもの。これにも男達と情死との二別をおくべし。演劇中これに屬するもの甚だ多し

又後代正本の版行せらるゝに至りし頃より脚本(正本或は臺帳)の書式始と一定せられ、まづ始に舞臺の模樣、大道具小道具の配置より衣裳鳴物、淨瑠璃の文句、及び臺詞に順序正しく書き連ねたるものにして、殊に臺詞は脚本の重要部たるは云ふまでもなく各人の臺詞毎に頭に一を引き、役者の思ひ入れある所には○を挿み、仕草ある所には臺詞の次に一段下してトの字を記し、その下に仕ぐさを書く、これをト書といへり。

以上の脚本及び前節の歌謠は、德川期全體に亘れる敍述にして、特に沈滯時代の文學と見るべきものならねども、これを各時代に分たんこと極めて困難にして、理解にも甚だ不便を感ずる點多ければ玆に集めて一節とせるなり。讀者諸氏の諒察を請ふ。

第五節　國學と和歌

文運東遷

寶暦、明和、安永、天明の間は前期の韻文漸く惰氣を帶びて、後期の散文未だ其の光を發揮するに至らず、たゞ平民の勢力によりて發展したりし大阪が、漸く衰頽し來れる間に、殺伐木强なる武士に横行せられたる江戸が、次第に文藝に馴れ染むべき機運に進みつゝありし時代なりき。換言すれば文運方に東遷して德川文學第二の精華を、幕下の江戸に繁榮ならしむべき地盤を建設しつゝありし間と見るを得べし。この期に於て特に注意すべきは、國民の自覺と漢學勃興の反動とによりて起れる國學の研究が、此の時に及びて江戸に根據を据ゑ、陰に陽に殆ど凡ての文藝に影響を與へしといふ事なり。今爰に少しく之が根本動機の一たりし國學の狀況及び國學者の製作につきて敍ぶべし。

賀茂眞淵

享保の頃京都の荷田春滿、國學を唱道し、復興の風を鼓吹せしことは既に前期の條にてこれを述べたり。其の門に賀茂眞淵(二三五七—二四二九)あり。遠州濱松の人。岡部を氏とす。農家に生れて旅宿に養はれ、初は漢籍を學びて詩文をもよくせしか、享保十八年三十七歳にして大志を立て、京に上りて荷田氏の門に遊び、深く國學の精を極む。後十年寛保三年初めて學を齋して江戸に出で、博く子弟に敎へしが、延享三年田安家に聘せられてよりは其名聲大に振ひ、致仕して後、濱町に田舍風の住居をなし、縣居(あがたゐ)と稱せしより、人皆名を云はずして縣居の大人と呼べり。彼が主義とする所は、師が古典研究の本意に一歩を進めて、歌文の標準を純朴なる奈良朝に求むるのみならず、萬事を擧げて古の單調にかへさんと欲するものなりき。さればその著書數十種、多く考古註解に關し、斯道の後輩を啓發し指導せる事甚多く、自作の歌文亦皆古調を主とし、研究によりて得たる伎倆を以て能ふ限に古語古句を運用し、意(こゝろ)古にかへり言葉古を、用ゐて、全く古き文學を再生せしめんことに勉めたり。契沖長流は古典を研究したりき。されど自ら萬葉集の歌を詠ずんとするではつとめざりき。その美醜及び文學としての價値は暫くおきて、この特色は眞淵翁に至つて始めて見る所の特色なり。

縣居歌集三卷、賀茂翁家集五卷は翁が創作を收めたるもの。

岡部の家にてよめる

年どしに　しぬびまつれば　ふる里に　在すがごとく

常はしも　思ひてしものを　何しかも　もとな歸りて
逢ふ人に　言とひぬれば　父のみの　父は在さず
母そばの　母も在さず　然はあれど　吾妹なねの
かしらには　白髮生ひて　かなどより　出づるを見れば
母刀自は　いましにけりと　立ち走り　入りてし見れば
面には　皺かきたりて　よろぼへる　吾をしも見て
いもなねは　父來ましぬと　いぶかしみ　思ひたりけり
かたみに　言をも問はず　白玉の　涙かきたり
むかひ居て　古しぬぶ　事ぞさねおほき

原月

播磨路や夕霧はれて久方の月おしてれりいなみ野の原

彼は、明和六年十月七十三歳にして江戸に歿す。其の門人甚だ多し。就中本居宣長、村田春海、橘千蔭、荒木田久老、建部綾足、田中道麿、小野古道、揖取魚彦、加藤美樹、山岡俊明等最も名あり。

本居宣長

本居宣長(一三九〇—一二四六一)。勢州松阪の人、木綿問屋小津三四右衞門定利の子たり。享保十五年を以て生る。廿三歳の時、京に出でゝ醫を學びしが、側、契沖、眞淵の著書を讀んで大に感じ、數年の後、鄕里に歸りて醫を開き、其間頻に古典を修む。たゞ〳〵眞淵翁命によりて山城、大和、伊勢を廻り、又松阪に來る。宣長悅んで之を旅館に訪ひ、請うて弟子となる。時に年三十二歳なり。これより其の敎を奉じて深く古典を研究し、殊に古事記に關しては心血をそゝぎ、以後三十餘年間研究と著述とに專心從事したりき。されば其の著作約六十種。古事記傳四十四卷の大を始め、宣命には歷朝詔詞解三卷、萬葉集には玉の小琴二卷、古今集には遠鏡六卷、新古今集には美濃家苞五卷、源氏物語には玉の小櫛九卷、及び音韻語學に關するものゝ甚だ多し。春滿、眞淵によりて開拓せられたる國學は、實に彼に及びて秩序整然として學術としての體形を成就せるかの感あり。其の門下に名を連ぬるもの數百人、就中本居春庭、同大平、鈴木朗、藤井高尙、平田篤胤、石川依平、伴信友、夏目甕麿、田中大秀等有名なり。豈に盛ならずや。その創作を收めたるを

宣長の著作

宣長の門下

鈴廼舍集七卷とす。文辭もとより古を主とすと雖も、師翁の如く高きに失せず、用語の整頓せることは一歩を進めたり。

述懷

昨日は今日の昔にてはかなくのみすぎに過ぎ行く世の中をつくづくと思へばあはれわが世も幾程ぞや。手を折りて數ふれば早や三十路にも餘りにけり。命長くて七十八十生けらむにてだに早く半は過ぎぬるよと思へば、まだ世ごもれる樣なる身も行先程なき心地のみして心細くぞ覺ゆる。かくのみはかなく心なき木草鳥獸の同じつらになにすとしもなく明し暮しつつ、生ける限の世をつくしていたづらに苦の下に朽ちはてなんはいと口惜しく云ふかひなかるべきことと思ふにも、萬に至り少くつたなき身にしあれば、何事をし出でゝかは世の人にも數まへられ、無からん後の世に朽ちせぬ名をだに止めましと、いとゞ人に似ぬ愚ささへ取りそひて悲しく心うかりけり。さりとてはた身をえうなきものにはふらかしつべきにもあらず、かくのみ拙く愚なる心ながら何業にまれ怠りなくわが心に入れて勉めたらむに、遂には一つのゆえづけてなのめにし出づるふしもなどかなからんとあいなだのみにかゝりてなむ。

○

あめはるゝ軒のしづくを涙にてなく音おちくる山ほとゝぎす
里遠みたどる末のゝ夕ぐれにしるべうれしく立つ烟かな
敷島の大和心を人とはゞ朝日に匂ふ山櫻花

宣長と同門にして特に歌文に秀でたるを村田春海、橘千蔭の二人とす、春海(二四〇六―二四七一)は江戸の人、通稱平四郎、錦織齋、琴後翁等と號す。初漢藉を學びて詩文をよくし、後縣門に入りて古典を學びしかば、唐宋八家の風格を移して巧に之を和文に施し、取捨折衷して別に一家をなせり。其の歌文を集めたるを琴後集十五卷とす。

王昭君

雪まじり　霰みだれて　夜もすがら　〔北吹く風の
あらましき　夜床の上に　つくづくと　枕そばだて

來し方を　思ひ出づれど　人の世は　夢なりけりな
しづだまき　賤しき吾も　宮姫と　數まへられて
小籠の内に　いつかれし世は　綾錦　袖にかさねて
白玉を　かづらにしつゝ　ます鏡　見る面影の
かぐはしき　花のゑまひを　我ながら　われとたのみて
大君の　めぐみの露し　普くは　もれじとこそは
思ひつゝ　ありけるものを　さがなきや　筆にまかする
寫繪は　あらぬすさびの　僞を　正しもあへぬ
うきふしは　せんすべをなみ　いひしらぬ　國の境に
遙々と　出で立つ道に　おき添はる　袂の露の
消えかへり　引き留めたる　駒の上に　暫しかきなす
曲の緒の　絶えぬうらみを　はるけなむ　世こそ知られね
をしからぬ　命と思へど　塵の身の　散りも失せなで
春立てど　花も匂はず　秋來ても　紅葉も見えぬ

橘千蔭

荒山の　岩がきこもる　伏庵に　われにもあらで
いたづらに　年は重ねつ　思ひきや　言もかよはぬ
國人を　夫とむつびて　手弱女の　まとひもなれぬ
皮衣　袖さしかへて　諸寢せむとは

反歌

春の日の光もうすき古塚に草のみどりやいかにのこせる

橘千蔭(二三九五―二四六六)。加藤氏、江戸の人、幕府の與力たり。歌文をよくし書畫に亘る。家の集をうけらが花五卷とす。

隅田川のほとりなる石濱の庵にて雨の中に作れる文

は月はつか餘り秋のけはひのなつかしくて例の隅田川のほとり石濱の庵に行きて宿りぬ。有明の月の匂も霧たちわたる曙のさまも、所から世に似ぬものから、こゝは雨のそぼふる日なむことにあはれは深かりける、もとよりかやふける庵なれば、音だになくて軒のしづくのみつよくおちそむるより、雛の萩の下葉の色付きたるが、ほろ〳〵と散るも哀れなり。水の面は

うごくともなくて鏡の如くなるに、雲のこきうすきうつろひて、かつ浮びかつ消ゆる水沫にこそ、雨のけはひはしるかりけれ。みをの一すぢはさしひく汐にもまじらで、とはに花田の色に流れいにて沖に出づめり。これや水上の秩父の山のまし水の落ち來るならむ。打向ふ岸のはり原のみ、濃き墨がきの如くなるが中に、ぱゝその黄ばみたるは、さすがにほのかに見えてそのひまゞ〳〵より、長き隄の見えわたるに、つゝみのをちなる梢は、やう〳〵にうす墨もてかきけちたらむが如く、いとしも遙けきは、たゞなびかぬ烟とのみぞ見ゆる。

國學者の輩出

春海、千蔭等共に多くの門下を敎ふ。就中春海の門下高田與清、岸本由豆流、清水濱臣等、千蔭の門下大石千引、加茂季鷹等最も名あり。又加藤美樹の門に上田秋成あり、荒木田久老の門に足代弘訓あり、塙保巳一の門に中山信名、屋代弘賢、石原正明あり、彼等又次々に門流を出して國學に貢獻する所少からず。此外此等の系統に屬せざる學者橘守部、石川雅望、村田了阿、富士谷成章、狩谷望之、伴蒿溪、谷川士清等も相尋で競ひ起り、辯難攻擊、爲に古典研究の蒙を啓き幽をあらはせる所甚だ多し。安永、天明より文化、文政に亘れる間は、實に國學の隆盛期を以て稱すべし。されど云ふまでもなく國學は學術研究にして文學創作にはあらず、此等學者は兼ねて歌文をも製作したりと雖も、そは專門的研究によりて得たる結果を、演繹試用したりといふに止り、嚴密なる意味に於ける創作とは見るべからず。言ひ換ふれば彼等の歌文は擬古にして、新しき人心の琴線に觸れたる自然の聲にはあらず、古典を研究せる人の間に弄ばれたる復古的興味にして、一般國民の嗜好とは云ふべからざりき。

德川初期の和歌

たゞし此の間、復古的國學の以外に立ちて、和歌の道をなせるものなきにあらず。これより先、從來の所謂師範家の流を受けたる歌人に烏丸光廣(二二三九—二二九八)、有賀長伯(二三二一—二三九七)あり。流石に元祿の盛時に逢ひて、多少清新の調を試みたりしが、師範家の形式論は尙滔々たる無學者の間に行れて、其の說と作と殆ど聽くべからず、見るに堪へざりき。この風に反抗して起れる者は卽ち復古學派の國學にして、其の研究の主義のみならず、歌文の創作をも併せて尙古の風に從はしめんとする、一種の不自然の調に向ひしこと

復古派の和歌

小澤蘆庵

は前に述べたる所の如し。されば宣長、春海等も多少不知不識の間に新調を出したる跡を示すと雖も、未だその癖を脱して創作の本義に還れるものにあらざりき。不完全乍らもこの本義の自覺に到達せる者は、むしろ舊派の歌流に屬する京都の小澤蘆庵(一三八三―一四六一)なり。彼はもと尾張の人、武技を能くす。歌を冷泉爲村卿に學びて出藍の譽あり。人となり方正にして忠孝を重んじ、志士蒲生君平を好遇せし事あり。歌は舊派の用語に定限を付し天才を束縛するの愚なるを喝破せりと雖も、また當代の國學者が多く古を尙びて己を僞る多きにも與せず、古語もよく己に同化して平易淡懷必ず眞心を歌はんと欲したりき。卽ち曰はく「あまねく世にみち〳〵て誰も知れることばをもて卅一文字につゞくるを歌といふなり」と、又「おのがいはるべき程を知りて心を平易にして理正しき詞をもて一筋につゝくれば自らよく聞えて別にならふことなし」と。尙歌つて曰はく「いにしへは大根はしかみにらなすびひるほし瓜も歌にこそよめ」と。

人の世の富は草葉におく露の風の間を待つ光なりけり

香川景樹

今朝見れば燒野の原となりにけりこゝや昨日の玉敷の庭

今は世をうづさ人になりはてゝ都は雲のよそにこそ見れ

大井川月と花との朧夜にひとり霞さぬ浪の音哉

彼が立脚地は師範家の傳統と復古學派の學癖と鼎立して、然も最も有望なるものなりき。この主義を祖述大成して一世を風靡せる者は、同じく京都に住せる香川景樹(一二四三〇―一二五〇三)となす。蘆庵が享和元年七月七十九歳を以て歿せる時は、彼が三十四歳の時なりき。

景樹はもと因幡鳥取の人、本姓は荒井氏、桂園と號す。幼にして歌才あり。京に出でゝ香川黃中に學び、後養はれて其の家をつぎぬ。常に弟子に誨へて曰はく、歌は詞を主として談理をなすべきにあらずと。堂上流及び復古流の風を顧ずして頻りに新語を用ゐぬ。蓋し彼の歌學に於て蘆庵に一歩を進めたるものは、歌の意と詞とを相應せしめて聲調を整ふべしとせる點にあり。今古の傑作いづれかこの實を得ざりしものぞ。或は規を嚴にして用語を束縛し、或は古を尙びて一も二も昔に從はんとする如きは、眞に美術の何物たるを

門下

覺らざるものゝ所爲なり。末代の景樹に至りてこの了解を見たるは、消えかかりし少さき和歌の燈、再び微光を顯せるにも譬ふべし。此の時や國學の大勢は所謂平田流の神道と、語學的研究とに專らなりし間なるを以て、この歌學は彼等學者輩の大なる抵抗を受けず、一代の秀才を招いで其の門下に集らしめぬ。穗井田忠友(二四五二—二五〇七)、八田知紀(二四五九—二五三二)、渡忠秋、熊谷直好(二四四二—二五二二)は彼の四天王と稱せらる。天保十四年三月歿す。年七十六。家集を桂園一枝二卷とす。文政十一年版、歿後拾遺集一卷の編あり。彼れが歌學及び學殖を覗ふべきものに古今集正義、新學異見、百首異見等あり。其の門下の明治の世に生存せるもの少なからず。殊に渡忠秋の如きは今代に桂園派の勢力を扶殖するに與つて力ありき。木下幸文(二四三九—二四八一)及び菅沼斐雄、柳原安子も桂園門下の俊秀とす。

おぼつかなおぼろ〳〵と我妹子が垣根も見えぬ春の夜の月

徒に思ひし峰の一つ松こよひ月こそすみのぼりけれ

あさなぎに網引やすらむ菅浦のかすみを傳ふ海士の呼聲

長歌の消長

おぼつかな木の間にみゆる三日月もちるばかりなる木枯の風

夢ならでたど〳〵しきは目に見えぬ神をしるべの敷島の道

おりたちて昨日かつみしせり川のたけだのはらに秋風ぞ吹く

平安朝以後跡絶えたりし長歌が、眞淵等の復古派によりて形のみながらも回復せられたりしに、桂園派起りて歌權全く其の手に歸してより、長歌また殆ど煙滅せり。畢竟一種の貴族的文學として、其の消長はわが全國民文學上に重大なる位置を有する物にはあらざれども、細く長き國風として尙多少の注意を拂ひ置かざるべからざる事項なり。

以上眞淵等の復古派を、更に萬葉派と稱し得べくんば、景樹門下の主義をば古今派と稱するも可ならんか。然るに近代、兩派のいづれにも偏せず、固より萬葉古今の歌は學べりと雖も、猶初より己れの好む處によりて其の天才を發揮せる歌人も無きにあらざりき。志濃夫廼舍歌集を殘せる橘曙覽、草徑集を刊行せる大隈言道、及び其の弟子たる野村望東尼の如きは注意すべき人々なり。

橘曙覽

橘曙覽は越前福井の人。本居宣長の風を慕ひ、その弟子田中大秀に親炙す。

人格高邁にして俗を離れ、萬葉より出でゝよく一家の風をなしぬ。晩年王政復古を歌へる歌の如き、よく彼が思想を反映せるを見る。慶應四年五十七歳にして歿す。

あるじはと人もし問はゞ軒の松あらしといひて吹きかへしてよ

顔をさへ紅葉にそめて山ぶみのかへさに來よる人のうるさゝ

かきよせて拾ふもうれし世の中の塵はまじらぬ庭の松の葉

天皇は神にしますぞ天皇の勅としいはゞかしこみまつれ

天が下清く拂ひて上つ世の御まつりごとに復るよろこべ

物部もおもておこしと勇みたち錦の旗をいたゞきてゆけ

大隈言道

大隈言道は筑前福岡の人。夙に和歌を學び、又廣瀬淡窓の塾に漢學を受く。彼の歌は輕妙にして高逸、近代歌壇の天才と云ふべし。慶應四年七十一歳にして歿す。彼の歌集には草徑集の外、今橋集戊午集あり。

川水もそなたへよりて流れ行く梅の木蔭のなつかしきかな

くまゝにかくれ〳〵て行くものを身にさしあてゝ吹く嵐かな

はてもなき軒の雫にいつまでかうたるゝ桐の一葉なるらむ

いつよりかおもて雛びて老のどちいづれも同じ友垣ぞかし

わが身こそ何とも思はね女子どものうしてふなべに憂きこの世かな

野村望東尼

野村望東尼は福岡のほとり平尾村の人。幕末志士と交ありしは世の普く知れる處。大隈言道に歌を學びてよく一家を成しぬ。

みな人の心は闇になりぬるを月の空には浮雲もなし

今日ひと日風に吹かれて櫻花弱りはてゝも散る夕かな

あけ渡る山の端見れば春もいま楸の門わけて來るこゝちする

第五章　江戸時代（二四四七―二五二七）

第一節　文化文政の江戸

大御所の治世

德川氏江戸に府を開きしより茲に一百八十年、代を重ねること十代、内治外交次第に繁きを加ふるに至れりと雖も、幕下の江戸は、今や盛なる文華の中心となり、士民上下既に泰平になれて、苟も安逸を希ふの風を生じ來り、天明七年、大御所家齋十一代の將軍として職に備れるより、天明、寛政、享和、文化、文政、天保の

間は德川氏榮華その頂點に達し、下には國民の自覺と外交の刺激とによりて、次第に武家の世の傾くをも覺らざりし頃なりき。この間凡そ五十年、さまこそ變れ、げにその昔御堂關白が繁榮身に極まりて子孫の福德をこの一代に枯せしにも比しつべきか。平安朝の泰平は藤氏の安逸を意味し、都鄙遠近は必ずしも叛亂盜賊の憂無きにあらざりき。大御所の殿中年立ちかへりて、靜けき風枝を鳴さずと見えしも、實は外交のこと、海防のこと、大に議すべく、尊王的精神次第に志士の間に充實しつゝありし間なるを忘るべからず。家慶、家定、家茂を經て慶喜に至り、大政を奉還して代は王政の古に復りたる事、恰も賴通敎通に傳へて、大權、院の御手に收められ、藤氏はたゞ員に備はるに過ぎざりし運命と相似たらずや。されど藤氏の安逸は優雅なる多くの文學を出したりき。寛政以降の江戸また多くの文學を產出せしむるを得たりしなり。たゞし、文運東遷して上方の韻文衰へ、之に代りて江戸に淨瑠璃榮えし由は前に述べしが、ついで、脚本、小說、俳諧ともく〳〵出でゝ江戸の文壇を賑はし、文化、文政、天保を經て近く明治の初年に及びしなり。此の中特に江戸文學として尊重すべきものは韻文にあらずして寧ろ散文小說にありとす。藤氏榮華の間、歌人に公任、和泉式部等あり、拾遺集、拾遺抄等の選述、歌合、歌の論の盛なるものありきと雖も、畢竟世は散文小說、隨筆、日記によりて代表せらるゝと軌を一にすと見て可なるべし。今當代の隆盛なる散文を敍するに當りては、まづ古きに溯りて其の原始の狀態より覗はざるべからず。蓋し江戸の散文は、第一期、第二期の京阪文學を繼承せりと云ふよりは、別に其等の期に於て江戸に生長せるものと見るを當とするによりてなり。俳諧、狂句等の輕文學もまたこの第三期を兼ねてこの期に敍すべし。これ理解に便なるものあるを信ずればなり。

第二節　俳文學

德川文學の第三期に於て重要なる文學が、一般に沈潛せる間、國學の隆盛につれて和歌の活動のやゝ見るべきものありしが如く、俳諧の短き詩形にもまた多少の活動ありしを見る。

和歌流行して師範家生じ、師範家生じて和歌邪道に陷りたりしと同じく、元祿以後、點取俳諧の流行は却つて俳諧を弄して、佶倔の風、卑俗の調となさしめし

俳諧の微光

由は前に云ひぬ。この間に於て尚注意すべき價値あるものは、伊勢派より出でたる綿屋希因、白井鳥酔、美濃派の系によれる横井也有等なるべし。

希因
　盗人の後で棒ふる柳かな
同
　筒井筒朽ちにけらしな苔の花
同
　桐の實のふかれ〳〵て初時雨
鳥酔
　雛棚や昔ありける女顔
同
　閑古鳥舟は向ふの岸にあり
同
　門々の闇からふえる踊哉
也有
　初午や柳は緑小豆めし
同
　井戸堀の浮世に出たる暑さかな
同
　大將は負れて出るや螢狩
同
　追剝のながめて通す紙衣かな

天明の革新

かくて安永、天明に及び、輕薄邪曲に陷りし俳壇に於て、鳥酔、也有等に殘存せる斯道の光明をたどりて、正風の復興を成就せるものあり。谷口蕪村（二三六六—二四四三）、炭太祇（二三六九—二四三一）、三浦樗良、加舎白雄、加藤曉臺、大島蓼太、高桑闌更、高井几董となす。

元祿の昔に於ける芭蕉の俳味は、豪放なる談林風に對して幽遠閑寂の趣ありしに、これは纖巧機警にして聲調の美を尚ぶ點に差異はありと雖も、失はれんとせる詩界を復活せしめて、俳諧を文壇上の物となさん事に勉めたる點に於ては其の軌を一にす。天明の俳人は常に自ら蕉風と稱しぬ。たゞ其の向ふ所が新しかりしのみ。

白菊に露置き得たり置きえたり　嵐山
　のこりそめぬる今朝の月かげ　几董
借馬に秋を涼しくまたがりて　樗良
　濃酒ありと婦の申しけり　蕪村
小暗きと明きと燭の二所　董山
　手こねの香爐うち守りつゝ　山村
かくて世に四位となるべき身なりしを

野上の君が色にしづみぬ　　良

（一夜四吟の一巻）

俳諧の本義は二句の附け方、三句の移の外、一卷の首尾の上に妙趣を要する物なるに、當代の俳諧は二三句の附味には機警の趣を有するも、全篇の始終に於て甚だ單調なるの憾あるは、此時代の彼の時代に及ばざる點なるべきか。されどこの特色は確に俳句の上には成功せり。元祿の蕉風は比較的單調なる閑寂主義によりて、自然界を題目とする事多かりしに、これは多端に人事を觀破してその內面をも描寫せんとしたるは、題材の一轉進と言はざるべからず。もとより自然界の客觀的描寫にも見るべきもの少からず。

蕪村

蕪村。谷口、また與謝を姓とす。攝津の人、夜半亭と號す。若年江戸に出でゝ早野巴人（其角の門人、後雪門に入る。）に學び、滔々たる俳壇點取と酒色とに忙はしく、名利の宗匠數十を以て數ふるが間に立ちて、徐に彼が錦心を練磨せりき。彼が師巴人は既に時弊に入ること少き俳家たりしなり。

鳴きながら河越す蟬の日影かな

女郎花折るや觀世が駕のうち

埋火や野邊なつかしき路の臺

蕪村彼に就いて俳を學ぶや、極めて自由なる思想を鼓吹せりき。蕪村の「昔を今」の序に曰はく「亡師予に示して曰はくそれ俳諧の道や必ず師の句法に泥むべからず時に化し忽焉として前後相顧みざる如くなるべしとぞ此の一棒下に頓悟してやゝ俳諧の自在を知れり」と。

柳散清水涸れ石ところ〴〵

腰ぬけの妻美しき炬燵かな

うは風に蚊の流れゆく野河かな

烏羽殿へ五六騎いそぐ野分かな

御手討の夫婦なりしを更衣

さしぬきを足でぬぐ夜や朧月

五月雨や大河を前に家二軒

負けまじき相撲を寢物語かな

太祇

春雨や綱が袂に小提灯
春の海日ぬもすのたり〳〵かな
亀山へ通ふ大工や雉子の聲

太祇。姓は炭、江戸の人、後、京に上りて彼の地に住む。その長とする所は人事にあり。

蕪村の多面なるには一歩を譲ると雖も、佶倔卑俗を離れてよく俗事を美化せる手腕、決して凡と云ふべからず。天明の俳壇は彼の爲に大に振へるものと云ふべきなり。

年玉や利かぬ藥の醫三代
藪入の寢るや一人の親の前
欺いて行きぬけ寺や朧月
朝寒や旅の宿たつ人の聲
寐よといふ寐覺の夫や小夜砧
行く程に都の塔や秋の空
踊らせぬ娘つれ行く十夜かな
犬を打つ石の扨て無し冬の月

樗良

樗良。志摩の人、始め伊勢派の乙由に學び、後蕪村と共に天明の新風を唱ふ。その才固より蕪村に及ばざること遠しと雖も、平淡にして雅趣を有し、當時伊勢派の俗調を拔出す。

山寺や誰も參らぬ涅槃像
火とぼしてあはれに見ゆる螢かな
長き夜をさま〳〵思ひあかしけり
兄弟か同じ聲なる鉢叩
我庵は板ばかりの落葉かな

白雄

白雄。は、信州上田の人、春秋庵と號す。江戸に烏酔に學びて多くの門下を敎ふ。纖麗の作風よく敍景に長ず。

美しや春は白魚かいわり菜
二またになりて霞める野川哉

土舟や蜆こぼるゝ水の音

人戀し火ともし頃を櫻ちる

花芥子に組んで落ちたる雀かな

めくら子の端居淋しき木槿かな

曉臺　曉臺。尾州名古屋の人、蕪村に私淑す。その句道、勁を以てまさる。

雪解や深山ぐもりを啼く鳥

日暮れたり三井寺を下る春の人

鯛のなけば瓢の花落ちぬ

秋の山ところ〴〵に烟たつ

蓼太　蓼太。江戸の人、吏登に學び蕪村に模せりと雖も、漸く耳近くして俗氣を帶ぶるに至りしは、既に後世月並派の先驅たるものか。俗間に傳唱せらるゝ句二三を例せば。

愚にかへる曉聲や鉢叩

秋の雨胡弓の絲に泣く夜かな

世の中は三日見ぬ間の櫻かな

五月雨や或夜ひそかに松の月

むつとしてもどれば庭に柳哉

馬借りてかはる〴〵に霞けり

更くる夜や炭もて炭をくだく音

闌更　闌更。加州金澤の人、希因に學びて、京に住す。平淡溫雅の中、少しく卑俗の風を帶ぶ。

川船や雲雀啼き立つ右左

五月雨や鼠の廻る古葛籠

冷飯に秋立つ獨住居かな

枯蘆の日に〴〵折れて流れけり

當時の俳人　尙同代の俳士中主なるものゝ二三を云へば、

憂き戀に似し曉や年忘　青蘿

蘭の香や袴著習ふ女の童　麥水

家遠し海苔干す女何諷ふ　移竹
しみ〳〵と秋を惜みぬ二三人　嘯山
萩の花一もと手折る長さかな　百明
朝寒や關の扉の開く音　蝶夢
大佛の柱潛るや春の雨　二柳
黒髪の顔へこぼるゝ砧かな　涼帋
曲水に病後の僧の苦吟かな　召波
春の寒たとへば蕗の苦みかな　成美
門口に風呂たく春の泊かな　几董
朝霧や二人起きたる臺所　同

蕪村太祇等によりて復活せられたる俳諧は、恰も古今集の古を望める新古今集の當時の如し。而も定家、家隆等の明星凋落して世は二條、冷泉等師範家の説を尊奉するに至りしは、文政、天保に及びて俳諧が卑俗に陷り雅致なく趣味なき野談平語となり下れるに比すべし。これらの傾向を代表するものは成

田蒼虬、櫻井梅室等とす。

刀もさゝで同役へ行く　蒼虬
齒の藥こぼれぬ樣にもの云ふて　梅室
うつくしけれど酒は手强き　虬
ろの羽根の袖にかゝるを涼しがり　室
うなりの長き芝の大鐘　虬
木戸明けて鍵を下げたる有明に　室
菊に寢たがる犬たゝきけり　虬
宮樣の御用の芋はこゝらから　室
無分別にはからかふが無駄　虬

櫻持ちて人は歸るに旅の空　蒼虬
鶯や隣まで來て隙のいる　同
靜なるものを丸めて秋の月　同

小林一茶

元日や鬼ひしぐ手も膝の上　梅室
湯屋の噂人見下して御慶かな　同
名月や草木に劣る人の影　同

更に雅趣ある所を見出し得ざるにあらずや。たゞ此の間に小林一茶(二四二三―二四八七)あり、洒脱にして滑稽の作に長ず、談林に似て談林ならず、地口に近くして毫も野卑なる憾なきは、他に於て比を見ざるものあり。

陽炎や手に下駄はいて善光寺
下谷一番の顔して衣がへ
キリ〳〵しやんとして咲く桔梗かな
行秋を尾花がさらば〳〵かな
下駄ころりからりきやつらが夕涼

されどこはひとり一茶に於てこれを見るのみ、他の滔々者流に至りては既に墮落陋俗、濟ふべからざるものあるに至れり。

俳諧は斯くの如くにして俗調に陷りぬ。されば市井の間之を弄ぶもの日に多きを加ふと雖も、そは無學者俗輩の尙入るに易かりしが爲にして、文壇爲に多幸なりしにはあらざりき。かくて數十年の後、明治の近代に新派の勃興を見るまでは、此の調は文壇以外に下層社會の翫物となり畢りぬ。

俳家の着眼は自然を寫し人事を撮るに他と自ら異る趣を有す。此の着眼を散文上に移したる者は所謂俳文なり。芭蕉以來この風の文數々出で、許六が編せる風俗文選中多くこれらを載す。

鹿島紀行　芭蕉

洛の貞室、須磨の浦の月見に行きて、

松かげや月は三五夜大納言

といひけむ、狂夫のむかしもなつかしきまゝに、此秋鹿島山の月見んとて思ひ立つことあり。伴ふ二人、ひとりは浪客の士、一人は水雲の僧、僧は鶉の如くなる墨の衣に、三衣の袋を襟に打ちかけ、出山の尊像を厨子にあがめ入れて脊中にせおふ。柱杖曳きならして、無門の關もさはるものなく、天地に獨歩して出でぬ。今ひとりは僧にもあらず俗にもあらず、鳥鼠の間に名をか

うふりの、鳥なき島にも渡りぬべくて、門より船に乘りて、行德といふ所に至る、船をあがれば馬にのらず、細脛の力ためさむと歩行よりぞ行く。甲斐國よりある人の得させたる、檜もてつくれる笠を、おの〳〵戴きよそひて、やはたと云ふ里を過ぐれば、かまがいの原といふ廣き野あり。春旬の一千里とかや、目も遙に見渡さるゝ、筑波山むかふに高く二峰ならび立てり。かの唐土の雙劍の峰ありと聞えしは、廬山の一隅なり。

雪は申さず先むらさきの筑波かな

とは、我門人嵐雪が句なり、すべて此山は日本武尊の言葉をつたへて、連歌する人のはじめにも名つけたり。和歌なくばあるべからず、句なくば過ぐべからず、誠に愛すべき山の姿なりけらし。萩は錦を地に敷けらんやうにて、爲仲が長櫃に折入れて、都の土產に持たせたるも、風流にくらからず、きちかう女郎花かるかや尾花みだれ合うて、小男鹿の妻戀ふ聲いとあはれなり。野の駒、所得がほにむれありく又あはれなり。日既に暮れかゝる程に、利根川のほとりふさといふ所につく。此川にて鮭の網代といふものをたくみて武江の市にひさぐものあり。宵の程その漁家に入りてやすらふ。夜の宿腥し。月くまなく晴れけるまゝに、夜船さしくだして鹿島に至る。晝より雨しきりに降りて、見らるべくもあらず。麓に根本寺のさきの和尙、今は世を遁れて此所におはしけるといふを聞きて、尋ね入てふしぬ。頗る人をして深省を發せしむと吟じけむ、暫く清淨の心を得るに似たり。曉の空いさゝか晴れぬるを、和尙おどろかし玉ふれば、人々驚き出でぬ。月の光雨の音、たゞあはれなる景色のみ胸に滿ちて、いふべき言の葉もなし。はるばると月見に來たるかひなきこそ、ほいなきわざなれど、かのなにがしの女すら、時鳥の歌得讀まで歸りわづらひしも、我爲にはよき荷擔の人ならむかし。

月はやし梢は雨を持ちながら　芭蕉

雨に寢て竹おきかへる月見哉　什良

姨捨山賦　椋良

更科の月明らかなる八月八日の夜、姨捨山に登れば、鏡臺山は冠が岳のむかふにたてり。筑摩川花やかに麓をめぐり、雲井橋は名のみして水上の月を

やどす。田毎の水の音は、ひとへに山の松風にしらべあへり。寶が池、蛙が池、更科近く流れ、稻荷山、八幡の里、川中島は白雲のたち居に見え隱る。吹く風精神をせめて直しく、見るものの目に動きてあはれなり、粥をすゝり香を炷して、しばらく石上に心をすます。

自然人事の觀察に趣味あるが中にも、簡潔と機智とは此の種の文の特色とする所なるが、安永、天明の間、俳諧再興の頃に當りて出でたる横井也有(二三六二―二四四三)に至りてこれを大成し、和漢の故事と通俗の人事とを說いて意想天外より落つるの觀あり。彼は尾張の士、性洒落にして俳をよくす。文集の勝れたるものを「鶉衣」とす。行文輕妙、滑稽を恣にして卑俗に陷らず。蓋し滑稽文の上乘なるものなり。

百蟲譜

蛙は古今の序にかゝれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。おぼろ月夜の風靜まりて遠くきこゆるはよし。古池に飛んで翁の目さまさしたれば、このものゝ事さらにも誘りがたし。

芋蟲は腹たつものにたとへ、毛蟲はむづかしき爺の號とす。春むし客むしは名のみにして蟲ならず。油蟲と云ふは蟲にありて惡まれず、人にありてきらはる。蟹のあゆみに譬ふべきものこそなけれ、たゞ原吉原を籠にのりて、富士をながめ行く人には似たり。

借物の辨

昔男ありて、身代もならの京、春日の里にかす人ありてかりにいにけるより、やごとなき雲の上人も、かりにだにやは君はこざらんと、露深草の深入りしたまへば、鬼の樣なるものゝふも霜月頃よりは、地藏顏して人にたのむのかりがねは、尾羽うち枯して春きても越路にもかへらず、かりの宿に心とむなと人をだに諫むる先達も、からでは現世の立ち難きにや、二季の臺所には懸乞の衆生來りて、色衣の長老これが爲に拜み給へば、又ある寺には有德の知識ありて、これはこちから貸し付けてきりの算用滯れば、貧なる檀方を呵責し給ふ。

近年新派の俳句勃興せると共に、この風の散文も人の試むる所となり、特に寫

生文として、小品にも小説にも應用せられ、率直にして古典的束縛を離れたる一種の風骨は、現代文壇の一部を彩る物となるに至れり。

第三節　狂文學

冠附と前句附

物盛にして必ず分岐を生ず、茲に俳諧の附合より一轉したるものに冠附及び前句附といふあり。冠附とは上に五文字を題として之に七五の句を附け、前句附とは七七の句を題として別に五七五の句を作るにあり。德川氏の初より早く始りしものゝ如く、元祿十三年の頃の古本に既にこの事見え、寶曆、明和以後盛に行る。

題　一二町　　附　行いてはたゝく雪の下駄
同　いつの間に　　同　片しは失せて雛の後家
同　いろ〳〵に　　同　つかふ寡の一つ鍋　〔冠句附の例〕
題　きびしかりけり〳〵
附　日の本はそらまでとゞく假名遣
　江の島のしけは嘶の種になり

川柳の狂句

てゝ親はいつも母より目が屆き
御地頭は米のかげにもたかくなり　〔前句附の例〕

寶曆、明和より安永、天明に亘りて前句附の點者に柄井八右衞門あり。號を綠亭川柳と云ひ、達眼を以て人に推さる。前句附の題を廢して單獨なる附句のみの短詩を始む。彼の創始に係るによりて川柳と稱し、その內容が、俳句は寂(さび)の中に自然、人事を歌ふ優長なる趣味を特色とするに反し、川柳は用語の何たるを選ばず、うがちの中に滑稽を求めて、警句よく人の興を催すを性質とするが故に、また狂句とも稱せらる。

一時のはぢ一生の德となり
結納をおつかなそうに覗いて見
小便もせずに平家は船に乘り
ねがはくは嫁の死水とる氣なり
そへ乳してつひ洗濯が夢になり
武者一人叱られて居る土用干

狂歌

末長くいびる盃姑さし

湯殿から忘れた時分よめは出る

風ふけばどころか女房あらしなり

仙人さまあとぬれ手でだきおこし

門口に下女が親父はいなゝかせ

何とも申しかねぬから借りに來る

仲人は酔うて云ふのがほんのこと

釣れますかなどゝ文王側へより

川柳の狂句が俳句の優雅より一轉したると殆ど軌を同じうして、和歌の狂態を弄ぶものに狂歌（狂歌は興歌にて興に乘じて戯れたる也との説もあり。）あり。由來わが國民の快濶性は早く萬葉集中に戯歌を有し、古今集中に誹諧歌の名ありしが、佛教的冥想の感化ある所、未だ充分の發展を見ることなくして近古の世に下りぬ。鎌倉、室町の代に及びて戯曲に狂言の一藝世の迎ふる所となりしが如く、歌にも滑稽諧謔のものを生じ、建保二年（一八七四）東北院念佛の時、上流の人々十二番の職人を題目として歌合せることあり、（詳書類從雜部に收む。）其の後（年代未詳）これに倣ひて鎌倉鶴岡八幡放生會に於ても、十二番職人歌合の戯をなせし由傳ふ。されどこの體を狂歌と稱して世の弄ぶ所となりしは、室町幕府の世以後なるべし。（平家物語に、仲綱の「伊勢武者は皆緋威の鎧著て宇治のあじろにかゝりけるかな」とあるも狂歌の體なれど、この辭はなし。太平記十四に「其比（建武二年）何某なる嗚呼の者かしたりけむ、内裏の扉に一首の狂歌なぞ書きたりける。賢王の横言に成る世中は上を下へぞ歸したりけるなどあるぞこの名の物に見えたる始なるべき。）永正に狂歌合（一卷、永正五年正月二日會合。左右十番より成る。詳書類從雜部に收む。）もまた多くの趣味ある狂歌を有す。

左　鍛治

月にねぬ宿とや人の思ふらむいつも絶えせぬ相槌の音

右　番匠

墨がねの直きをたゞす身なれども傾く月にかふはりぞなき

（東北院職人歌合）

左

思ひ寢の程も恥し正月のもちひを食ふと夢に見しかな

右

御祝のよそにさゞめく響をもきかぬ耳こそびんぼうげなれ　（永正狂歌合）

山陰や木の下やみの黒米のつきいでゝこそしらけそめけれ

豆かくるさはりもいとゝまさる哉せとの高木の葉がくれの月　（七十一番職人歌合）

徳川時代に入りて連歌の變態たる俳諧の流行せし頃、京阪の俳師にして、側、狂歌を作れるもの往々出づ。嬉遊笑覽に「後世は連歌師また俳諧師の詠りしを、專ら好みてよめるは、建仁寺雄長老、八幡山信海、生白庵行風、江戸に德元、卜養、未得等就中聞えたり云々」と。狂歌詠方初心式に

牛井卜養風

布袋殿しんかんしんとして御座る内にはいもひもしんも有

生白堂行風風

一番の風の手なみに雪氷川下さして雜亂（サラ）〳〵〳〵

豐藏坊信海風

何にやら似たもの人のあだ口はまことに浮世の嵯峨の松葺

落首雜談風

木綿物著たる男はさもなくて絹きる人の慾のふかさよ

鯛屋貞柳

元祿の頃難波に鯛屋貞柳（二三一四―二三九四）あり。淨瑠璃作者紀海音の實兄たり。八幡山の信海に師事して狂歌を學ぶ。その友、奈良古梅園、大なる墨を造り「て禁裏の叡覽に供したりしを

月ならで雲の上まですみ登る是はいかなるゆえんなるらん

と狂じ、これより油煙齋の號あり。享保十九年八十一歳にして歿す。辭世の句に曰はく。

百居ても同じ浮世に同じ花月はまん丸雪は白妙

松尾芭蕉

同じ頃の松尾芭蕉にもまたこの試あり。狂歌猿の腰掛に、

是翁俳諧のみならず狂歌にもあそびしにや

などてかくいそがしいとて二階から落ちての後は隙になりけり

あみざこを升にはかりて賣人は買人よりも哀なりけり

風になびく富士や三里に灸すゑて行衞も知らずあるく西行

など詠みすてられしことあり内外俳道の祖とする貞德、宗鑑、守武を始め皆

狂歌の獨立

狂歌數首あり、狂歌俳諧その源一也、俳諧は連歌によりて狂し、狂歌は本歌を基として狂するなれば云々。

よく當代狂歌の消息を傳へたりと云ふべし。其の後安永、天明の頃に至つて、文運東遷し、狂歌も京阪を去りて江戸に移るや、茲に從來俳師の餘興としてのみ行ひ來たりし隷屬の狀態を離れて獨立の地歩を占め、狂歌師を以て專門とする者出で、江戸ッ子の特性と見るべき輕快機智を發揮するに至りたり。當時狂歌師の主なる者を唐衣橘州、四方赤良、宿屋飯盛、朱樂菅江、手柄岡持等とす。

唐衣橘州

橘州は小島源之助といひ四谷に住す。始め和歌を學び、安永四年二月始めて狂歌會を起して友を集めしより、四方赤良、大根太木、大屋裏住、平秩東作、元の木網、其の妻智慧内子、朱樂菅江等相ついで集り、鹿都部眞顏、馬場金埒、つぶりの光、三陀羅法師、芍藥亭長根等も亦風をのぞんで起り、天明三四年に至り、德和歌萬載集十七卷、同後萬載集十五卷、故混馬鹿集二十卷等の選ありしより、狂歌は實に一種の勢力となりて、この道に名を出せるもの忽ち幾萬の多きに上れり。豈に盛なりと云ふべからずや。就中最も勝れたるを四方赤良、宿屋飯盛とす。

四方赤良

宿屋飯盛

赤良(二四〇九—二四八三)は本名太田覃。南畝、蜀山人等の號あり。滑稽諧謔の間に放浪せる一代の奇士にして、狂歌壇上獨歩といふべし。狂歌髑の跋に「先生之於狂歌實中興之祖也」と贊せるは方に當れり。其の歌集を千紫萬紅、蜀山百首とす。飯盛は本名石川雅望、六樹園と號す。國學に精通して有名なる雅言集覽の編あり。赤良の豪宕はこれなしと雖も、辭句整ひてよく可笑味を有す。

菜もなき膳にあはれは知られけりしぎやき茄子の秋の夕暮　橘州

風鈴の音はりんきの告口か軒ばのつまに秋の通ふを　同

わが戀は旅の行手の長縄手たゞ果もなくまつばかりなり　同

鶯は竹に生れし故やらむ聲のびやかに節の程よさ　同

生酔の禮者を見れば大道を横すぢかひに春は來にけり　赤良

世の中はさてもせはしき酒の燗ちろりの袴きたりぬいだり　同

ほとゝぎす鳴きつるあとにあきされたる後德大寺の有明の顏　同

すみ田川今は吾妻の都鳥業平などは在五中將　同

山の神さつた峠の風景はみくだり半にかきもつくさじ　同
歌よみは下手こそよけれ天地の動き出しては溜るものかは　飯盛
はつ咲の梅は秤か市人の二りん三りん爭うて見る　同
わざはひも三年ばかりふる壁の鼠穴よりはいる梅ヶ香　同
霞さへ春さへ今朝はたつものを餅はすはりの腰の重さよ　菅江
天の原月すむ秋をまふたつに振り分け見れば丁度中まろ　同
爭はぬ風の柳の絲にこそ堪忍袋ぬふべかりけれ　眞顏
春のくるけしきの森の下蕨手をかざしては延び上りけり　同
吉原は花のさかりになりにけり吉野ははだし傾城は下駄　岡持
十五夜としころ引きあふ十三夜月の影きよ雲のみほのや　東作
鶯も蛙も同じ歌仲間經よむもありたゞ鳴くもあり　裏住
かくばかりかはる姿や梅干も花をさかせしすいの身のはて　木阿彌
多かりし酒屋のかけもこりずまに今朝とり上ぐる屠蘇の盃　つぶりの光
雪ならばいくら酒手をねだられん花のふゞきの志賀の山越　金埒

きぬ〴〵の情をしらば今一つうそをもつけや明六つの鐘　三陀羅

前の引文の如く「狂歌は本歌を基として狂するなれば據り處たる古歌古文を知了せざれば以て可笑味の全般を解すべからず。これ寧ろ和歌の狂態と云ふべくして純然たる平民文學とは稱し難き點なり。この精神を散文に移したる者は狂文なり。四方赤良の「よものあか」、四方の留糟」を始め、風來山人の六部集、山東京傳及び式亭三馬等の戲作中に見るべきものあり。

狂歌新玉集序

久かたの天、輕口をひらき、あらがねの地、重口をむすびしより以來、神代のむかし、天鈿女の乳房には、猿田彦も手裏を拍ち、月の御國、何がし尊者の花には、瞿曇も微笑をゆるし給へりき。されば麒麟に感ぜし翁も時ありて笑ひ、胡蝶となりし白者も笑を大方にとらん事を愧ず。青樓の春の風に、千々のこがねの笑をかひ、廬山の雨の夜に、三つの笑ひの友を偲ぶなど、いづれか笑の種子ならざる。わきてあら玉の年立歸る朝には、山も笑めるがごとしとかや。花になく鳥追も笑上戸の盃を擧げ、街に諷ふ萬歳も舌皷をなん拍ち添

へける。やゝ春深くゑみを含むに到ては、柳は綠の眉を開き、梅は白き齒もとをあらはす。はるの詠めの種々の歌ざれたること、戯たる風をのみ書列ねたる後に、舊年の暮のしまひのをかしき笑ひの中に、劔太刀はかせもちをうしなへるがごとく、武士の道も掛乞に徵られし世の營の唯事まで、つゆ記て一卷とし、名づけて新玉狂歌集といふ。かく頤を解きぬれば、飛鳥川の淵はせゝら笑ふとも、礫石のいはほとなりて、こけ倒るゝほど、うま人のうまきわらひや、いづこのやい太郎冠者、あるにもたらぬわれらまで、この時に生れ遇へるを悅び、弓は袋に治れる代に腹鼓うち、長閑き朝にお茶を沸して、わらはざらめや、樂まざらめや。

（四方の留糟）

妙法蓮華經普門品第二十五牒目爾時無盡橫町と云ふ、喇竿のすげかへ黃楊の櫛、さし櫛の通る新道に黑格子の駒寄作り、血の道の藥と云ふ金看板をかけ、布簾に萬字を染めたるは慥に地獄ならんと思の外、極樂の中品中條流の女醫者、しかと思へばさにもあらず、薪屋藥にはあらねど產前產後を守り給ふ子安觀音の出張なり。觀音はやめの藥を調合して居給ふ折節、表に案內して天の庭戸を押開き入り給ふは、夫とは思ひかけまくもかしこき天照皇太神なり。觀音出で向ひ給ひ是は〳〵どう云ふ因緣でか珍しい神の影向、さあ〳〵是へと合掌してあひさつし給へば、太神宮も三拜し給ひ、拍手二つうつて天の諸手結び十たから結び祝詞して宣はく、今のおたづね申したは外の事にてもなく、去んぬる神在月、日の御崎の大社に八雲立つ出雲八重垣駒込の久兵衞ならぬ八百屋萬の神々、平假名で起請に書るゝ神達迄、のこらず參會しで申合せしは、近年氏子ども殊の外艶氣になり神もゆるさぬ緣を結び、末をとげざる其時は、緣を結ぶの神さんがうらめしいわいナアなぞと、其のうへに手前勝手な緣切の祈禱のと、又しても神おろし、凡夫盛に神々もその政道に手がとゞかず、夫については往古より申子と云ふ事、神の支配とも佛の支配ともさだまらず、さうは〳〵神々も又江の藝者が二てう皷をうちはなつことの如くかいしき手が配らねば、神慮安からず、よつて此の以後は彼の申子の事は佛の支配に定めたく、世尊は孕を守り給ふ佛なれば、此儀內談いたし度く、輪のぶら下つたる御耳を振立てきこしめせ。

道化物語序

初期の江戸

佛語に拈華微笑とあれば、華を拈つて莞爾と笑へば釋迦も迦葉も鵶婆も妓夫も皆一樣と思へども、腹を抱へて我から笑ふと、こそぐられて笑ふとの笑ひ樣に差別あり、撒屁の音を聽きつけし姉さんの忍び笑は振袖の外にも漏らねど、もろこしの三笑は日本にまで音響き今に傳へて聞及べり。すべて笑も多かる中に、げら〳〵笑ふは馬鹿笑、呵々と笑ふは小說笑、オホ、と笑ふは御輕薄、アハ、と笑ふは空笑、かんらからとは勇者の笑、カッらからとは軍書讀の笑なり。其の笑を取る者は芝居の道化方なりと思ひ付いたるのべ鏡、だして撮した昔繪は好事家への御笑草、その可笑しきこと御臍をしてたながへなさしむ。かつて聞くだんまり坊、雉子はけん〳〵鳴くばかり、父は長柄の長者が娘、玉屋の花火を好まれし幽王の奥樣から、笑ふて三百つりを取るべき苦虫の先生。

（山東京傳、指面草）

第四節　草雙紙

（式亭三馬、道化物語序）

徳川氏の前半、上方に於ては平民の勢力によりて文化大に進み、散文學に於ては假名草紙より浮世草紙を出して、發達せる小說の體を得たりし間に、江戸は未だ草創の際に屬し、諸事甚だ整はざりし頃なるを以て高尙なる文學の行るべき餘裕を有せず。たゞ韻文としては金平本等の外、目に見るべき文學出でず。散文には文字よりも繪を主とする草雙紙といふもの行れたり。廣義に云へば草雙紙の名の下には、赤本、黑本、青本（一名黃表紙）及び合卷物をも含む。

草雙紙

赤本

始、首題とする所は御伽草紙より出でたる「文正」、「鉢かつき」、「烏帽子折」の如き、童話として行はれたる「桃太郎」、「かち〳〵山」、「猿蟹合戰」の如き、又は「辨慶」、「朝比奈」、「金平」の武勇談の如き、極めて幼稚なる短話を粗笨なる繪にあらはし、その餘白に繪解の文字を入れ、一冊の紙數僅に五葉にて二冊或は三冊仕立なりき。貞享の末より、丹色の表紙をかけ、一面に外題を標せり。世にこれを赤本と稱す。然れども此種の本はたゞ畫工の名を記すに止りて作者の名を署する事なかりしを以て、當時如何なる作者の存在したりしかは明に知るを得ず。繪を主として文章之に從ふが如き狀あるを以て見れば、畫家にして文才あるもの、或は文士にして繪をよくせしものゝ作せる所なるべきか。享保の頃、觀水堂丈阿

黑本

青本
黄表紙

内容の進歩

なるもの始めて著す所の赤本に己が名を署し、下に戯作の二字を加ふ。署名及び戯作の稱は卽ち彼に始る。此頃より黑き表紙を用ゐて黑本出づ。されどそは表紙の異るのみにして内容は殆ど差なし。安永の頃に至りて江戸旅籠町の地本問屋鱗形屋より、萌黄色の表紙に鳥居風の外題繪をかけたる草雙紙を出しぬ。之を青本と云ふ。後、黄色にあらためたるより黄表紙とも稱し、又もとの名に從ひて青本とも呼べり。此の如く表紙は三轉し、彩色繪の外題を用ゐ、又よく賣れたるものは袋入ともなせる事ある程なれば、黄表紙盛行の時に及びては、赤本既に絶え、黑本は古版としてのみ僅に行る。從つて内容も大に面目を一新し、今までは童蒙を離れても、尙、妖怪、實錄、合戰を主なる題目となして、未だ充分なる江戸文學の特色を發揮するに至らざりしに、安永の四年戀川春町が自畫自作の「金々先生榮華夢」二冊を出して滑稽的描寫をなしてより、この趣向いたく世の迎ふる所となり、之より黄表紙は文學として世を諷刺し大人の願を解くものとなるに至りたり。三馬が「臆說年代記」にこを名作廿三部の卷頭に列し、且つ「野暮と化物箱根のさきに送る」と云ひ、「當世風體此の時

戀川春町

明誠堂喜三二

より始る」と云へるはこの進歩し來れる消息を傳ふるものなり。蓋し安永、天明の間は八代將軍が享保の改革に文武をはげまし、殖産の道を奬勵せし結果、上下富有にして風俗婬卑奢侈に進み來り、紅繪、錦繪發達し、淨瑠璃各流競ひ行はれ、遊子通人放逸をあやしまず、芳原、深川は不夜城となり、十八大通の名、人の羨む所となりし時代なるを以て、輕快樂天なる江戸人士の特色は漸く文藝上に現さるゝに至りしなり。先に述べたる狂歌、狂句の起りしも全く此間よりとす。此の間黄表紙の作者として名ある者は、戀川春町、明誠堂喜三二、芝全交、市場通笑、唐來三和、烏亭焉馬等とす。春町は本名を倉橋といひ通稱を壽平と云ふ、小石川春日町に住せるによりて彼の號あり。其著凡そ三十餘種、高慢齋行脚日記」、「鸚鵡返文武二道」、「花鳥かくれん坊」、「三幅對紫曾我」、「楠無益委記」等世に知らるゝ者少からず。又畫を島山燕石に學びたるを以て、かれの雙紙は概ね自畫自作に成る。喜三二、本名は平澤常富、羽後秋田の藩士、江戸に出でて下谷三味線堀の邸内に住す。狂歌を能くして手柄岡持と號す。戯作數十種の内世に稱せられたるを「文武二道萬石通」とす。泰平の餘、諸侯の遊惰に流

芝全交

れたるを諷刺せる趣向なり。「鐘入七人化粧」、案内手本通人藏等亦名あり。

頼朝公御前の人を退けて仰せけるは、如何に重忠、われ四海を治めしより日本の大名小名安堵の思を爲すと雖も武備に怠る心賞すべからず、治世と雖も文ばかりにては治め難し、今鎌倉の大小名、文に傾くもの何程、武に逸る者何程といふ事を汝が智恵を以て計るべし。

重忠「所詮文武兩道を心がくる武士はなければ、どちらへかかたより申すべし、又文でもなく武でもなきぬらくら武士多かるべし、三つに分けてお目にかけませう。

主「お人はらひの御用は何であらう、何か文福茶釜で劔菱を飲むといふ聲が聞えた。

主「ちゝぶ殿はむさうをさとると云ふが、お寺から使のくる事を悟るのかね。

主「さればもし雙六のさいの目の事か。

（文武二道萬石通）

芝全交、本名は山本藤十郎、江戸の人、芝飯倉町に住せる狂言師なり。著す所戯作は三十種、就中「合羽大佛緣起」、「大悲の千錄本」、「拜壽仁王參」、「鼻下長物語」等

唐來三和

山東京傳

最も名あり。三和、俗稱を和泉屋源藏といふ。江戸の人、もと士分たりしが、故ありて流浪し書肆蔦重の義弟となる。天明九年に出せる「天下一面鏡の梅鉢」大に世に行る。此の如くして内容も次第に複雜を要し、寓話、怪談、敵討より世上の情話にもわたり、滑稽のうちに文學的技能をあらはす性質のものとなり來りぬ。これらを隆盛期の前驅となす。

彼等についで出でたるを山東京傳とす。機智に富み文才あり。先輩を凌ぎて青本中興と稱せらる。京傳は本名岩瀨醒、通稱を京屋傳藏といふ。寶暦十一年八月を以て江戸に生る。その先は太田資持の家臣より出で、後、伊勢に住す。父傳左衛門に及びて江戸に出で、深川木場町伊勢屋某の養子となり、二男二女をあぐ。長は卽ち京傳にして次は京山なり。京傳人となり狷介にして奇才あり。狂歌を嗜みて讀書を好まず。畫を北尾重政に學びて北尾政演と號し、初期の畫作はまづこの號を以てしたりき。彼又若くして狹斜の巷に遊び、十八大通の首領たる大口屋治兵衛に從つて流連せりといふ。安永七年、歳十八にして始めて「開帳利益巡禮遊合」二冊を出し、天明二年、「御存知商賣物」を作

りしより山東京傳の名を表しぬ。この雙紙大に世の歡迎する所となり、評判記にも上々吉と稱せられ、京傳の名頓に揚り、これより毎春新作を出して、其の文も大に進み、寛政に及びては遙に衆作者を壓して、隆々の勢一世を靡けたり。然るに彼が滑稽の才は酒落本の作にも適し、多く遊里の情態を描寫し居たりしに、寛政二年幕府令を出して酒落本を禁じ、翌年彼はその科にふれて手鎖五十日の刑に處せられぬ。時に年卅一歳なり。京傳これより巷說をつゞるをはゞかり、滑脫なる黄表紙の作も漸く減少し、內容も一般に變じて敎訓に重きをおきぬ。彼が黄表紙の作數大凡百數十。何れも彼が機智を示すが中に、「御存知商賣物」、「江戸生艶氣樺燒」、「心學早染草」、「京傳憂世醉醒」、「地獄一面照子淨頗梨」等世に知らる。

艶氣樺燒

爰に、百萬兩分限とよばれたる仇氣屋の獨息艶次郎とて、年も十九や廿と云ふ頃なりしが、貧の病は苦にならず、外の病の無かれかしといふ身なれども、生得浮氣な事を好み、新內節の正本などを見て、玉木屋以太八、浮世猪之助が身の上を羨しく思ひ、一生の思ひでに此樣な浮氣な浮名のたつ仕打もあら

ばゆく〳〵は命も捨てやうと、馬鹿らしき事を心がけたり。……偖又艶次郎は、俳優の內へ娘などの驅け込むを羨くし思ひ、近所評判の藝者おえんといふ踊子を五拾兩にて雇ひ、かけ込ませる積にて、惡い思庵に賴ませたれば、かけ込むばかりなら承知しましたと、おえんは早速支度をして、仇氣屋の內へ泣きながらかけ込む。

「自らと申すは、抑よるべ定めぬ轉び妻、此道に住み馴れて人の心を浮氣にする白拍子で御座んす。茅場町の夕藥師でこちの艶次郎さんを植木の蔭から見そめました。女房にする事がならばおまんまなと焚いても居たいのサ。夫もならぬと仰しやれば、死ぬ覺悟でご座ります。

などゝ、注文通りせりふを幷べたてるを、家內の下女共是を聞いて

「內の若旦那に惚れるとは、千家か古流か遠州か知らぬが、とんだ茶人だ。

「若旦那の御顏では、よもやかう云ふ事はあるまいと思つたに、コレ女中さん、門違ではないかの。

「ハテ色男といふ者は、どんな事で難義をしやうか知れぬ物だぞ。最う十

雨やるからもそつと大きな聲で隣まで聞えるやうに頼むぞ。

（江戸生艷氣樺燒）

艶次郎の親、彌二右衛門は、頼んだ事とは知らず、氣の毒に思ひいろ〳〵意見して歸す。

京傳多才にして尙洒落本、讀本の作を出せりと雖も、そは其の條下に讓る。かくて文化十三年九月七日急病を發して歿す。年五十六。

黄表紙の轉化

寛政の風紀振肅によりて一頓挫を來せる諷刺滑稽の黄表紙は、次第に眞摯なる內容の者となり、殊に讐討物の流行を促して、讀本の性質と相近づき、轉じて合卷を生ずるに至りたり。この魁をなせる南仙笑楚滿人とす。通稱を楠彦太郎といふ。江戸の人、芝宇田川町に住す。天明三年『敵討三味線由來』を作れるを始とし、その後數種の作ありしが、寛政七年に至り、『敵討義女英』を出して大に行はれ、これより、敵討物世の迎ふる所となりて年增にその數を加へ來りぬ。

南仙笑楚滿人

敵討物の流行

戲作外題鑑享和四年の條に「敵討の本いよ〳〵行れ京傳馬琴此時より作す、今年の敵討三分の二にして其餘僅に戲作あり」と。文化二年に及びては、「今年新春いろ〳〵敵討多し、戲作十四五に過ぎず。翌年よりは殘らず敵討になりたり」と。

柚人は實に此中心たりしなり。されど彼はもと學才あるにあらず、たゞ〳〵時好に投じたるによりて大に行れしに過ぎざれば、その文藻その趣向今より見るに足るものあらず。その作三百餘種中傑作といふべきは、敵討三組盃外二三を越えず。文化三年式亭三馬が書肆の勸めにより「雷太郎强惡物語」を作して從來の五卷を一冊とし、十卷を前後の二冊となしたるに、表紙外題の數も繁からず、製本も便利にして金子も掛らざるが故に、翌年より各書肆も次第に此風を學ぶに至れり。卷を合せて冊となせるによりて合卷と稱す。

然るに裨史年表に「京傳の作『錢光記』より『大悲利益』まで四部を四季に分けて出版す。最初に上紙摺三冊合卷にて、表紙も上の黄表紙に犬を黑摺にしたり。これ合卷の權輿とも云ふべき歟」と、こは享和二年の事なり。されば合卷の體は既にこの頃より試みられたりしを、文化三年三馬の時に及びて世に行るゝ事となりしものなるべきか。かくしてこの種の雙紙相ついで出でしが、一方、京傳馬琴等讀本に力を盡して、茲に讀本全盛を極むる頃となりしより、合卷もこの影響をうけて之に隷屬することとなれり。そは讀本の條下に述ぶべし。

第五節　滑稽本

滑稽趣味

凡そ輕快樂天はわが國民性の一なりければ、この性情を反映せる文學もとより古に存したりき。竹取物語、落窪物語既に滑稽の分子を含み、古今集の俳諧歌またこの滑稽味にありし由は、前々其の章に述べたりし處の如し。平安朝の猿樂、室町の狂言も、全くこの趣味を以て生命とせるは今更に云ふを俟たず。徳川時代に至りては、俳諧も狂歌も狂句も狂文も、要するに形式若しくは内容の滑稽遊戯に存したりしものなるが、これが散文小説の形となりて表れたるものを滑稽本となす。

輕口

是より先、滑稽咄を以て人の頤を解くものあり。輕口とも云ひ後には落語（おとしばなし）と

醒睡笑

も稱せり。元和の頃、京の安樂庵策傳、咄の上手と稱せらる。其の咄を集めたるものを「醒睡笑」八卷とす。「落語全集」に輯錄。

○わらんべは風の子と知る知らず世に云ふは何事ぞ。ふうふの間のなればなり。

○日本一の鈍なる弟子が、師の噂を云ふやう。坊主のいつも〳〵の事をいうて叱らるゝ中に、近頃聞えぬ無理を三つ云はるゝ。一つは先づ己れをなんぼうの辛苦にて人になりたと仰せある。我が犬の子にてもあらばこそ。性得人の子にてあるを人になりたとは何事ぞや。二つはいかほど氣をつくして經を敎へし。其の恩を仇に思ふとの折檻。これも云はるゝところ道理にてはあれども、その習ひたる經を一字も我が覺えばこそ。みな忘れ果てたるまゝ、少しも恩とは思はぬなり。三つは寺屋敷資財雜具殘りなく汝に取らするはと仰せあれども、これまた少しも恩とは思はぬ。むづかしいに、取つて御歸りあらうまでよ。さあれば三つながら一つも坊主の道理は無いと。

辻噺

あだをさへ恩にて報ういはれあり恩を忘るゝ人は人かは

假名草紙の條に叙べたる「可笑記」もこの性質を有す。元祿の頃、京には辻噺の祖と云はるゝ露の五郎兵衛あり。その噺を集めたるもの「輕口露がはなし」五卷、「露新輕口ばなし」五卷（以上二書近世文藝叢書に輯む。）あり。

雜まめなる書付の事

鹿の卷筆

一、ある人の方へ、夏の頃客來りて、素麺をふるまひけり。からしの粉を尋ぬるに、紙袋に書付なくて、氣のせくまゝにあれこれと搜し、漸々取出し振舞ひ過ぎけり。日暮に及び息子外より歸りき。親父云ふやうは、あの紙袋にはそれ〴〵の入りたる物を書付けよ。總じて書付の無い物は、急ぐ時の役に立たぬぞと云ふ。いかにも心得ましたとて、頓て親父寢られける時、紙帳に大筆にて此内におやぢありと書き付けた。

江戸には仕形話（手まね身振なと。）以て噺すこと。）に巧なりし鹿野武左衞門あり。その噺を集めたるものを「鹿の卷筆」五卷（落語全集に輯む。）とす。

火の見櫓の見立

田舍者三人連にて江戸見物の爲に來りしに、まづ屋敷々々を見あるきけるが、火の見櫓を見つけ、一人の言ひけるやうは、「國元にて聞及びし雲の上人さまと云ふは是にてあらう」といふ。一人が申しけるは、「見れば侍さうなほどに、天竺浪人といふものでござらう。」中にも年の寄りたるもの申しけるは、「屋敷に何に浪人があらう、上に太鼓がある程に、雷の下屋敷だ」と云うた。

この外、當代前後の滑稽噺を集めたるもの、落語全集、近世文藝叢書中に輯錄せらる。此等斷篇的なる笑話が次第に長くなり、首尾の趣向も複雜となり、要するに噺の體を離れて、文學者が人事を描寫する著作的のものとなるに及びて、こゝに滑稽本が生るゝ事となりしなり。寶曆の頃、靜觀堂好阿の「當世下手談義」などやこれが先驅なるべき。安永天明以後この種小說に筆を執るもの相つぎしが中に、最も注意すべきものを十返舍一九、式亭三馬の二人とす。

一九、本名は重田貞一。明和二年駿河町奉行の勘定役の家に生る。人となり放逸不羈にして酒を嗜み、諧謔を好み、職を弟に讓りて一時大阪に居る。近松餘七と稱して若竹笛躬等と「木下蔭狹間合戰」を合作せしは此の間にあり。寛政六年江戸に來りて書肆葛屋重三郎の家に寓し、これより黃表紙、洒落本に筆をつけしも、未だ時好に投ずるに至らず。一九此より筆鋒を轉じて滑稽本の著作に從事せしが、享和二年東海道中膝栗毛初編を出すに及んで彼の名頓にあがり、二編三編より年を經て第八編に至るまで大に世の喜ぶ所となり、發行

の日の如きは顧客の需急にして製本の暇なかりし程なりきといふ。筋は彌次郎兵衛、北八てふ二人の飄輕滑稽なる同士が、東海道五十三次を旅行せる一部の道中記に過ぎざれども、其の筆、婉轉自在にして諸國の方言風土より、失策、破綻、滑稽、諧謔のありたけを寫して、間に狂歌狂句を插みたれば、讀む者皆噴飯抱腹せざるはなし。されど彼は學殖なく主義なき洒脫なる放士なりしを以て、編中卑陋の語猥褻の言、紛然雜然として紙上を汚せる多きは、大に惜むべき所なり。

發語

富貴自在冥加あれとや。磬みたてし門の松風、爰に通ふ春の日の麗さ。げにや大道は髪のごとしと、毛すじ程もゆるがぬ御代のためしには、鳥が鳴吾妻錦繪に、鎧武者の美名を殘し、弓も木太刀も額にして、千早振神の廣前に、おさまれる豐津國のいさほしは、堯舜のいにしへ、延喜のむかしも、目擊見る地になん。いざや此よき、國〳〵の名山勝地をも巡見して、月代にぬる、聖代の御德を、藥罐頭の茶呑ばなしに貯へんものをと、玉くしげふたりの友どち

いざなひつれて、山鳥の尾の長旅なれば、臍のあたりに打がへの金をあたゝめ、花のお江戸を立出づるは、神田の八丁堀邊に獨住の彌次郎兵衛といふのふらくもの、食客の北八もろとも、朽木草鞋の足もと輕く、千里膏のたくはへは、何貝となく、はまぐりのむきみしぼりに對のゆかたを吹きおくる、神風や伊勢參宮より、足引のやまとめぐりして、花の都に梅の浪花へと心ざして出で行くからには、はやくも高なはの町に來かゝり、川柳點の前句集をおもひいだせば

高なはへ來てわすれたることばかり

とよみたれば、我〳〵は何ひとつ心がゝりの事もなく、獨身のきさんじは鼠の店賃いだすも費と、身上のこらずふるしき包となしたるも心やすし。さりながら、旦那寺の佛餉袋を和らかにつめたれば、外に百銅地腹をきつて往來の切手をもらひ、大屋へ古借をすましたかはり、御關所の手形をうけとり、ふめるものは、みたをしやへさづけて金にかへ、がらくた物は店うけにしよはせて禮をうけ、漬菜のおもしとすみかき庖丁は隣へのこし、ちぎれたれど

も縄すだれと油坪はむかふへゆづりて、なにひとつ取りのこしたるものもなく、なだも心がゝりは酒屋と米やのはらひをせず、だしぬけにしたればさぞやうらみん。きのどくながら、これもふるきうたに、

さきのよにかりたをなすか今かすかいづれむくいのゐりとおもへば

打わらひつゝ彌次郎兵衛また狂詩を口ずさむ

雖非亡命可奈何　借金不報擽尻過
夫居本貫掛乞衆　將是川向成二干戈一

うち興じてほどなく品川へつく。彌次郎兵衛

海邊をばなどしな川といふやらん

と難じたる上の句に、きた八とりあへず

されば さみづのゐるにまかせて

いとおもしろく歩むともなしに、鈴が森にいたり、彌次郎兵衛

おそろしや罪ゐる人のくびだまにつけたる名なれ鈴がもりとは

大森といへるは麥藁ざいくの名物にて、家ごとにゐきなふ。

飯にたくむぎはらざいく買ひたまへこれは子どもとすかし屁のためそれより六郷の渉をこえて萬年屋にて支度せんと腰をかける、萬年やの「おなんな」はようございやす彌次兵衛　耶「二ぜんたのみますきだ八「コウ彌次さん見なせへ、今の女の尻は去年までは、柳で居たつけが、もふ臼になつたア……そしてめんよふ道中の茶屋では、床のまにひからびたはなをいけておくの、あのかけものをみねへなんだ。彌次「アリャア鯉のたき昇りよ。北「おらア又鮒がそうめんをくふのかと思つた。彌次「コウむだをいはずと早く喰はつ、汁がさしめらア。北「ヲヤいつの間にもつてきた、ドレ〳〵。トならちやたあり切彌次「もさら〳〵としてやり切ふおはちが零落した。北「又さきへいつて、うめへものをしてやろふ。トそれたりは、ぜにをはらひ、こゝたちいでい行くにむかふよりお大名のぎやうれつ、さきばらひの男、一人は六十ぐらひのおやぢ、一人は十四五のやつこいづれも宿の人足なり先拂「したアに〳〵かぶり物をとりませふぞ。北「かけおち者は下座をしねへでもいゝと見へる。彌次「なぜ。北「ハテかぶりものは通りませふぞといふは。先拂「馬士馬の口を取りませふぞ。北「馬の口もとりはづしができるかのはゝゝ。先拂「あとの人せいが高いぞ。彌次「おいらがことか、高いはづだ。